

紀要

2013



2015年 3 月
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



(表 紙) 弥生時代後期銅鏡
：鹿田遺跡第1次調査

(裏表紙) 奈良時代後半の絵馬 (猿胸曳：復元図)
：鹿田遺跡第24次調査

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要

2013

2015年3月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

本センターの業務の中で、最もベーシックなのは「立会調査」かもしれません。小規模な掘削工事をおこなう際にセンター職員が立ち会い、遺跡にかかわる痕跡や出土品がないかを確認させてもらいます。掘削が造成土のなかでおさまる場合は深さを確認するだけで終わりますが、それより深くなると土層の確認と、簡単な図面の作成や写真撮影が必要になります。

2013（平成25）年度は、この立会調査が非常に多い一年でした。外灯の設置や樹木の移植に始まり、電気や排水管路の工事など、掘削の要因はさまざまです。鹿田キャンパスではJホールなどの建物の新営にかかわる付帯工事が多く、津島キャンパスでは大学会館周辺他の環境整備工事にかかわる調査が続きました。いかに多くの地点で立会調査がおこなわれているかは、本書図27や図37をご覧くださいとよくわかりいただけると思います。また、これまでのすべての調査地点は、図69や図70に表示されています。まだまだ一部であるとはいえ、一定の範囲が非常に高い密度で調査されており、全国的にも貴重な例となってきています。

立会調査の対極にあたるのが、発掘成果展です。2013（平成25）年度は鹿田地区の発掘30周年にあたるため、岡山シティミュージアムの4階展示室をお借りし、「鹿田発掘30年—弥生時代を語る—」を開催しました。事前に、岡山大学病院でギャラリー展示「鹿田荘の世界」をおこない、新たに出土した絵馬を見ていただいたのも、新しい試みでした。また、地元の鹿田小学校には、出土した土器などを持参して鹿田遺跡にかかわる出前授業を実施しています。

この紀要は、いささか無味乾燥な事務報告のようにも見えますが、意外に作業の舞台裏を覗き見ることができる、多彩な情報を含んでいるように思います。弥生時代の気候変動に関する最新の成果が込められた熊本大学名誉教授甲元眞之さんの講演要旨も含めてご活用いただけますと幸いです。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事・事務局長）

門 岡 裕 一

副センター長（大学院社会文化科学研究科教授）

新 納 泉

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2013

目 次

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 津島岡大遺跡第35次調査……………(野崎貴博) 1

第2節 試掘・確認調査の概要

1. J テラス新営予定地……………(野崎) 4

第3節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況……………(南健太郎) 7
2. 総合研究棟(工学系)改修…………… 7
3. NTT引き込み配管取設工事…………… 9
4. 大学会館周辺他環境整備工事…………… 10
5. ガス管補修…………… 17

第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 鹿田遺跡第25次調査 I 工区……………(岩崎志保) 23

第2節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況……………(野崎) 23
2. 医歯薬融合棟新営にともなう污水配管工事…………… 24
3. 中央診療棟(Ⅱ期)発掘調査に伴う支障配管敷設替え工事…………… 26
4. その他の調査地点…………… 28

第3節 鹿田遺跡の研究

1. 鹿田遺跡出土の銅鏃について……………(南) 32
2. 鹿田遺跡第14次・第18次B地点出土漆製品の塗膜構造……………(株吉田生物研究所) 38

第3章 その他の地区の調査研究

第1節 試掘・確認調査の概要

1. 教育学部附属小学校屋内運動場建設予定地……………(南) 40
2. 資源植物科学研究所植物ストレス科学研究等拠点施設建設予定地……………(野崎) 41

第4章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理・研究……………(岩崎) 44

1. 調査資料の整理…………… 44
2. 調査資料の保存処理…………… 44

第2節 調査成果の公開・活用

1. 公開・開示……………(南) 44

2. 資料・施設等の利活用	49
第3節 調査研究員の個別研究活動	
1. 外部資金の獲得状況	51
2. 論文・資料報告ほか	51
3. 研究発表・講演ほか	52

第5章 2013年度の調査・研究のまとめ	(岩崎) 53
----------------------	---------

付編 1

第3回特別展示『鹿田発掘30年－弥生時代を語る－』講演会記録 弥生時代の気候変動…(甲元眞之)	54
---	----

付編 2

1. 国立大学法人岡山大学管理学則の一部改正新旧対照表	58
2. 2013年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織	62
3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項	63

挿 図 目 次

図1 調査地点の位置	2	図22 集水桝地点 断面図	16
図2 土層柱状図	3	図23 旧陸軍水路 平・断面図	
図3 検出遺構平面図	3	(ガス管管路1 地点北端)	16
図4 調査地点の位置	4	図24 大学会館北の門柱	16
図5 土層断面図	5	図25 調査地点の位置	17
図6 土坑 (TP2)	6	図26 土層断面	17
図7 調査地点の位置	7	図27 2013年度の調査地点【1】	
図8 工学部5号館北側土層断面	8	－津島地区－	21～22
図9 工学部5号館南側土層断面	8	図28 調査地点の位置	23
図10 工学部5号館雨落ち溝	9	図29 土層柱状図	25
図11 調査地点の位置	10	図30 溝 (管路①)	26
図12 旧陸軍水路実測図	10	図31 ピット (管路②)	26
図13 調査地点と断面の位置	11	図32 土坑 平・断面図 (管路③)	26
図14 土層断面	11	図33 調査地点の位置	26
図15 パーゴラ電気設備地点 平・断面図	12	図34 調査区全体図・土層断面図	27
図16 さくら広場外灯地点 平・断面図	13	図35 溝出土遺物	28
図17 暖房ピット地点溝 平・断面図	13	図36 土層柱状図	29
図18 ガス管管路1 地点 平・断面図	14	図37 2013年度の調査地点【2】	
図19 ガス管管路2 地点 平・断面図	14	－鹿田地区－	31
図20 自由勾配側溝地点 断面図	15	図38 銅鍬①実測図	33
図21 東西道路外灯1・2 地点 断面図	15	図39 銅鍬②実測図	33

図40	銅鍬①の研磨痕跡……………	33	図60	展示品を目の前にした コウコガク・カフェ……………	48
図41	銅鍬②の研磨痕跡……………	34	図61	ギャラリー展示風景……………	48
図42	前方後円墳出現期の銅鍬……………	34	図62	来場者の年齢構成……………	49
図43	第1次調査地点の遺構配置……………	35	図63	リピーターの割合……………	49
図44	第2次調査地点の遺構変遷……………	35	付編1		
図45	No.1内面……………	38	図64	紀元前2500年以降の炭素14の増減表……………	54
図46	No.1外面……………	38	図65	東広島市黄幡遺跡出土木材の年輪幅……………	55
図47	No.2……………	39	図66	ヨーロッパの気候変動と弥生時代の 絶対年代……………	56
図48	調査地点の位置……………	40	付編2		
図49	東壁土層断面図……………	40	図67	岡山大学の位置と周辺の遺跡分布……………	77
図50	調査地点の位置……………	42	図68	津島地区全体図……………	77
図51	土層断面……………	42	図69	2012年度以前の調査地点【1】 －津島地区－……………	79～80
図52	2013年度の調査地点【3】 －東山地区－……………	43	図70	2012年度以前の調査地点【2】 －鹿田地区－……………	81
図53	2013年度の調査地点【4】 －倉敷地区－……………	43	図71	2012年度以前の調査地点【3】 －三朝地区－……………	82
図54	展示会場見取図……………	45	図72	2012年度以前の調査地点【4】 －東山地区－……………	82
図55	展示風景①……………	45	図73	2012年度以前の調査地点【5】 －倉敷地区－……………	82
図56	展示風景②……………	45			
図57	展示解説風景……………	46			
図58	体験コーナーのしおり・コースター 作り……………	47			
図59	座談会風景……………	47			

表 目 次

表1	地点毎の黒色土上面高・土質……………	6	付編2		
表2	2013年度の調査地点【1】津島地区……………	18	表10	1982年度以前の構内主要調査 (1980～1982年度)……………	64
表3	2013年度の調査地点【2】鹿田地区……………	29	表11	2012年度以前の構内主要調査 (1983～2012年度)……………	65
表4	分析資料……………	38	表12	埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要 (2014年3月現在)……………	73
表5	塗膜構造……………	38	表13	埋蔵文化財調査室刊行物……………	74
表6	2013年度の調査地点【3】東山地区……………	43	表14	埋蔵文化財調査研究センター刊行物 (2014年3月まで)……………	74
表7	2013年度の調査地点【4】倉敷地区……………	43			
表8	木器保存処理工程……………	44			
表9	2013年度の非常勤講師の委託依頼……………	50			

例 言

1. 本紀要は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学構内において2013年4月1日から2014年3月31日までに実施した埋蔵文化財の調査研究成果およびセンターの活動についてまとめたものである。
2. 本紀要において報告している津島岡大遺跡は岡山市北区津島中一丁目～三丁目1-1、鹿田遺跡は岡山市北区鹿田町二丁目5-1に所在する。
3. 執筆者は、目次に記載すると共に、原則として、本センター教員の場合は文末に、本センター以外の場合は文頭に記した。
4. 編集は新納泉副センター長・山本悦世センター室長の指導のもと、岩崎志保が担当した。

凡 例

1. 岡山大学構内の埋蔵文化財の調査にあたっては、2002（平成14）年4月1日から施行された「測量法及び水路業務法の一部を改正する法律」に基づき、世界測地系を採用し、構内座標を次のように定めている。
 - 1）津島地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北を基軸とし、 $(X, Y) = (-144,156.4617\text{m}, -37,246.7496\text{m})$ を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺50mの方格で分割した区画を用いている。
 - 2）鹿田地区では、国土座標第Ⅴ座標系の座標北より東に 15° 振り出した座標軸を基軸とし、 $(X, Y) = (-149,456.3718\text{m}, -37,646.7700\text{m})$ を起点とする構内座標を設定している。構内座標の内部は一辺5mの方格による地区割りをを用いている。
 - 3）挿図中で用いる方位は、津島地区・鹿田地区は国土座標系の座標北を、その他は磁北を用いている。
2. 岡山大学敷地内で調査地点を示す場合、周知の遺跡にあたる場合はその遺跡名を、それ以外の場合は、地区名を付して示す。
3. 調査名称は、「発掘調査」に分類したものは、遺跡ごとに調査順に従って次数番号で呼称し、「試掘・確認調査」、「立会調査」に分類したものは、原則、原因となった工事名を使用している。発掘調査のうち、小規模で確認調査から連続して調査したものは、「試掘・確認調査」に分類する。
4. 付表に記載した既往の調査一覧は、掘削深度が中世層以下に達するかあるいは遺構などが確認された調査のみを掲載している。未掲載分も含め、すべてのデータは、当センターにおいて保管している。
5. 本文などで使用している調査番号は表2および表3と一致する。
6. 本紀要に掲載の地形図（図68）は、岡山市域図を複写したものである。
7. 土層注記のうち、包含物については特徴的なものについて（ ）内に記し、特に顕著なものを◎で示した。

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 津島岡大遺跡第35次調査（図書館増築工事、調査番号1、津島北AW13区）

a. 調査の成果

調査期間 2013年7月8日～8月29日

（表土掘削：7月1～5日、8月26日、発掘調査：7月8日～8月13日、27～29日）

調査面積 80㎡

調査担当 野崎貴博（助教、調査主任）

遺構・遺物

【遺構】 縄文時代：ピット2基、古墳時代後期：溝2条・ピット4基、古代：ピット列1条、

近世：畦畔1条・溝1条・土坑1基・耕作痕

【遺物】 古墳時代後期～近世：土器・陶磁器（総量1箱）

本調査地点は調査面積が小規模であったが、縄文時代・古墳時代後期・古代・近世の遺構・遺物を検出し、周辺調査地点の成果を検証・追認することができた。

縄文～弥生時代には第12次調査地点と同様の地形が広がり、また古墳時代後期以降～近世にかけては、南北方向の地割りに関係するピット列・溝や畦畔といった遺構が確認されている。特に調査区の東半において、継続的にこうした遺構が形成されていることは、本地点内に想定されている南北方向の里境ラインの状況を今後考えるうえで、重要な手がかりとなった。

b. 調査にいたる経緯と経過

(1) 調査にいたる経緯

2013年度に図書館本館北側の増築工事に伴う発掘調査が決定した。増築予定地の北西では、1993～1994年度に第12次調査を実施し、縄文時代の土坑や焼土集中域、弥生時代前期の水田、弥生時代後期を中心とする大溝や古墳時代初頭の溝群、古代～近世では条里制の坪境を画する溝などを確認している。これらの点を念頭に置きつつ発掘調査を実施した。

(2) 調査の経過

発掘調査に先立ち、7月1～5日の期間で重機により近・現代の造成土と攪乱埋土を除去した。調査区南西の既設浄化槽については、弥生・古墳時代の土層の破壊を避けるため、調査終了後に撤去し、その後、浄化槽下にある包含層を調査することとした。

発掘調査は調査員1名を担当者として7月8日より開始した。調査区四周の断面観察で分層した基本層序にしたがって、土層の掘削をすすめ、4面で遺構を検出した。12層では遺構・遺物が確認されなかったため、本層が縄文時代の基盤層であると判断し、調査を8月13日に一端中断した。

浄化槽は8月中旬から構造物の撤去を開始し、8月26日に重機による攪乱土の除去作業を行った。浄化槽下には10層より下位の土層がのこっており、発掘調査を27日から再開した。最終面の12層上面でピット1基を確認した。必要な記録をとったうえで29日にすべての調査を終了した。

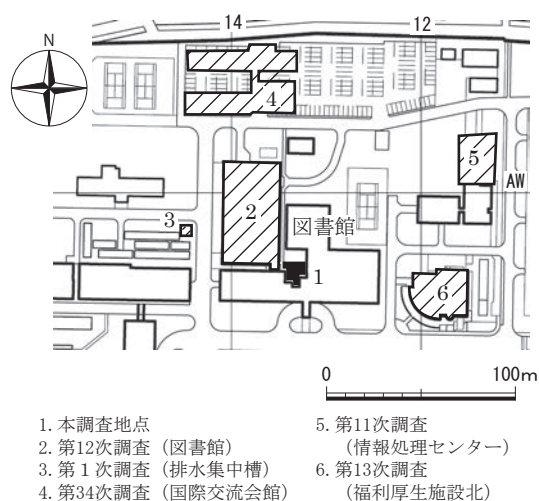


図1 調査地点の位置 (縮尺1/4,000)

c. 調査の概要

(1) 調査地点の位置 (図1)

本調査地点は津島北地区西半にある図書館本館・新館・書庫に四方を囲まれた空隙地にあたり、津島地区に設定した構内座標ではAW13区にあたる。周辺では第1次調査(排水集中槽)、第11次調査(情報処理センター)、第12次調査(図書館新館)、第13次調査(福利厚生施設北)、第34次調査(国際交流会館)を実施している。

(2) 層序 (図2)

本調査区で確認された土層は12層に大別される。以下、各層の概要を記載する。なお、本調査区では各土層の時期を判定する手がかりとなる遺構・遺物が少ないため、隣接する第12次調査(図書館新館)地点の調査成果も参照して時期を推定している。

1層 1907(明治40)年の旧日本陸軍第十七師団駐屯地造成以降、現在に至るまでの造成土である。現地表面の標高は約4.8~4.9mである。

2層 暗灰色砂質土である。小礫(径3~5mm)を多く含む。駐屯地造成が開始された1907年以前の耕作土で、上面の標高は約3.2mである。

3層 淡緑黄色砂質土である。上面には鉄分の沈着が顕著にみられる。小礫(径3~5mm大)を含む。近世の耕作土と考えられる。上面の標高は約3.0~3.1mである。

4層 淡緑黄褐色砂質土である。上面には鉄分の沈着が顕著にみられる。近世の耕作土と考えられる。上面の標高は約2.9~3.0mである。

5層 淡灰茶褐色砂質土である。上面には鉄分の沈着が顕著にみられる。炭小片をわずかに含む。近世の耕作土と考えられる。上面の標高は約2.85~2.95mである。

6層 淡灰茶褐色弱粘質土で、土色・土質から中世の耕作土と考えている。上面の標高は約2.85~2.9mである。

7層 明灰茶褐色粗砂で、調査区東半のたわみ部分を中心に堆積する砂層である。第12次調査の土層との対応関係からは古代の堆積層と考えられる。上面の標高は約2.75~2.8mである。

8層 明灰色弱粘質土で、調査区西半および南側で確認した。土色・土質から古代の耕作土と考えられる。上面の標高は約2.75~2.85mである。

9層 暗青灰茶褐色粘質土である。調査区東半の7層が堆積するたわみ部分では、9層はみられない。土色・土質から古代の耕作土と考えている。上面の標高は約2.65~2.75mである。

10層 2層に細分される。

a層 橙茶褐色砂質土である。鉄分の沈着が顕著である。上面の標高は約2.6~2.7mである。上面で検出した溝からは古墳時代後期の須恵器が出土しており、古墳時代後期以前の土層である。

b層 暗灰茶褐色砂質土である。鉄分の沈着が顕著である。調査区北東の一角をのぞく範囲で堆積が確認される。炭・焼土小片を含む。灰色砂質土ブロックが生痕状に入る。時期を推定する手がかりに欠ける。上面の標高は約2.55~2.65mである。

11層 津島地区では上面が弥生時代前期に比定される「黒色土」である。本調査区では3層に細分される。

a層 暗茶褐~暗褐色粘質土である。鉄分の沈着が顕著である。炭・焼土小片を含む。灰褐色砂質土ブロックが生痕状に入る。上面の標高は約2.45~2.6mである。

b層 暗褐色粘質土である。炭・焼土小片を含む。灰褐色砂質土ブロックを含む。11a層より緻密で混じりの少ない土層である。上面の標高は約2.35～2.55mである。

c層 暗灰褐色弱粘質土である。12層への漸移層であり、12層に近似する明黄色砂質土ブロックを含む。上面の標高は約2.35～2.5mである。

12層 明黄色砂質土である。暗褐色粘質土ブロックが生痕状に入る。縄文時代の基盤層と考えられる。上面の標高は約2.15～2.3mである。

(3) 地形

北西に隣接する第12次調査地点では、縄文時代の段階には北半部が低く（標高約1.6～1.9m）、南半部が高い地形（標高約2.1～2.2m）を呈することが確認されている。本調査地点では同時期に対応する12層上面の標高は約2.2～2.3m前後をはかり、比較的高い地形が南東に続くことが確認された。また11層が本調査地点および第12次調査地点で約0.3～0.4mの厚みで堆積しており、「黒色土」の形成が発達していることから、本地点周辺は弥生時代早～前期において微高地の縁辺部であったと推測される。

(4) 遺構・遺物

縄文時代 12層上面で検出した遺構は調査区北東および浄化槽南東角のピット2基で、遺物は出土していない。

古墳時代後期 10層上面で溝2条と溝の周囲に散在するピット4基を検出した。2条の溝は調査区東半から中央において、南東から北西方向にむかってほぼ直線的に掘削されている。切り合い関係を有しており、東側の溝1が西側の溝2に切られる。いずれも古墳時代後期の須恵器小片が出土した。ピットは溝群の両側で4基検出した。遺物は1基から土師器小片が出土している。

古代 調査区中央で南北方向のピット列2列を検出した。列を構成するのは円形、長楕円、隅丸長方形の平面形

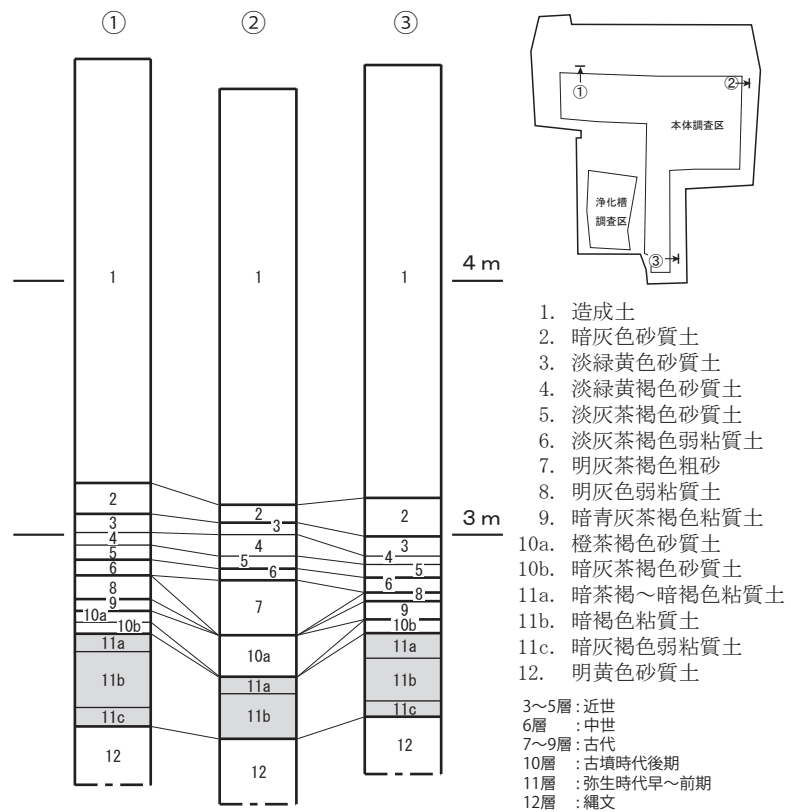


図2 土層柱状図（縮尺1/40）

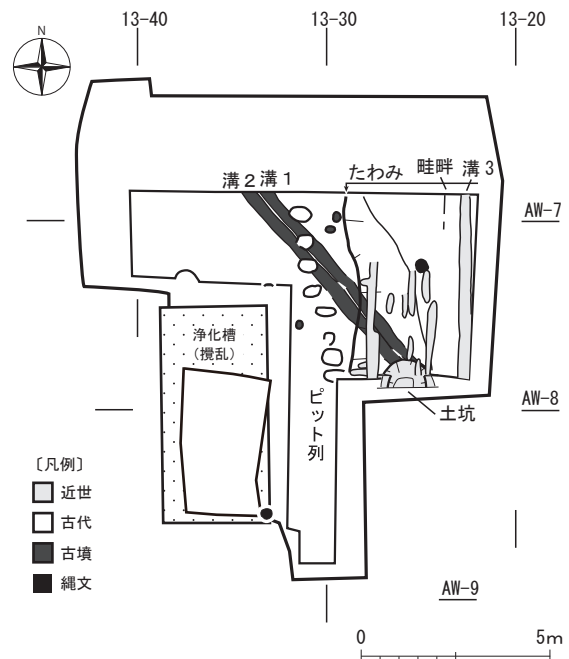


図3 検出遺構平面図（縮尺1/200）

を呈する8基のピットである。ピットの規模、形状、埋土の類似から一連の遺構であると考えているが、北半の4基と南半の4基では列の軸線にずれが認められる。ピット列の東側には南北軸を有するたわみが確認されており、条里の南北方向の里境等、条里の地割に関連する遺構である可能性は大きい。

近世 3層上面では調査区東半で南北方向の畦畔・溝および耕作痕、4層上面では調査区東半南側で土坑1基を検出した。いずれも南北の地割り軸に合致するものである。(野崎貴博)

<参考文献>

山本悦世・岩崎志保編2003『津島岡大遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第16冊

池田晋2009「津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構」『津島岡大遺跡19』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第25冊

第2節 試掘・確認調査の概要

1. Jテラス新営予定地(調査番号2、津島南BG13区)

a. 調査の経緯と経過

津島地区に新たな福利厚生施設としてJテラスの建設が決定されたことを受け、確認調査を実施した。同地は駐車場およびテニスコートとして利用されていた。周辺では第2次調査C地点(排水管)・同BH13区(合併処理槽)、第8次調査B地点(合併処理槽)があり、弥生時代前～中期の溝や古代～近世の水田等が確認されている。

調査は2013年6月28日に実施したが、その後の工事計画の追加を受けて2014年2月10日に追加調査を行った。調査員1～2名が担当した。調査区はTP1・2の2カ所で、いずれも重機によって掘削を行った。調査規模はTP1が2.6×1.55m、掘削深度1.8m、TP2が2.0×1.6m、掘削深度2.3mである。TP2では弥生時代前期にあたる9層で遺構が確認された。遺構部分は保存し、それ以外の部分について地形確認のために12層まで掘削し、調査を行った。必要な記録をとった後、調査を終了した。

b. 調査の概要

(1) 層序

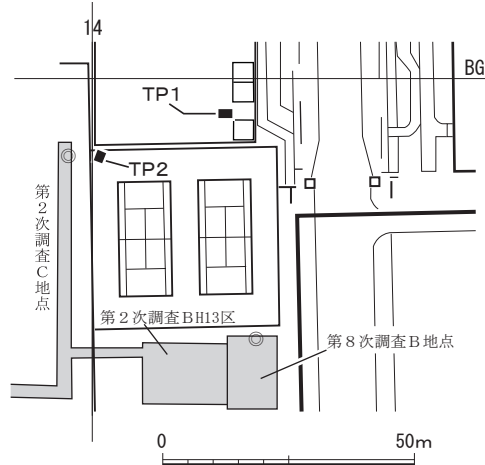


図4 調査地点の位置

土層の堆積はTP1・2ともに概ね一致している。土層の時期については周辺の発掘調査成果に基づき推定した。

1層 近・現代の造成土である。上面高約4.1～4.2m、層厚約1mである。

2層 明青灰色砂質土である。鉄分の沈着が著しい。炭小片を含む。上面高約3.1～3.2m、層厚0.08～0.12mである。近代の耕作土である。

3層 明黄褐色砂質土である。上半部には鉄分の沈着が顕著にみられる。上面高約3.05～3.1m、層厚0.05～0.1mである。近世の耕作土と考えられる。

4層 明橙灰茶褐色砂質土である。鉄分の沈着が著しい。上面高約2.95～3.05m、層厚0.05～0.1mである。近世の耕作土と考えられる。

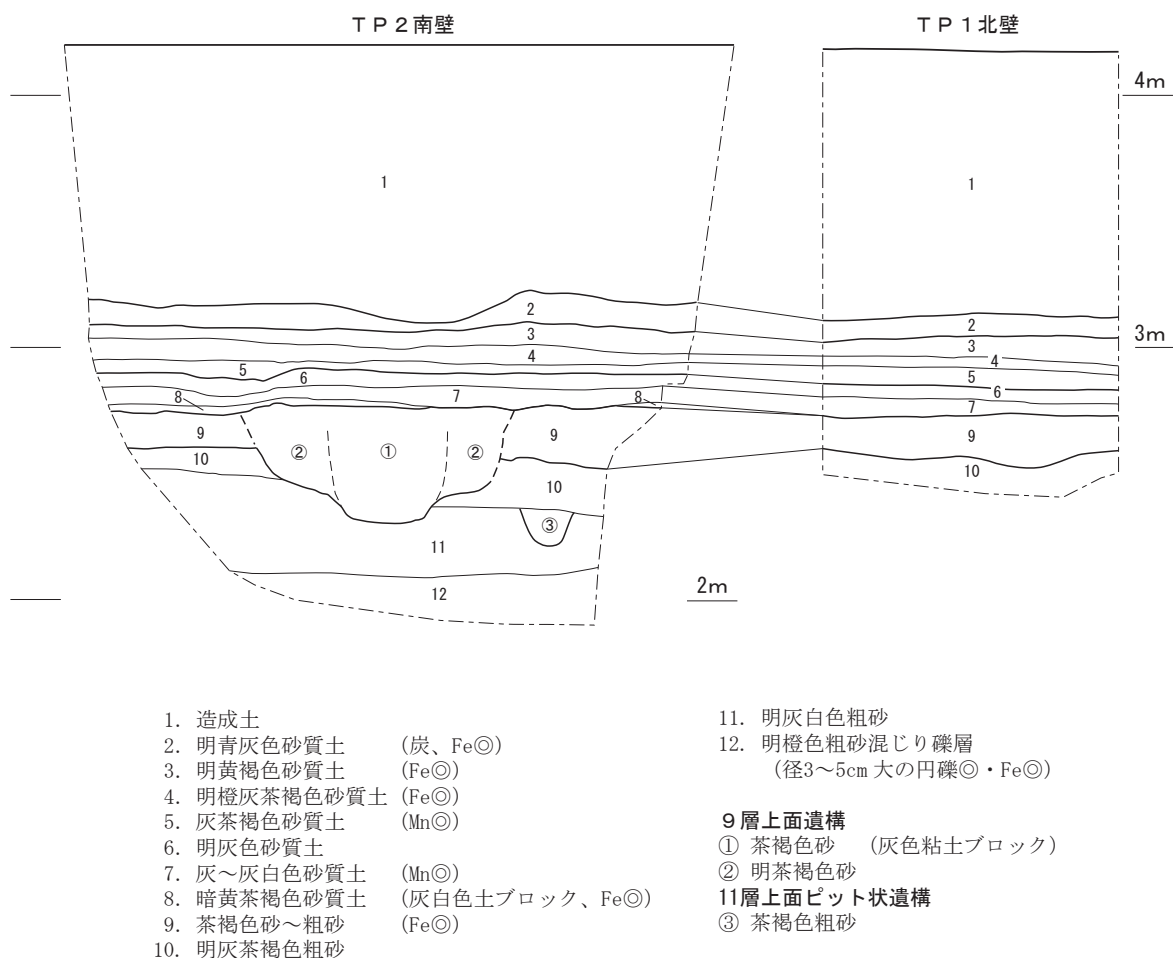


図5 土層断面図 (縮尺1/40)

5層 灰茶褐色砂質土である。マンガンの凝集が顕著にみられる。上面高約2.9～2.95m、層厚0.03～0.08mである。近世の耕作土と考えられる。

6層 明灰色砂質土である。上面高約2.85～2.9m、層厚0.05m前後である。中世層と考えられる。

7層 灰～灰白色砂質土である。マンガンの凝集が顕著にみられる。上面高約2.8～2.85m、層厚0.05m前後である。中世層と考えられる。

8層 暗黄茶褐色砂質土である。TP2でのみ確認した。鉄分の沈着が著しい。灰白色土ブロックを含む。上面高約2.8m、層厚0.03m程度である。

9層 茶褐色砂～粗砂である。鉄分の沈着が著しい。津島地区では上面が弥生時代前期に比定される「黒色土」に対応する土層とみられる。上面高約2.7～2.75m、層厚0.15～0.25mである。

10層 明灰茶褐色粗砂である。上面高約2.6m、層厚0.1～0.2mである。

11層 明灰白色粗砂である。上面高約2.5m、層厚0.2～0.4mである。

12層 明橙色粗砂混じり礫層である。径3～5cm大の円礫が主体をなす。鉄分の沈着が著しい。上面高約2.1m、層厚0.2m以上である。

(2) 遺構

TP1では遺構は検出されなかった。TP2では9層で土坑1基(図6)、南壁断面(図5)で9層から切りこ

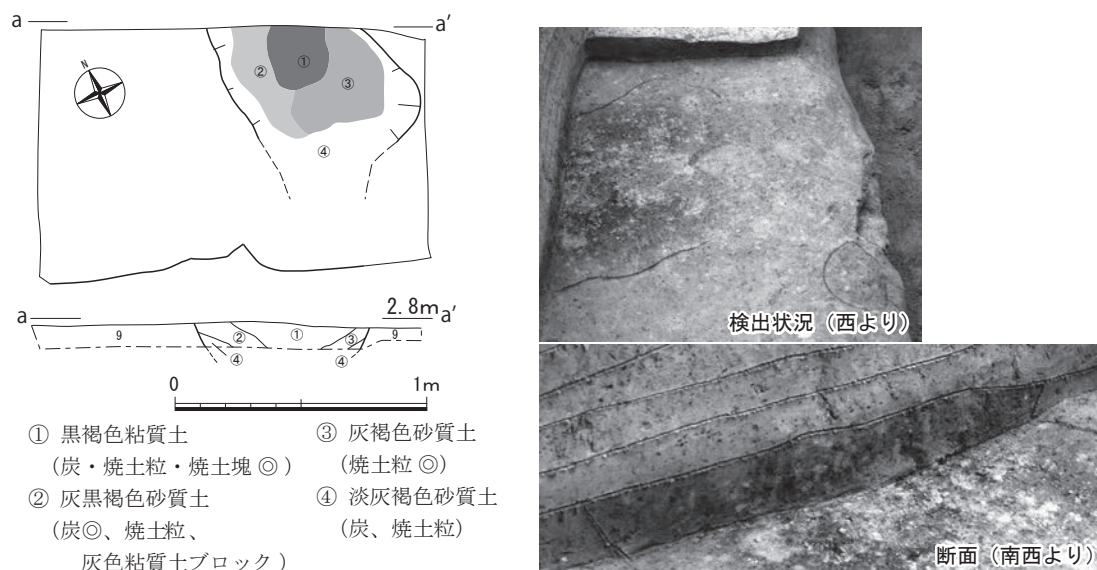


図6 土坑 (TP2) (縮尺1/40)

む遺構1基 (同図①②)、11層から切りこむピット状の遺構1基 (同図③)を確認した。

土坑 9層を5～10cm程度掘削した際に認識した (図6)。規模は東西約0.7m、南北約0.5m以上、深さは約0.1m以上である。北側に向けて、調査区外へのびているが、南の端部は確認できなかった。埋土は4層に分層される。最終埋土にあたる①層は黒褐色粘質土で炭、焼土粒・焼土塊を多く含む。②層は灰黒褐色砂質土で炭小片を多く含み、焼土粒や灰色粘質土ブロックが混入する。③層は灰褐色砂質土で、焼土粒を多く含むが炭は少ない。④層は淡灰褐色砂質土で、炭小片、焼土粒の散布が認められる。炭・焼土の混入は南側で希薄となる。遺物は出土していない。

南壁断面確認遺構 9層から掘りこむ遺構は平面的には検出しえなかった。断面で確認される規模は幅約1.1m、深さ約0.45mで、断面形は二段掘り状を呈する (図5)。中央にある①層は灰色粘土ブロックを含む茶褐色砂で、中心から周縁に向かってブロックを含まない明茶褐色砂である②層へと変移する。上面では明瞭な層界は認められない。同遺構については、上記の土坑と同じ掘削面であり、位置やレベルが近似することから、一連の遺構である可能性もある。ただし、埋土に焼土や炭を含まないことを重視し、ここでは別の遺構として報告する。9層検出の遺構は弥生時代前期以降に属する可能性がある。

11層ではピット状の遺構が認められた。断面で幅0.2m、深さ約0.15mを測る。埋土は茶褐色粗砂である。土層から縄文時代の遺構と考える。

c. まとめ

本調査では縄文時代～近世の土層の堆積状況および縄文・弥生時代の遺構を確認した。弥生時代前期にあたる9層の高さを周辺調査地点と比較すると、上面の削平を考慮する必要があるが、TP2地点が最も高いことがわかる。本地点の9層が強く砂質を帯びる点も、本地点が微高地に接近した位置にあることを示しており、周辺に居住域の存在を示唆する。(野崎)

表1 地点毎の黒色土上面高・土質

	標高	土質
本調査TP2	2.75m	茶褐色砂～粗砂
第2次調査C地点※	2.15m	黒褐色粘質土
第8次調査B地点※	1.4m	黒色土 (一部黒色粘土化)

※TP2地点は第2次調査C地点北側から約11m東、第8次調査B地点から約50m北西に位置している。それぞれ図4○の地点の標高である。

第3節 立会調査の概要

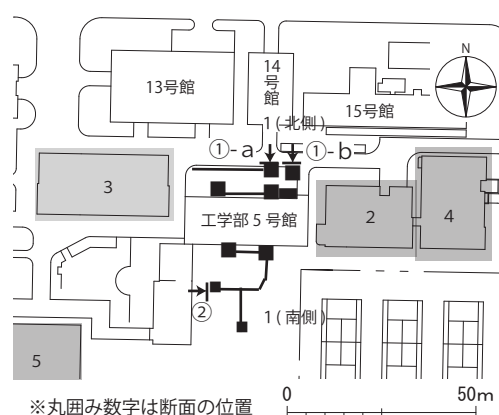
1. 調査の実施状況

2013年度は津島地区で16事業71件の立会調査を実施した。事業内容の主体は大学会館周辺他環境整備、総合研究棟（工学系）で、その他にガス漏れ修理に関わるものもあった。このうち中世層以下まで掘削が行われたものは調査番号3～9（総合研修棟（工学系）改修）・同19～34（大学会館周辺他環境整備工事）・同35（ガス漏れ修理）である。また、この他に調査番号16・17（NTT引き込み配管取説工事）・同19～34（大学会館周辺他環境整備工事）では旧陸軍施設に関連する構造物が確認された。これらについてここで報告する。

2. 総合研究棟（工学系）改修（調査番号3～9、BB9～12、BC9～11、BD9・10区）

a. 調査地点の位置と経過

本調査地点は工学部5号館の北側（①）と南側（②）にあたる（図7）。総合研究棟（工学系）改修に伴う電気設備、受水槽撤去、鉄骨ブレース設置、屋外排水工事が実施されることとなった。工学部5号館北側周辺では第6次¹⁾・7次²⁾調査、南側では第28次調査が行われており、縄文時代後期の貯蔵穴（第6次）、炉跡（第7次）、杭群（第28次）、弥生時代前期の水田畦畔（第7・28次）、古代の条里関連遺構群（第6次）などが検出されている。掘削深度は集水桝2カ所でGL-1.7m、電気設備設置極の2カ所でGL-1.65m、これらに伴う管路などでは、1m未満であった。集水桝では中世末～近世初頭の土層、電気設備設置極では縄文時代層が確認され、管路部分では旧陸軍関連建物に伴う雨落ち溝が確認された。調査は4月26日から10月30日にかけて行った。



※丸囲み数字は断面の位置

1. 本調査地点
2. 第6次調査地点（生物応用工学科棟）
3. 第7次調査地点（情報工学科棟）
4. 第9次調査地点（生体機能応用工学科棟）
5. 第28次調査地点（自然科学系総合研究棟）

図7 調査地点の位置（縮尺1/2,000）

b. 調査成果

(1) 層序（図8・9）

①工学部5号館北側 1層は造成土である。1 a層の上面は4.5m、1 b層の上面は4.2mである。2層は灰色砂質土で鉄分が斑状に含まれている。近代の水田層である。上面は3.8mである。3層は黄灰褐色砂質土が中心だが、鉄分の含有状況によって二分した。3 a層は鉄分が薄層状に含有されており、2層との境目は特に顕著である。3 b層は鉄分・マンガンを多く含む。3 a層上面は3.7m、3 b層上面は3.6mである。近世の水田層である。4層は黄灰褐色粘質土で、粘性が強い。上面は3.5mである。中世から近世層の可能性がある。5層は4層と色調は似るが、マンガンがやや少なく、やや砂質である。上面は3.3mである。古代（平安時代）か。6層は弥生時代早期～前期までに形成される「黒色土」だが、微高地上であることから砂質を呈する。色調や土質によって細分した。6 a層は黒灰色砂質土で、6 b層は暗灰色砂質土である。前者は砂質が強く、後者はやや粘質である。上面は6 a層が3.2m、6 b層が3.1mである。7層は黄灰色砂質土で、5層よりも砂質が粗い。少量だが焼土を含む。上面は5 cm程度の範囲で上下するが、概ね3.05mである。縄文時代後期層である。

②同南側 南側では中世層までが確認された（図9）。1層は造成土で、近代以降の造成土が1.2m、駐屯地造成

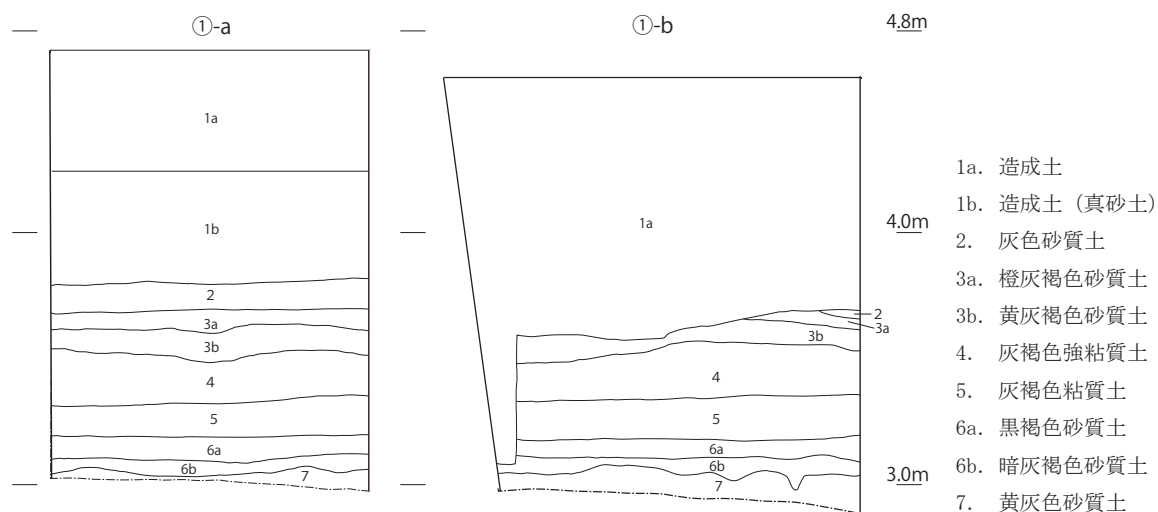


図8 工学部5号館北側土層断面 (縮尺1/40)

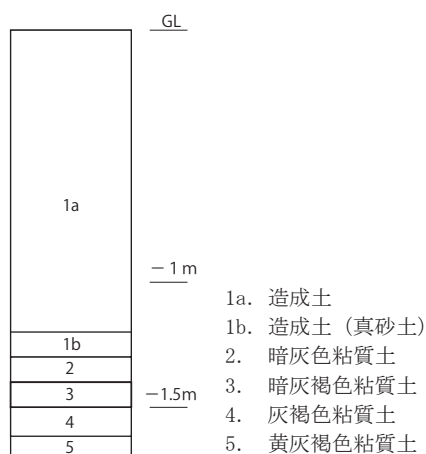


図9 工学部5号館南側土層断面 (縮尺1/40)

のための真砂土が0.1mの厚さで堆積している。2層は暗灰色粘質土で、近代の耕作土層である。3層は暗灰褐色粘質土、4層は灰褐色粘質土で、4層は炭化物を少量含んでいる。いずれも近世層である。5層は黄灰褐色粘質土でマンガン、鉄分を比較的多く含む。第6・7次調査の成果から本層は中世末から近世初頭にあたると考えられる。

(2) 地形

隣接する第6・7次調査地点との比較から旧地形を復元する。東の第6次調査地点と比較すると2層から5層まではほぼ同じ標高で、西の第7次調査地点は本調査地点よりも20~30cmほど低くなる。「黒色土」にあたる6層をみると、上面は本調査地点では、津島岡大遺跡での最高位と一致している。第6次調査地点では微高地部が削平により消失しているため比較できないが、第7次調査地点では20cm低くなる。7層上面は、第6次調査地点で3.05~

2.2m、本地点で3.05m、第7次調査地点で2.4mであり、縄文時代後期から本地点~第6次調査地点西半にかけてやや高い地形を示し、それが弥生時代前期まで継続していたことがわかる。また6層(黒褐色砂質土~暗灰褐色砂質土)は粗砂で構成されており、低位部の粘性の強い「黒色土」層とは異なる。このことも本調査地点が微高地状に高まっていたことを裏付けている。また5層より上層は地形が一定しているので、この段階で土地の造作などによって、西に向かって下がる地形に改変されたものと考えられる。

一方、本地点南側は造成土が1.2~1.3mと厚く、直下の近代の耕作土上面も本地北側や第6・7次調査地点よりも低くなっている。南側の第28次調査地点では造成土が厚いところで1.6m近くあることから南側に向けて落ち込んでいっていることがわかる。

(3) 旧陸軍関連建物に伴う雨落ち溝 (図10)

本調査地点では旧陸軍関連建物に付随する雨落ち溝が工学部14号館西側、工学部5号館の北側、同南側で確認された。北側の雨落ち溝は赤レンガ建物である14号館の西側に位置し、東列が石、西列がコンクリートで作られている。東列は長辺が20cm前後の三角形の石材が使用されており、文・法・経フェンス改修工事に伴う調査³⁾

で確認された土塁の内側に構築された水路で使用されていたものとはほぼ同形同大である。上面は標高4.3m前後にそろえられている。一方、西列のコンクリートは上面の標高が東列よりわずかに高く、北側がやや低くなる。平面的にも東列は工学部14号館をめぐるように配されているが、西列は南にまっすぐ伸びている。このことから両者を同時期の所産と積極的に判断することはできない。

工学部5号館北側では東西方向の水路が確認された。底面には一部土管を半裁したものが用いられていた。

同南側では東西方向ののびる2列の水路が確認された。北側の水路は南列が三角形、北列が角柱状の石材で構成されており、底面は中心がやや窪むコンクリートが敷かれている。南側の水路は北列・南列ともに三角形の石材が使用されており、底面は中心が溝状になる平石が用いられている。上面の高さは両側で揃えられており、その上に平石の石蓋が置かれていた。石蓋上面で造成土の質が変わることから、使用時は石蓋上面まで埋められた状態であった可能性がある。

c. まとめ

本調査地点では第6次・7次調査の成果と比較することで、縄文時代以降の微地形の変化を明らかにすることができた。特に弥生時代前期を境にその前後で地形が大きく変化しており、土地利用を考える上でも重要なデータを得ることができた。また旧陸軍関連施設についても、その構造についての多くの所見が得られた。地形や土地利用については今後もデータを蓄積し、より詳細な復元を行っていきたい。

註

- 1) 土井基司・山本悦世編1995『津島岡大遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 註1)と同じ
- 3) 南健太郎「文・法・経フェンス改修工事に伴う調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター：pp.1-9

3. NTT引き込み配管取設工事（調査番号16・17 BB15区）

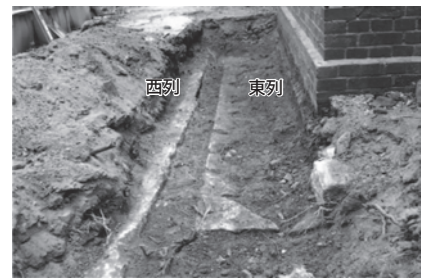
a. 調査地点の位置と経過

創立五十周年記念館北側でNTT引き込み配管取設工事が行われた。電柱部分と管路である。本調査地点南側で行われた第27次調査¹⁾では縄文時代中期の土器や後期の炉跡群、弥生時代前期の畦畔などが確認されており、縄文・弥生時代の地形は北東から南西方向に広がる微高地とその南北の谷部にわけられている。今回の調査地点は第27次調査地点北西の谷が北側へと広がったところに位置している。

調査は2013年5月20・21日に実施した。掘削の規模は、電柱部分が深さ1.6m、管路は深さ0.85mである。

b. 調査成果

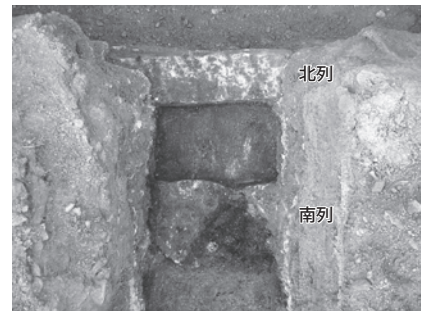
掘削箇所はいずれも造成土内であったが、電柱の掘削において旧陸軍関連の水路が確認された（図12）。水路



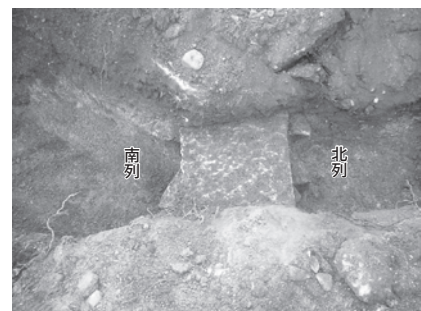
工学部14号館西側（南から）



工学部5号館北側（西から）

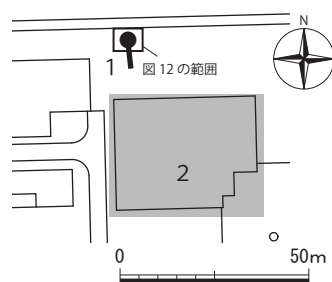


北側水路（南から）



南側水路（東から）

図10 工学部5号館雨落ち溝



1. 本調査地点
2. 第27次調査地点
(創立五十周年記念館)

図11 調査地点の位置 (縮尺1/2,000)

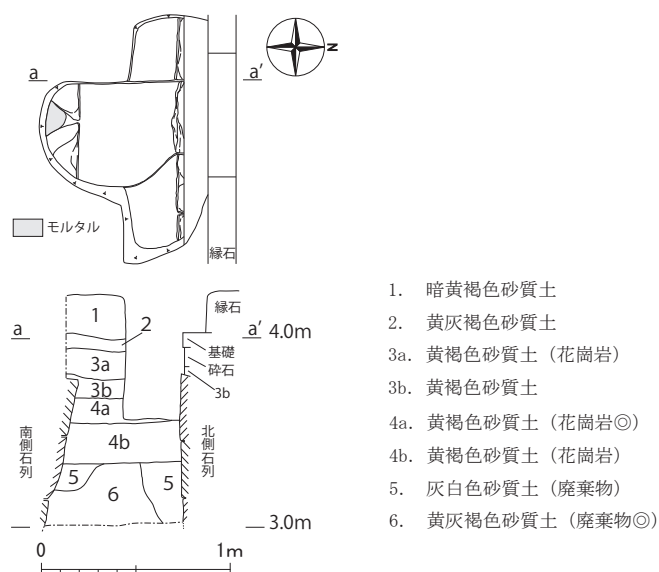


図12 旧陸軍水路実測図 (縮尺1/40)

は東西方向で、両側を3段の石積みによって構成されている。石積みの向き合う面は平坦に加工されている。隣り合う石材同士の隙間には小礫が詰められている。このような構築方法は2011年度に行った文・法・経フェンス改修工事で確認された土塁にともなう水路²⁾と同様である。上面の標高は3.8m前後に揃えられている。北側石列はほぼ垂直に積まれているが、南側石列は北側に向かって傾斜している。

c. まとめ

本調査地点は旧陸軍関連施設のうち1945年に岡山聯隊区司令部が置かれており、今回確認された水路はこれを囲む土塁に附属するものであったと考えられる。2011年度文・法・経フェンス改修工事の調査成果を参考にすれば、水路は土塁の内側に構築されていることから、当時の土塁は現在の東西道路南側歩道付近にあったものと考えられる。今後も旧陸軍関連施設については空間構造復元における実証的なデータとして記録を行っていきたい。

註

- 1) 高田浩司編2003『津島岡大遺跡13』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 南健太郎2013「文・法・経フェンス改修工事に伴う調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

4. 大学会館周辺他環境整備工事 (調査番号19～34、BB9～12、BC9～11、BD9・10区)

a. 調査地点の位置と経過

大学会館北側は駐車場や駐輪場、ベンディングスペースとして利用されていたが、構内環境整備の一環として交流広場にする計画が立てられた。これに伴い外灯の設置や集水桝の新設とその間をつなぐ管路の敷設、パーゴラの新営などの工事が予定された。調査は2013年6月24日から12月20日にかけて実施した。

調査地点は津島東キャンパスの北西部で、周辺では第10次調査(保健管理センター)¹⁾、第14次調査(福利厚生施設南棟)²⁾、第18次調査(福利施設南棟ポンプ槽取設)³⁾が行われ、弥生時代前期の水田畦畔、弥生時代後期の土坑を中心とした遺構群、古墳時代初頭の井戸や土坑・溝群、古墳時代後期の住居や焼土土坑など、各時期の集落の様相を明らかにするための重要な遺構・遺物が確認されている。特に古墳時代後期には炭材焼成土坑や鉄

滓や轆の羽口が確認されており、鍛冶関連の作業場としての利用が考えられている。今回の事業はこれらの地点を囲むように予定されており、遺構・遺物の確認されることが予想された。

b. 調査成果

(1) 層序 (図14)

1層は造成土である。2層は暗青灰色粘質土で、保健管理センター東側（F・G）でみられる。3層は灰色砂質土で福利厚生施設～保健管理センター北側および同センター東側（A～C・G）、4層は灰茶褐色砂質土で保健管理センター北側（D・E）を中心に堆積している。2～4層は近世以降の耕作土であり、場所によって水田と畑が分けられていた可能性がある。5層は暗灰褐色粘質土、6層は灰褐色粘質土を主体とした層で、南側で確認された。いずれも中世～近世の堆積層である。7層は黄灰褐色粘質土で、保健管理センターの西～北側（A～E）で確認される。全体的に厚さはほぼ均一である。8層は茶褐色砂質土で、9層がたわむところに堆積している。

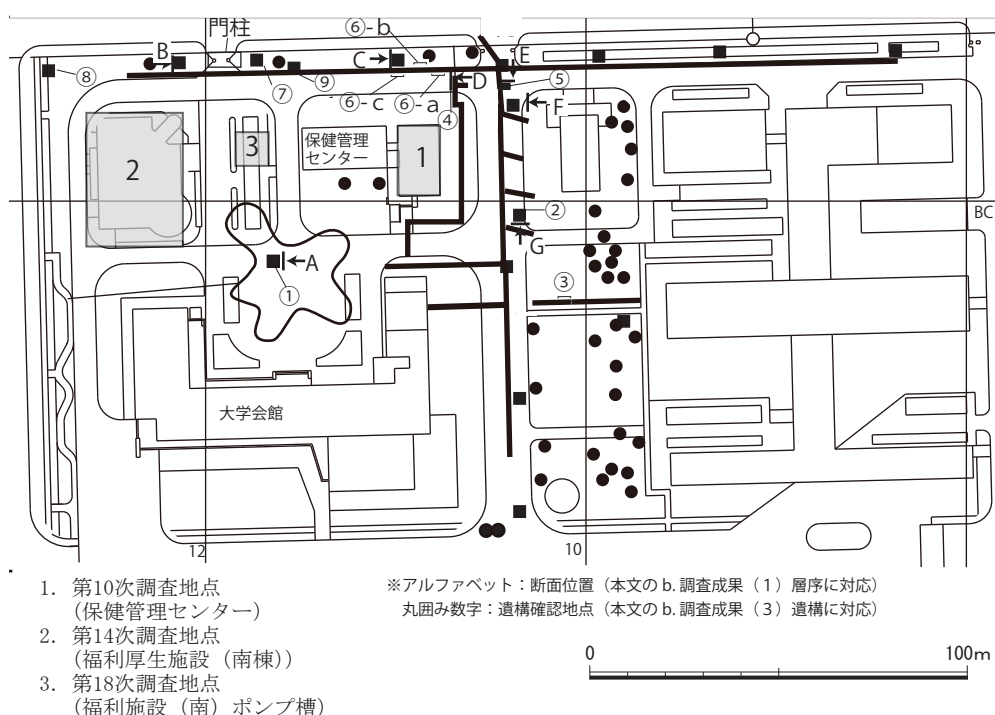


図13 調査地点と断面の位置 (縮尺1/2,000)

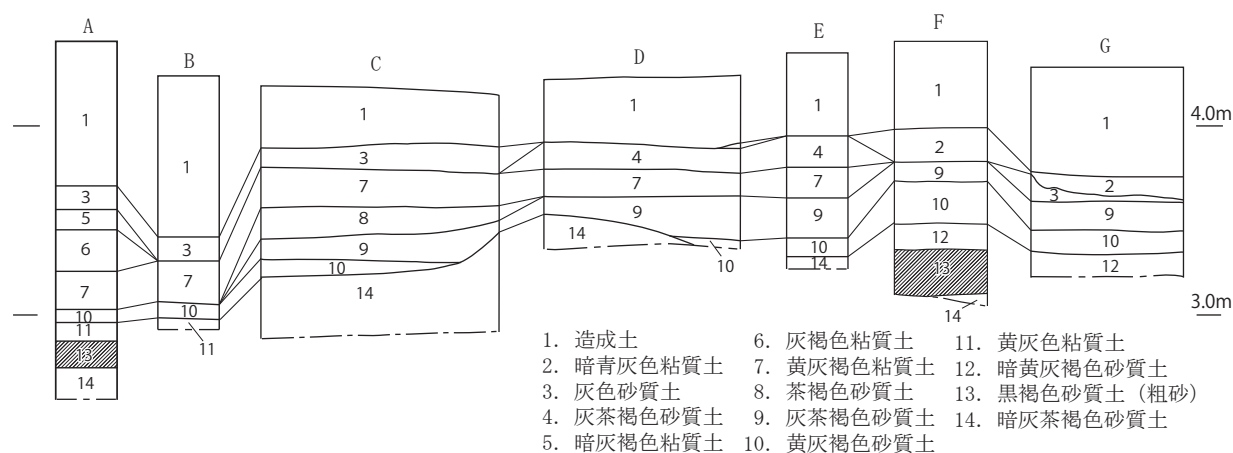


図14 土層断面 (縮尺1/40)

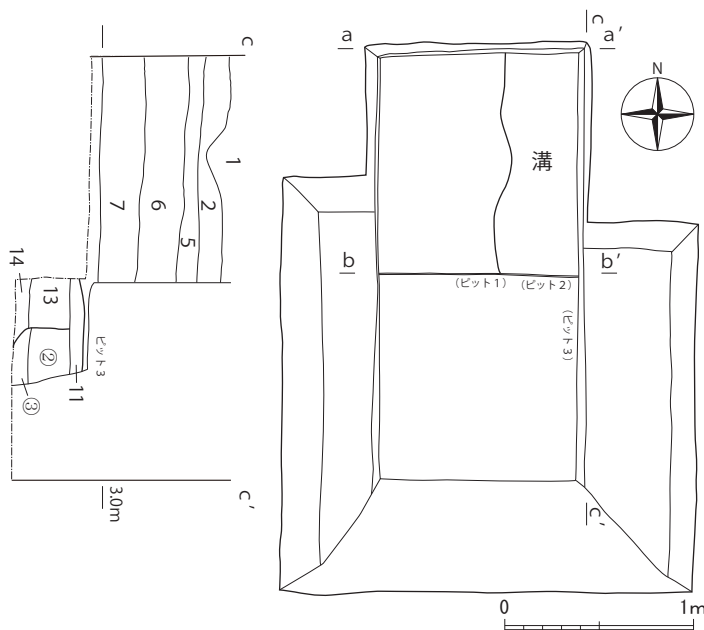
9層は灰茶褐色砂質土で、第10次調査地点の北～東側で確認される（C～G）。10層は黄灰褐色砂質土で、堆積は薄いが調査区全体で確認され、保健管理センター北東部は堆積が厚い。11層は黄灰色粘質土で、第14次調査地点の周辺で確認される（A・B）。標高が低くなる位置に堆積したものと思われる。12層は暗黄灰褐色砂質土で、保健管理センター東側でのみ確認される（F・G）。これは第10次調査で確認された古墳時代初頭の「落ち」の埋土であり、「落ち」が東側まで広がっていたことを示している。13層は黒褐色砂質土層（粗砂）で、標高が低くなるところに堆積した層である。14層は暗茶褐色砂質土の礫層である。

(2) 地形

最下層の礫層（14層）は縄文時代中期以前の基盤層であったと考えられている。同層は保健管理センター北側が最も高く（標高約3.5m）、東・西、そして南に向けても標高が下がっていく。このような地形が変わるのが弥生時代前期で、礫層の上に黒褐色粗砂層（13層）が堆積する（図14A・F）。この段階で微高地が保健管理センター北東部へと広がる。これ以降の地形は概ね同様であるが、本調査地点南側（A）では他のトレンチでは確認されない灰褐色粘質土（6層）が堆積しており、中世から近世において地形の改変が行われた可能性もある。

(3) 遺構

遺構は弥生時代のピット3基、古墳時代後期の土坑1基・ピット1基、戦国時代の溝1条、近世の土坑3基、



- 溝
① 灰色粘質土
（黄灰白色砂◎）
② 灰色砂質土
③ 黄灰色砂質土
ピット
① 黄灰色粘質土
② 灰褐色砂質土
③ 灰色砂質土

※それ以外は図14基本層序参照

図15 パーゴラ電気設備地点 平・断面図（縮尺1/40）

近世～近代の溝6条・畦畔1カ所・落ち1カ所、旧陸軍関連の水路が検出された。検出された位置は①パーゴラ電気設備工事地点（図13①A）、②さくら広場西外灯地点（同②G）、③暖房ピット（同③）、④ガスパ管路地点1（同④D）、⑤ガスパ管路地点2（同⑤）、⑥自由勾配側溝地点（同⑥）、⑦東西道路外灯地点1（同⑦）、⑧東西道路外灯地点2（同⑧）、⑨集水桝地点（同⑨）である。なお旧陸軍関連の水路は東西道路南側のほとんどの掘削地点で確認された。ここでは各地点に分けて述べる。

① パーゴラ電気設備工事地点

（図13①・15）

ピット 弥生時代に属する。13層上面で3基が、断面で確認された。それぞれのピット間は約20cmと近接している。掘り込み面の標高は2.85m前後で、底面はP1が2.7m、P2が2.6m、P3が2.5m（掘削底面のレベル）である。

溝 南北方向の溝である。10層上面から掘り込まれており、掘削範囲では西側の立ち上がりのみ確認できた。上面のレベルは3.02m前後で、底面は2.85mを測る。深さは15cmほどしかなく、区画溝とし

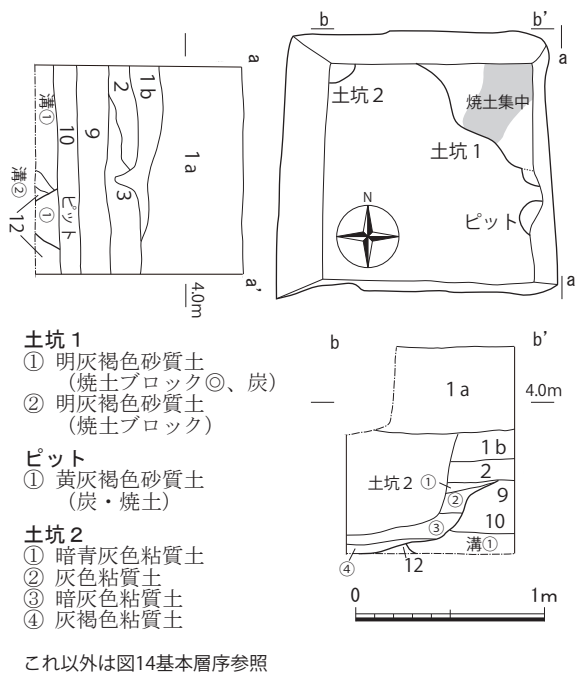


図16 さくら広場外灯地点 平・断面図 (縮尺1/40)

ての機能を考えると浅い。埋土には砂が多く含まれていることから、耕作土が混じっている可能性もある。このことから本溝は畦畔の脇に掘削された溝と考えるのが妥当であろう。本溝からの出土遺物はなかったが、第14次調査の土層堆積との対応から戦国時代のものと判断した。

② さくら広場西外灯地点 (図13②・16)

土坑1 12層 (第10次調査 a 層対応) 上面から掘りこまれており、検出面は標高3.3m前後を測る。平面形は不整形で、円形か方形かは掘削範囲だけではわからない。埋土は灰褐色砂質土で、焼土を多く含む。焼土の入り方やしまりによって2層に分けると、2基の切り合い関係を示す可能性もある。焼土はⅠ橙色 ($\phi 0.3 \sim 0.7\text{cm}$)、Ⅱ赤茶色～暗茶色 ($\phi 0.5 \sim 2\text{cm}$)、Ⅲ暗茶色 ($\phi 0.5 \sim 2\text{cm}$)、Ⅳ赤茶色 ($\phi 0.5 \sim 1\text{cm}$) の4種類があり、Ⅰの含有は他と比べると少ない。①層にはⅡが含まれている。出土遺物はないが、第10次調査の調査成果から古墳時代後期のものと判断した。

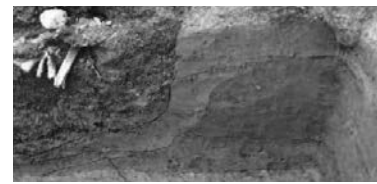
ピット 土坑1の南側で検出した。掘り込みは土坑1と同じ面からであるため、同時期のものと判断したが、土坑1をきっている。埋土には炭や焼土が含まれている。

土坑2 半径1m以上の大型の土坑である。平面形は円形であったと考えられる。近代の水田層 (2層) 直下で確認され、上面のレベルは3.6m、底面は3.2m以下となる。断面形はボール状で、掘り込み面近くは外側に開く。埋土は灰色粘質土を基本としており、最下層はやや砂質である。最上層には腐食した有機物と考えられる黒色粘質土の細粒を含む。本土坑からの出土遺物はないが、掘り込み面から近世のものと判断した。

畦畔 東壁と南壁では3層に一部高まりが認められる。低く下がったところには明治時代の耕作土と考えられる暗青灰色粘質土 (2層) が堆積しており、畦畔であると考えられる。



遺構検出状況 (南から)



北壁土層断面 (南から)

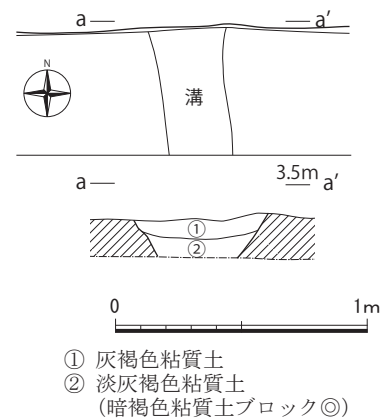


図17 暖房ピット地点溝 平・断面図 (縮尺1/30)

③ 暖房ピット地点 (図13③・17)

溝 南北方向の溝である。近代の耕作土である4層下面から掘り込まれている。掘り込み面のレベルは3.35m、掘削底面は3.3mである。溝幅は上面で0.55mである。埋土は灰褐色粘質土で、①層には淡灰色粘質土、②層には暗褐色粘質土のブロックが多く含まれる。また①層には有機物も含まれている。本溝からの出土遺物はなかったが、掘り込み面から近世～近代のものと判断した。

④ ガス管管路1地点 (図13④・18)

土坑 攪乱と近代の東西方向の溝にきられている。掘削範囲での最大径は1.6mで、直径はさらに大きくなる。平面形は円形であろう。掘り込み面(7・9層上面)のレベルは3.65m前後で、底面は3.35m以下になる。断面形は箱型を呈している。埋土は青灰褐色砂質土が基本で、下層にいくにつれて暗くなり、2層に礫を含むが、粘質土ブロックなどは全体的にほとんど含まない。本土坑からの出土遺物はなかったが、掘り込み面から近世のものと判断した。

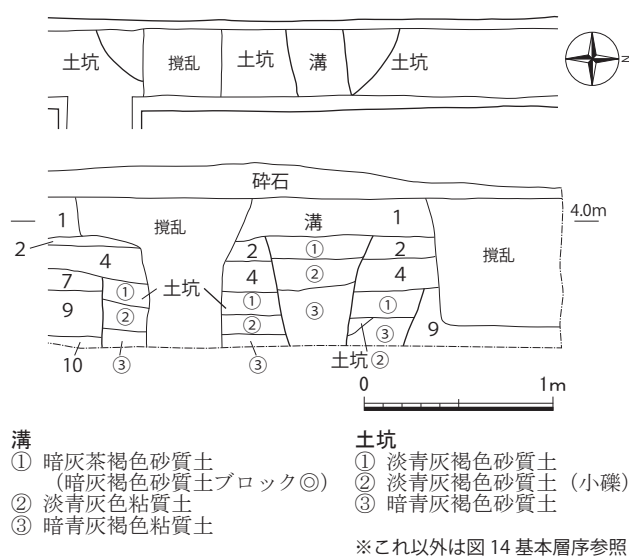


図18 ガス管管路1地点 平・断面図 (縮尺1/40)

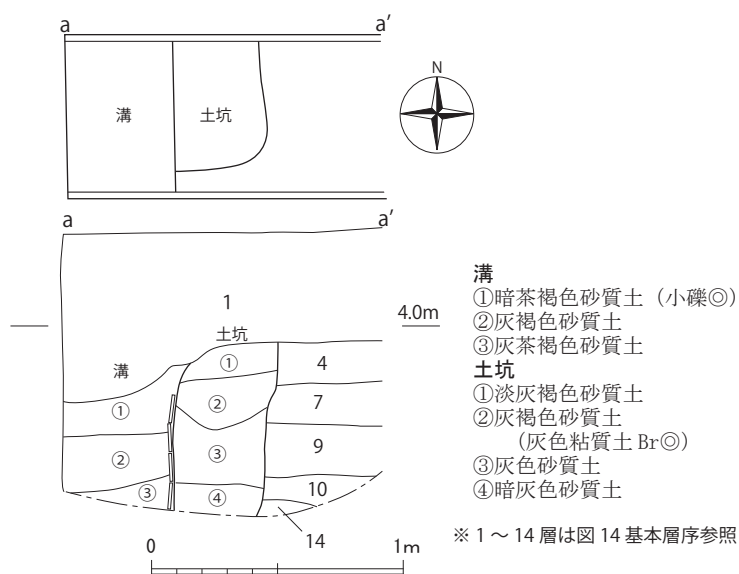


図19 ガス管管路2地点 平・断面図 (縮尺1/30)

のと判断した。

溝 東西方向の溝で、土坑をきって掘り込まれている。掘り込みは旧陸軍の造成土層直下から確認されるが、本来はこれより高い位置から掘り込まれていた可能性もある。掘り込み面のレベルは3.92mで、底面は3.35mよりも深くなる。断面形は逆台形である。埋土は暗灰茶褐色砂質土(①層)と青灰色を基本とした粘質土(②・③層)に分けられる。①層には暗茶褐色砂質土ブロック(φ3～5cm)や礫(φ2cm)が多く含まれている。本溝からの出土遺物はなかったが、掘り込み面から近代のものと判断した。

⑤ ガス管管路2地点 (図13⑤・19)

土坑 西側は近代と考えられる溝にきられている。平面形は隅丸方形であったと思われる。掘り込み面のレベルは3.95mで、底面は3.25m以下になる。断面形は垂直に立ち上がっていることから箱型を呈する可能性が高い。埋土は4層に分層したが、③・④層は灰色砂質土でまとめることができる。②層には灰色粘質土ブロック(φ2～3cm)が多く含まれており、①層と③・④層とは明瞭に分離される。本土坑からの出土遺物はなかったが、掘り込み面から近世のものと判断した。

溝 南北方向の溝である。近世の土坑を切って掘り込まれている。掘り込み面のレベルは3.9mで、底面は3.25m以下になる。東側の立ち上がりには陶器

が立て並べられている。埋土は3層に分けられる。本トレンチは幅が狭いため平面形態の全体像が不明確であり、土坑の可能性もある。近世の土坑をきっていることから近世～近代のものと判断した。

⑥ 自由勾配側溝地点

(図13⑥・20)

溝1 (⑥-a) 南北方向の溝である。旧陸軍の造成土であるマサ土直下で検出

された。検出面は3.97m、溝底面は3.82mである。溝幅は0.73mである。埋土は灰褐色砂質土である。本溝からの出土遺物はなかったが、掘り込み面から近世～近代のものと判断した。

溝2 (⑥-b) 南北方向の溝である。旧陸軍の造成土であるマサ土直下で検出され、後述の段の埋土をきっている。上面の標高は3.65mである。埋土は暗灰褐色砂質土で、暗褐色粘質土ブロックが多く含有される。出土遺物はなかったが、掘り込み面から近世～近代のものと判断した。

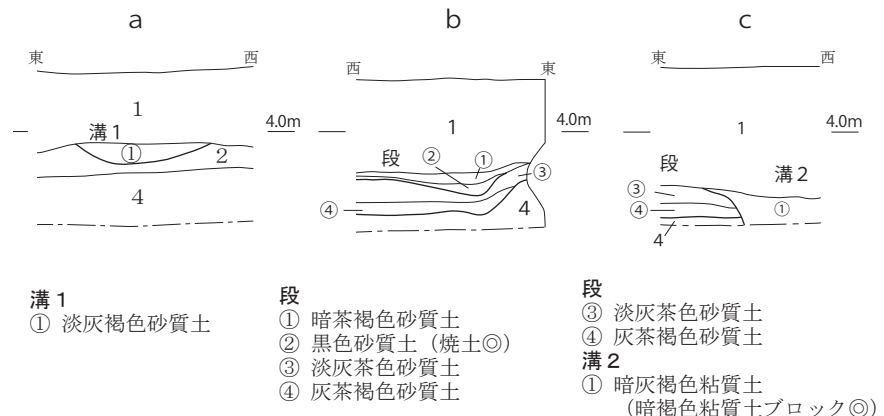
段 (⑥-c) 第10次調査の近世2段階に形成された「段」、3段階の盛土に対応するものである。盛土上面のレベルは3.9m前後で、第10次調査よりも0.3mほど高くなる。盛土下面のレベルは3.7～3.8mであり、やはり第10次調査よりも0.2～0.3m高くなる。段の落ち際には溝状の窪みがあり、焼土を多量に含んだ黒色砂質土が堆積している。

⑦ 東西道路外灯1地点 (図13⑦・21左)

溝 東西方向の溝である。7層上面から掘り込まれており、上面のレベルは3.15m、底面は2.95mである。溝幅は上面0.92mで、断面形は皿状である。埋土は灰褐色砂質土(①層)と黄灰褐色砂質土(②層)に分けられるが、1層は下半に暗褐色粘質土ブロックを含んでおり細分できる。本溝からの出土遺物はなかったが、掘り込み面から近世～近代のものと判断した。

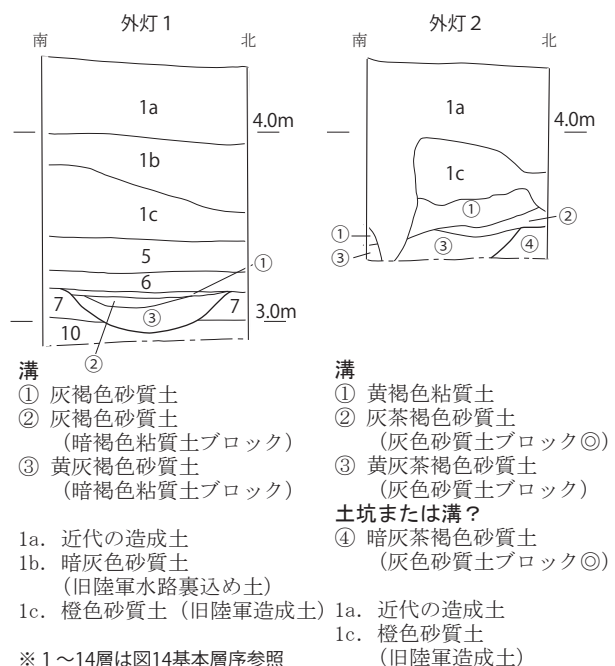
⑧ 東西道路外灯2地点 (図13⑧・21右)

溝 東西方向の溝である。旧陸軍の造成土直下で確認された。上面は標高3.7m前後で、掘削範囲の底面は3.35mである。埋土は黄褐色粘質土(①層)と灰茶褐色砂質土(②層)で、後者は上部に灰色砂質土ブロックの含有が顕著である。本溝からの出土遺物はなかったが、掘り込み面から近世～近代のものと判断した。なお本溝の下部にも別遺構が存在する可能性がある(図21-①層)。



※1～14層は図14基本層序参照

図20 自由勾配側溝地点 断面図 (縮尺1/40)



※1～14層は図14基本層序参照

図21 東西道路外灯1・2地点 断面図

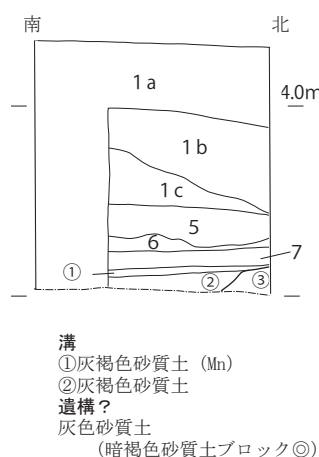


図22 集水樹地点 断面図
(縮尺1/40)

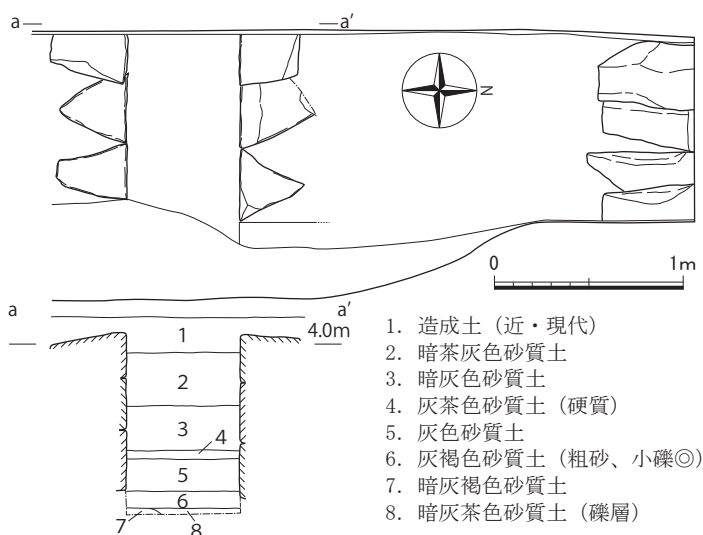


図23 旧陸軍水路 平・断面図 (ガス管管路1地点北端) (縮尺1/40)



図24 大学会館北の門柱

⑨ 集水樹地点 (図13⑨・22)

溝 東西方向の溝で、掘削範囲では北側の立ち上がりだけが確認された。掘り込み面は近世層と考えられる5層上面である。掘り込み面のレベルは3.15m、掘削範囲の底面は3.02mである。本溝からの出土遺物はなかったが、掘り込み面から近世～近代のものと判断した。なお本溝の下部にも別遺構が存在する可能性がある (図22-①層)。

旧陸軍関連の水路 本調査では東西道路の南側の、広範囲において旧陸軍関連の水路が確認された。水路は東西方向で、敷地南東側の旧陸軍関連施設を取り囲むためのものであったと考えられる。同様の水路は文・法・経フェンス改修工事に伴う調査 (以下、文・法・経と記す) で確認されており、その際は3段の石積みの2段目にU字溝を入れた構造であった¹⁾。今回の調査では3段の石積みを確認されたが、底面にはU字溝などの構造物はなかった。

水路上面のレベルはBB10区で4.05m、BB11区で4.1m、BB12区では4.02mとほぼ同じである。水路幅は両側を確認できたところでは約60cmで、文・法・経の2倍と幅広い。使用石材の大きさは水路を構成する辺が約30cmで、三角形と四角形がみられる。この点は文・法・経と同様である。

水路内の埋土は各所で異なるが、最下段石材下端付近に底面があったと思われる (図24-5層下面)。標高はBB10区で3.22m、BB11区で3.25mである。

またBB11区では水路にコンクリートの蓋がかぶせられた状態で確認された。使用時は全体的に蓋が被せられた状態で

あった可能性もある。

旧陸軍関連の門柱 津島キャンパス構内には4カ所で旧陸軍関連の門が残存している。本調査地点にも門柱があったが、これは1949 (昭和24) 年段階の建物配置図では確認されないものである。このため旧陸軍関連施設と断定できないが、レンガ造ということもあり、法量などのデータをここに記す。

高さは各門柱とも現地表面から1.50m前後で、平面形は一辺0.93mの四角柱である。使用されているレンガは長辺22~23cm、短辺10.4~11cm、高さ5.7~6.1cmである。22段を確認でき、その下はコンクリートの基礎であった。レンガの積み方は長手を4列並べる段と、長手3列の両側に小口を並べる段が交互に続く。しかし21段目は東面・西面はすべて小口側、北面 (南面も?) は小口側3列の両側に長手が並べられている。南面の門柱が向き合う辺

には上から7段目・19段目に掛け金を取り付けられている。この辺はレンガの破損が顕著であるため、実際に扉がつけられていた時期があったようである。上から確認したところレンガの内部はコンクリートであると考えられ、上面は中央がやや高まっている。上面にはねじ穴などの痕跡はみられなかった。

c. まとめ

本調査では津島キャンパス東南部の地形や周辺環境に関する良好なデータが得られ、弥生時代から近世～近代までの遺構が多数確認された。遺構で注目されるのはさくら広場西外灯地点で確認された古墳時代後期の土坑で、第10次調査地点の鍛冶関連遺構群が東側にも広がっていたことが想定される。今後は周辺の調査成果とあわせて集落景観を復元していきたい。

註

- 1) 南健太郎「文・法・経フェンス改修工事に伴う調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター：pp.1-9

5. ガス管補修（調査番号35、BB 9～12、BC 9～11、BD 9・10区）

a. 調査地点の位置と経過

2013年度には津島キャンパス全地区を対象としたガス漏れの点検が行われ、異常が確認された際にはガスを露出させて補修するという対応がとられた。ガス管の露出には既掘範囲の周辺も掘削する必要があるため、調査員1名が対応し、立会調査を行った。調査は8月30日から2月14日にかけて行った。

調査地点のうち中世層以下まで達したのは、教育学部東棟の西側の一カ所のみである（図25）。本調査地点の北東では第32次調査¹⁾が行われており、縄文時代後期前葉の河道や後期中葉の貯蔵穴群、弥生時代前期の水田畦畔と溝、古代の転写畦畔と動物依存体集中、中世から近世の耕作痕や溝が確認されている。特に弥生時代前期のいわゆる「黒色土」の上面が、調査区北側の微高地で2.9m程度となることから、本調査地点でも1m程度の掘削で弥生時代前期層に及ぶ可能性が考えられた。掘削は約1.1mの深さまで行われ、遺構・遺物はなかったが、弥生時代前期から近代までの土層堆積状況を確認することができた。

b. 調査成果

(1) 層序（図26）

1層は近代以降の造成土で、上面の標高は4.7mである。2層は暗青灰色粘質土で、明治から大正時代の耕作土にあたる。上面の標高は4.2mである。3層は明緑灰色粘質土で、近世層であろう。上面の標高は4.1mである。4層は暗緑灰褐色粘質土だが、含有物の違いによって細分した。4a層は淡緑灰色粘質土ブロックを多く含む。4b層は黒灰色粘質土ブロックを含むのを特徴としており下層の土が含みこまれたものと理解される。4a層上面は4m、4b層上面は3.9mである。5層は明るさによって細分しており、5a層は暗灰色粘質土、5b層は黒灰色粘質土である。弥生時代前

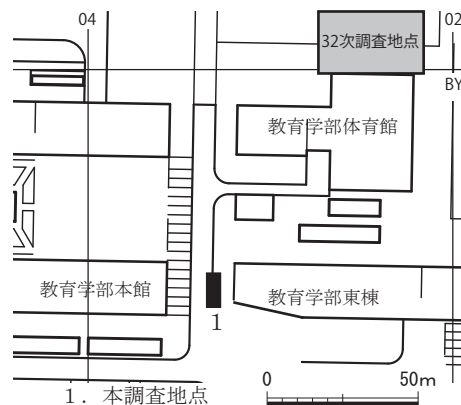


図25 調査地点の位置

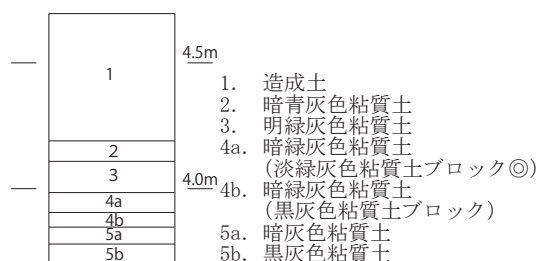


図26 土層断面（縮尺1/40）

期の黒色土に対応する。5 a 層上面は3.85m、5 b 層上面は3.78mである。

(2) 地形

第32次調査地点と比較すると、2層以下の各層はいずれも本調査地点のほうが標高が高くなっている。前者の南東部分は縄文時代後期前葉の河道が埋まった後も弥生時代から古墳時代までは低位部であったことから、本調査地点はこの低位部を挟んだ微高地と考えられる。東側の教育学部体育館他耐震改修工事（動物室）²⁾の立会調査では黒色土上面（GL-75cm）で水田畦畔が確認されており、このラインに東西方向の微高地が形成されていたと思われる。

c. まとめ

本調査地点では弥生時代前期の黒色土をはじめとした土層堆積状況を確認し、発掘調査の行われていない津島キャンパス北地区南東部の地形復元を行った。本調査地点の各層は土質・色調に明確な違いがあったため、サンプリングを行っている。今後は土壌の分析によって各層の形成過程を具体的に明らかにしていきたい。

（南健太郎）

註

- 1) 池田晋・能城修一編2011『津島岡大遺跡20』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第27冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 池田晋2010「3. 教育学部体育館他耐震改修工事（動物室）」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター：pp.20-23

表2 2013年度の調査地点【1】津島地区

種類	調査番号	工事名称		調査期間	構内座標	調査深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内 容
発掘	1	附属図書館増築		7/8～8/29	AW13	2.70	1.7	縄文時代ピット、古墳時代後期溝2条・ピット、古代ピット列、近世畦畔・土坑・溝
試掘確認	2	Jテラス新営		6/28・2/10	BG13	1.8・2.3	1.0	縄文時代ピット、弥生時代前期土坑・遺構
立会	3	総合研究棟改修 (工学系)	受水槽撤去	4/26・30	AV05	1.3～1.9	－	擁壁部既設内
	4		鉄骨ブレース	5/1	AW05	0.70	－	既設内
	5 a		設置路線①	5/21	AV05	0.90	－	造成土内
	5 b		設置路線②	5/27		1.00	1.0	近代層上面確認
	5 c		設置路線③	5/27		0.90	－	造成土内、工学部15号館西辺で雨落溝確認
	5 d		設置路線④	5/30		0.75	－	造成土内、5号館北で東西方向の石組溝確認
	6 a		接地銅板①	5/27	AV05	1.65	0.85	縄文層確認
	6 b		接地銅板②	5/30				
	7		電気設備：外灯柵	10/3	AW05	1.70	1.2～1.3	近世層確認
	8		電気設備：管路	10/3・4	AW05	0.80	－	造成土内、5号館南で東西方向の石組み溝確認
	9		屋外排水	10/18・30	AW・AX05	1.26～1.36	1.1～1.25	近世層確認
	10	総合研究棟改修 (農学系)	電気設備 (引き込みポール)	4/30	BB16	0.90	－	造成土内
	11		給水管	5/17	BE17	0.66	－	造成土内
	12		給水配管	6/4～9/17	BE15～BF17	0.5～1.1	－	造成土内
	13		耐震鉄骨保護 コンクリート打設	6/24	BE16～17	0.7	－	既設内
	14		受水槽	6/24	BE15	0.55	－	造成土内
	15		機械設備柵	7/8	BF15	1.0	－	造成土内

種類	調査 番号	工事名称		調査期間	構内座標	調査深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内 容
立会	16	NTT電柱引き込み	電柱	5/20	BB15	1.6	－	造成土内、旧陸軍東西方向水路確認
	17		電気管路	5/21	BB15	0.9	－	造成土内
	18	附属図書館増築	電柱	6/17	AU13	0.9	－	造成土内
	19 a	大学会館周辺他 環境整備	暖房ビット①	6/24、7/16	BC09・10	1.05～1.1	0.45～0.7	近世層確認
	19 b		暖房ビット②	7/17	BC10		0.5	中世層確認、近世南北溝確認
	19 c		暖房ビット③	11/14	BC10		0.6～1.1	(東端) -0.6mで近代層上面、 -0.9mで近世層上面(西端) -1.1mで明治層上面
	20		さくら広場 樹木根回し・移植	7/5・8・10・ 23、10/4・10	BC09～BD10	0.6～0.8	－	既掘・造成土内
	21 a		東西道路南側外灯①	7/8	BB08	1.0	0.55	弥生層確認
	21 b		東西道路南側外灯②	7/8	BB09	1.1	－	造成土内、旧陸軍東西方向水路確認
	21 c		東西道路南側外灯③	7/8	BB09	1.3	－	造成土内、旧陸軍東西方向水路確認
	21 d		東西道路南側外灯④	7/12	BB11	1.4	0.3	礫層確認
	21 e		東西道路南側外灯⑤	7/12	BB11	1.5	0.95	近世東西方向溝確認、中世層確認
	21 f		東西道路南側外灯⑥	9/27	BB12	1.4	0.85	中世層確認、旧陸軍東西方向水路確認
	21 g		東西道路南側外灯⑦	7/11	BB12	1.1	0.7	近世層確認、近世東西方向溝確認
	22 a		集水桝①	7/9	BB10	1.4	0.6	礫層確認
	22 b		集水桝②	7/12	BB11	1.4	0.9	中世層確認、近世東西溝確認
	22 c		集水桝③	7/31	BC10	2.1	－	既掘内
	23 a		東西道路南側 樹木植穴①	7/11	BB12	0.7	－	造成土内
	23 b		東西道路南側 樹木植穴②	7/11・16	BB10・11	0.6～0.7	－	造成土内、②～④旧陸軍東西方向水路確認
	24		自由勾配側溝① (保健管理センター 北：東西)	7/12～18	BB09～12	0.8	0.6	近世層確認、近代南北方向溝、 近世南北方向の段・溝確認
	25		重圧管管路	7/23・25	BB10・11	1.0～1.1	－	造成土内、旧陸軍東西方向水路確認
	26 a		ガス管管路1－①	7/26	BB10	1.0	－	既設・造成土内、旧陸軍東西方向水路2条確認
	26 b		ガス管管路1－②	8/5		1.2	0.55	礫層確認、近代南北方向溝、 近世土壌確認
	27		自由勾配側溝② (さくら広場西： 南北・斜行)	7/31、10/11・ 15・16・28・ 29	BB・BD10	0.75～0.85	－	造成土内
	28 a		さくら広場外灯①	7/31	BB10	1.4	0.5	弥生前期層確認
	28 b		さくら広場外灯②	8/1	BC10	1.1	0.45～ 0.55	古墳時代前期層確認、古墳時代後期土坑(焼土◎)、近世土坑確認
	28 c		さくら広場外灯③	7/31	BC10	1.2	1.05	近世層確認
	28 d		さくら広場外灯④	7/31	BD10		1.1	近代層確認
	28 e		さくら広場外灯⑤	8/29	BC09		－	造成土内
	29		自由勾配側溝③ (保健管理センター と大学会館の間)	8/28	BC10・11	0.6	－	造成土内
	30		ガス管② (保管北～南)	8/29～9/2	BB10・BC10	0.75～1.4	0.85	近世層確認、近世～近代東西方向溝、近世土坑確認

第1章 津島岡大遺跡の調査研究

種類	調査 番号	工事名称		調査期間	構内座標	調査深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内 容	
立会	31	大学会館周辺他 環境整備	パーゴラ電気設備	9/11	BC11	1.5	0.75	礫層確認、弥生時代ピット、 戦国時代南北方向溝確認	
	32		パーゴラ基礎	9/19・20	BC11	0.6	－	造成土内	
	33		植穴	9/24	BB11・BD10	0.6～0.7	－	既設・造成土内	
	34		車止め	12/20	BD10	0.8	－	造成土内	
	35 a	ガス漏れ修理		8/30・9/12	AZ03	1.1	0.5	弥生時代前期黒色土確認	
	35 b			9/13・18、 1/29	AZ01・BA06・ BJ18	0.8～1.55	0.4～1.15	近世層確認	
	35 c			8/27	BA06	0.7	0.5	近代層確認	
	35 d			8/23・29・ 30、9/13、 1/10・17・ 20・27、2/14	BD26・AZ01・ AZ03・BJ18・ BI16・BH15・ 16	0.7～1.3	－	既設・造成土内	
	36	ガス管補修		9/26	BA08・BG22・ BJ18・BH15	0.3～1.1	－	既設・造成土内	
	37	附属図書館改修	アース埋設	11/6	AW13	1.3～1.6	－	造成土内	
	38		雨水排水（管路）	3/11	AX14	0.8～1.0	－	造成土内	
	39		屋外階段	12/5	AW12	0.66～0.89	－	造成土内	
	40		生活排水	2/4	AX13・14	0.7	－	造成土内	
	41		外灯移設	1/27	AW12	1.4	－	造成土内	
	42 a	農学部3号館	排水管改修	10/9・14・ 15・16・17	BE16・17	0.75～0.3	－	既掘・造成土内	
	42 b			10/10	BE16	1～1.2	1.2	近世層上面確認	
	43	情報処理センター	ドレン管理設	11/22	AV11	0.3～0.4	－	造成土内	
	44	理学部	受水槽： ハンドホール	12/3	AZ10・11	0.4～0.84	－	造成土内	
	45	テニスコート改修			12/19	AY00・01	0.8～0.85	－	造成土内
	46	駐車場整備	農学部：U字溝	1/14	BE17	0.5	－	造成土内	
	47 a		農学部：外灯	1/14、2/21	BD16・17、 BE18	1.15～1.3	1.15	GL-1.15mで近代層確認	
	47 b			2/21	BD17	1.3	1.04	近世層確認	
	47 c			1/14・22、 2/21	BF17・18、 BD17・18	1.05～1.15	－	既設・造成土内	
	48		農学部：樹木移植	1/16	BE16	0.6	－	造成土内	
	49		農学部：側溝柵	2/10	BE16～18	0.85～1.10	－	造成土内	
	50		農学部：樹木移植 (北辺・西辺)	2/10	BD16	0.7～0.9	－	造成土内	
	51 a		文・法・経済学部： 外灯	3/11	AY16・17、 AZ16・17、 BA16	1.1～1.4	－	造成土内	
	51 b			3/11	BA16	1.2	1.0	GL-1.0mで近代層確認	
	52	埋文センターガス管新設			3/19・20	AU11	1.0	0.9	市道：GL-0.9mで近代層確認
	53	新技術研究センター電気配線復旧			3/24	AW00	0.88	－	造成土内

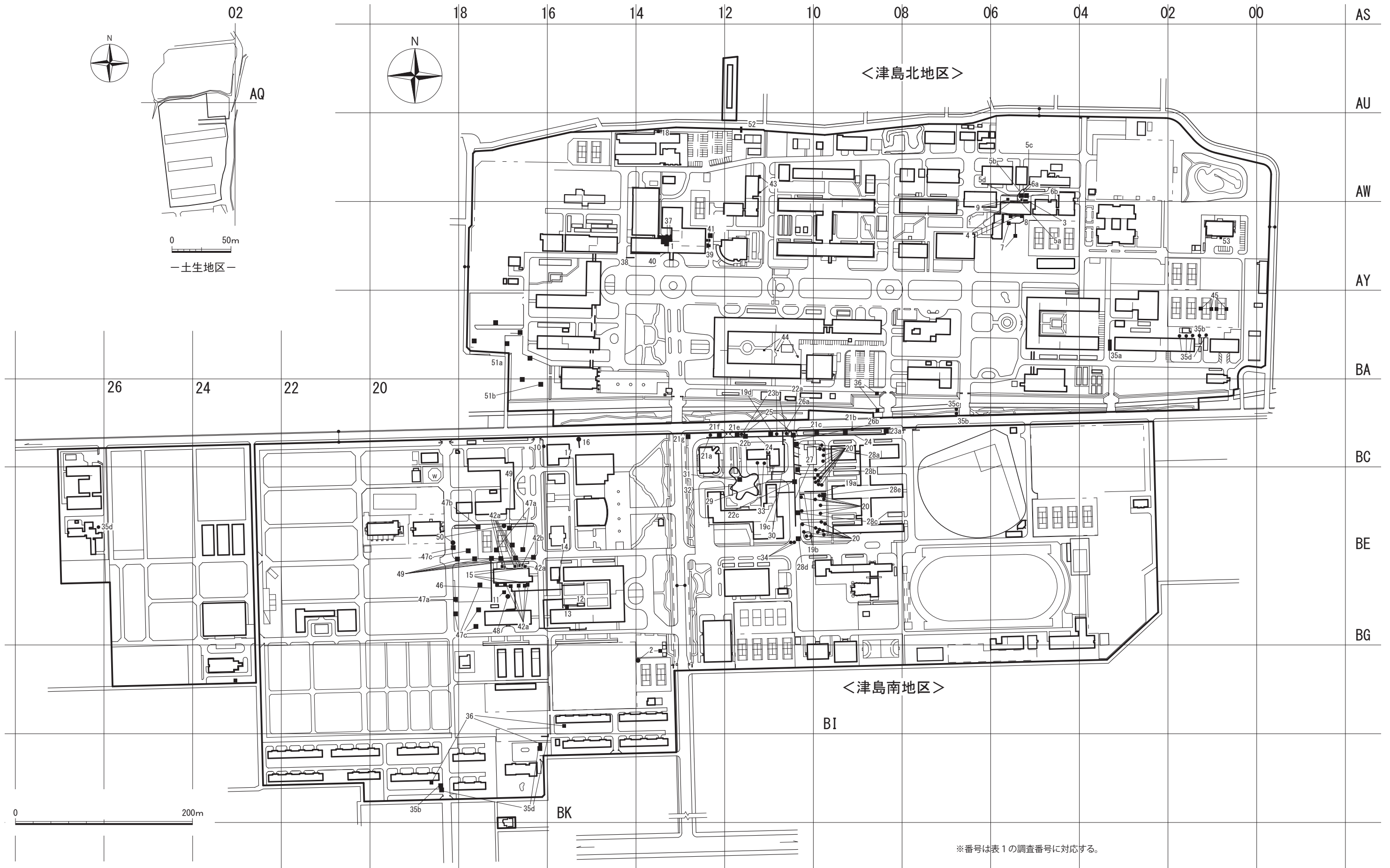


図27 2013年度の調査地点【1】一津島地区一（津島地区 縮尺1/4,000、土生地区 縮尺1/3,000）

第2章 鹿田遺跡の調査研究

第1節 発掘調査の概要

1. 鹿田遺跡第25次調査 I 工区（中央診療棟建設Ⅱ期、調査番号1、鹿田BY～CD・24～38）

調査期間 2014年1月6日～4月17日

（表土掘削：2014年1月6日～2月27日、発掘調査：2月28日～4月17日）

調査面積 650m²

調査担当 岩崎志保（助教、主任）、山口雄治（助教）、南健太郎（助教）、山本悦世（教授）

a. 調査に至る経緯と経過

経緯 岡山大学鹿田キャンパスでは中央診療棟新営工事にともない、2007年・2009年にⅠ期工事分3,645m²を対象として第18次・20次調査を実施した。その後、2013年度に入ってⅡ期工事範囲の発掘調査計画が具体化し、対象面積2,545m²を二回に分けて調査することとなった。2013年度に対象地の南側650m²（以下Ⅰ工区と称する）の発掘調査に着手した。Ⅰ工区の調査期間は2ヶ月、調査員2～4名が担当した。

経過 表土掘削を2014年1月6日より開始した。敷地内のコンクリートの基礎については、強固な構造であったため、調査終了後に撤去することとし、調査はコンクリート基礎と底盤の間に残る4×2m程の島状の高まり9カ所と、調査区南壁に残る狭小な部分約180m²が対象となった。表土掘削は2月27日に終了した。

発掘調査の開始は2月28日である。当初調査員2名が担当し、中世層以下については、3名～4名で対応した。

攪乱部分の清掃を終え、調査開始状況の写真撮影後、近代層・近世層の大半は削平されていたため、おおむね中世層の上面で、近代・近世・中世の遺構の精査を行った。2013年度中に検出した遺構は、近世の溝・土坑、中世の溝・井戸・土坑・ピットである。これ以降の調査および、北側に予定された2工区の調査は2014年度に継続して実施した。1工区・2工区の調査概要は合わせて、次号で報告することとする。（岩崎志保）

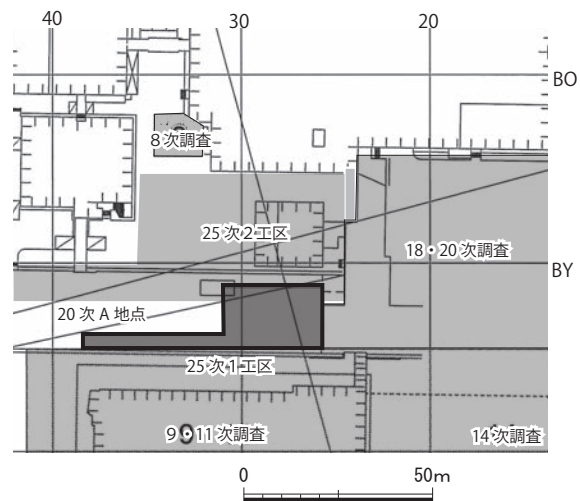


図28 調査地点の位置（縮尺1/2,000）

第2節 立会調査の概要

1. 調査の実施状況

鹿田地区における2013年度の立会は10事業48件が実施された。そのうち掘削深度が大きく、包含層や遺構が確

認められた4件について、ここで詳述する。なお、一部の掘削は2014年度にかけて実施されたが、一連の事業として今回報告に含めた。

2. 医歯薬融合棟新営にともなう污水配管工事

(調査番号 8～10 AD～AK66・67、AK～AZ68、AX・AZ～BB69、BB・BC65、BC～BL60～71区)

a. 調査地点の位置

医歯薬融合棟新営にともなう污水配管工事である。共同下水桝にいたる総延長約300mの経路である。同建物の北・西・南側に工事は及び、その中で建物西側の130mについて報告する。特に建物北西角から敷地北西角までの経路は約20～25m間隔で桝を設置するもので、掘削深度は現地表から1.4～2.7mにおよぶ。

b. 調査成果

(1) 層序 (図29)

層序はAUラインの北約15mを境に南北で大きく異なるため、各土層の特徴に基づき大別して報告する。Ⅰ層：造成土、Ⅱ層：灰色系の土、Ⅲ層：粗砂の包含が顕著に認められる土層、Ⅳ層：均一な粗砂層、Ⅴ層：緑灰色系の土、Ⅵ層：粘土層、Ⅶ層：砂質土層。このうち、Ⅲ・Ⅳ層は北半にあたる柱状図a～d地点、Ⅴ～Ⅶ層は南半にあたる柱状図e～h地点に堆積する。時期はⅠ層が近代以降、Ⅱ層は中世・近世、Ⅲ・Ⅳ層は古代以前か、Ⅴ層は不明、Ⅵ層は弥生時代、Ⅶ層については弥生時代以前と考えられるが確定できない。

北半(柱状図a～d) 敷地北西角から南へ約65mまでの範囲である。

Ⅰ層は1.3～1.8mの厚さがあり、特に北西角から南35mまでが厚い。Ⅱ層は5～7層に細分される。水平堆積でかつ鉄分の沈着やマンガンの凝集が水平方向に形成されており、耕作土と考えられる。土層の時期を示す遺物は出土していないが、既往の調査成果から、中世～近世の土層と考えられる。Ⅲ層は粗砂の包含が顕著に認められる層で、柱状図aでは砂質土に、b～dでは粘質土に包含される。Ⅱ層と同様、北側は砂質を帯びる土層が主体である。鉄分の沈着が顕著である。土層の時期を推測する材料に欠ける。Ⅳ層は均質な粗砂層で鉄分の沈着が顕著である。本層を確認した約65mの範囲では、鉄分の沈着やグライ化などにより色調に小差がみられるが、土質はいずれの地点でも同質の粗砂が均質に厚く堆積する点で一致する。なお、柱状図c～e間では工事掘削底面がⅣ層に到達しない地点があり、粗砂層の深度と広がりを確認するため、約0.5×0.2m程度の範囲で掘削底面よりも約0.2～0.3m掘り下げた。出土遺物はわずかであるが、古代の土師器片を含む。

南半(柱状図e～h) Ⅰ層は0.7～0.9mの厚みで認められる。Ⅱ層はAUライン以南で認められる耕作土層である。Ⅴ層は緑灰色を基調とする砂質土で、明暗により細分しているが、色調・土質とも近似しており、明瞭に細分されない部分が多い。鉄分の沈着やマンガンの凝集は弱い。柱状図f付近で最も高まり、上面の標高は約2m前後にある。Ⅵ層は暗緑～暗緑灰色を基調とする粘土～粘質土である。鉄やマンガンなどの鉱物の凝集はみられない。弥生土器の包含が認められる。Ⅶ層は緑灰色～灰色の色調を呈する砂質土である。上位から下位にむかって色調が明るくなる傾向が認められる。弥生時代後期の段階の基盤層とみられ、土層の形成はそれ以前に遡ると推測される。

(2) 地形

北半部は均質な粗砂で構成されるⅣ層が厚く堆積しており、古代以前には河道や谷状の地形といった低地であったと推測される。Ⅳ層の上面標高は北から南にむかって下降し、柱状図c・d付近で最深となる。南半部は弥生時代～古代にあたるとみられる土層が標高約2mで確認され、微高地が形成されていたと考えられる。古代段階には低地である柱状図dのⅣ層上面、微高地である柱状図eのⅤ層上面の比高は約1.3mとなる。本地点の東約20～30mに位置する第23次調査地点では南半に微高地、北半に河道が広がることが確認されており、この地

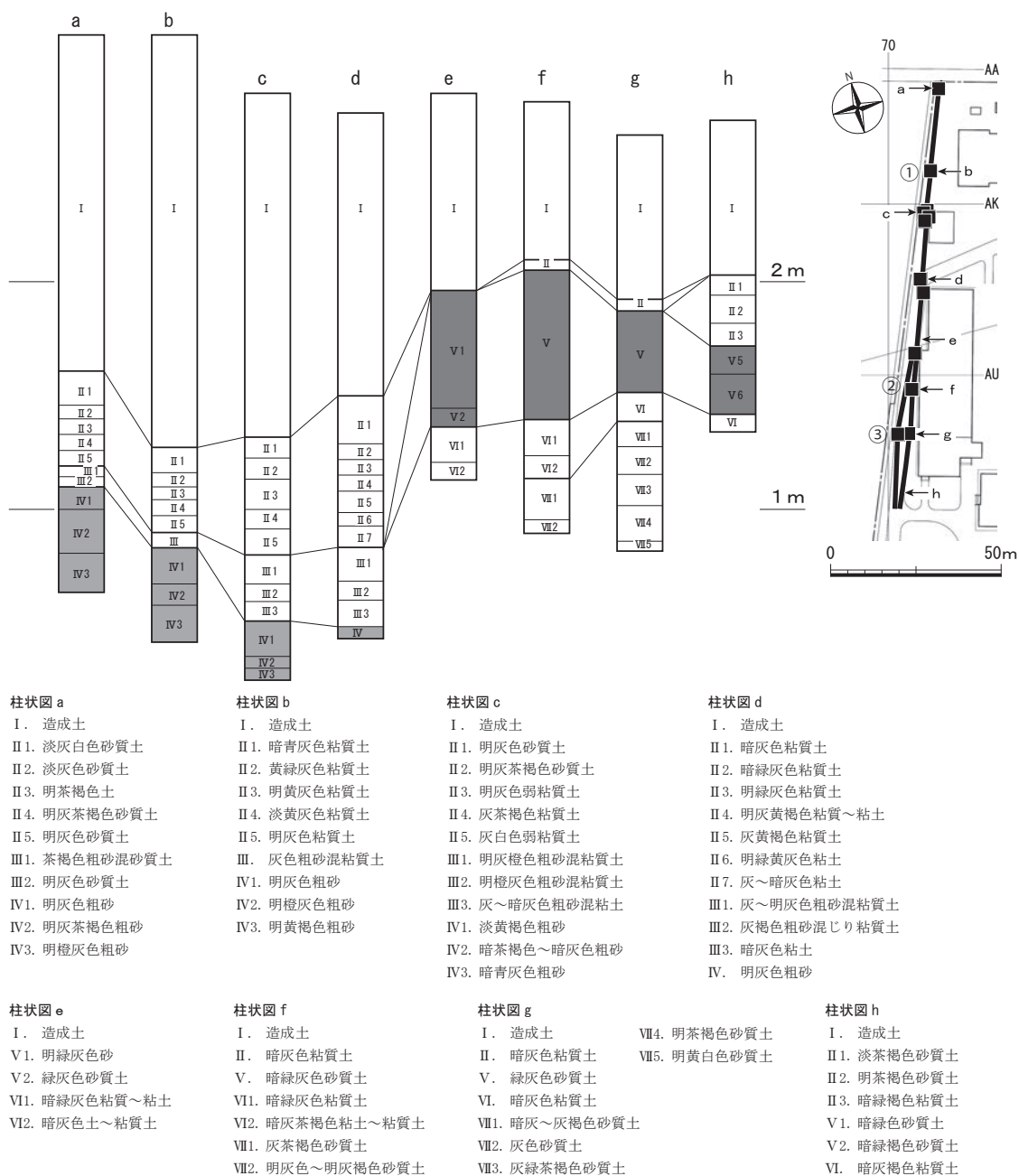


図29 土層柱状図 (縮尺1/40・1/2,500)

形が本地点まで広がることが追認できる。

(3) 遺構

管路①～③(調査番号9 a～f)では、近世と考えられる東西方向の溝1条と、弥生時代のピット1基、管路(同9 g)では近世と考えられる土坑1基を確認した。

溝(図30 調査番号9 a) 敷地北西角から南へ約18～19m付近で検出された(管路①)。II層上面である。幅約1.6m、深さ約0.5mをはかる。掘削幅約0.6mの管路部分での確認であり確定的ではないが、対面する断面にも対応する落ち込みがあり、東西方向にのびる溝と考えられる。埋土は暗灰色粘質土で明灰褐色細～粗砂ブロックを含む。遺物は出土していない。層順から近世に属すると推測される。

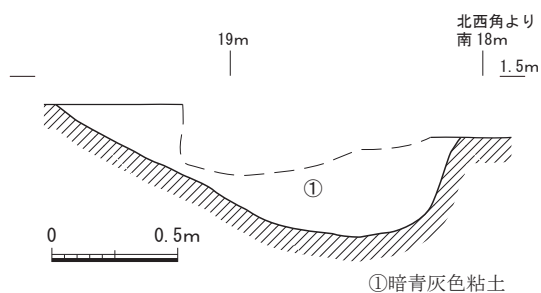


図30 溝（管路①）（縮尺1/40）

ピット（図31 調査番号9 e） 管路②で検出した。掘削面はⅦ-1層である。ピットの東半部を東壁断面、西半部を掘削底面で確認したため、工事掘削底面以下の状況を確認するため西半部を断ち割り、断面を観察した。確認された範囲における規模は直径0.4m、深さ0.4mである。埋土は3層に分層され、1・2層は粘質土、3層は砂質土でいずれも暗緑色系の色調を呈する。全ての層に炭を含む。2・3層はブロックを多く含む土で弥生土器片を含む。出土遺物から弥生時代後期の遺構と考えられる。

土坑（図32 調査番号9 g） 建物北系路のうち、最も西側の榧において、現地地表下約1.2mの掘削底面で確認した。土坑の西半は攪乱を受けている。南北は調査区外にのびているが、検出された掘り方ラインから円形を呈すると考えられる。復元径は約1.5mである。4層から掘りこまれている。工事掘削内で確認された埋土は暗緑灰色砂質土で、わずかに炭小片の包含が認められた。遺物は出土していない。層順から近世に属すると考えられる。

c. まとめ

本調査は敷地西辺の北側約130mにわたって掘削したため、敷地北西部における土層の堆積と地形、遺構の状況を推測するためのデータを得ることができた。敷地の北西部に河道が通ること、遺構密度が低いことは既存の調査成果に合致するものである。

3. 中央診療棟（Ⅱ期）発掘調査に伴う支障配管敷設替え工事

（調査番号32 c、BT35区）

中央診療棟（Ⅱ期）工事地点の北側における配管敷設工事に伴う調査である。その中で32 c 地点（図33）のポンプ槽設置箇所で見出した中世溝2条と土坑1基について

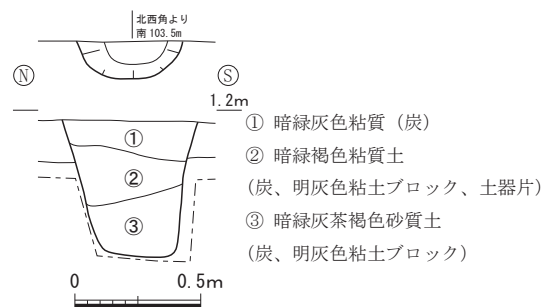


図31 ピット（管路②）（縮尺1/40）

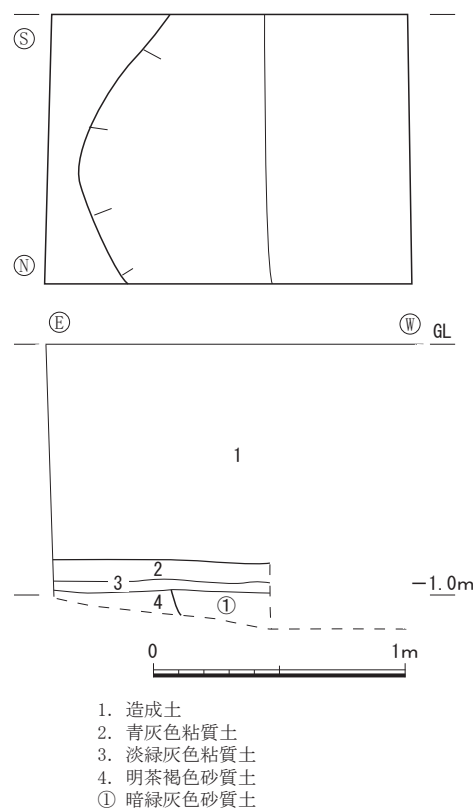


図32 土坑 平・断面図（管路③）（縮尺1/40）

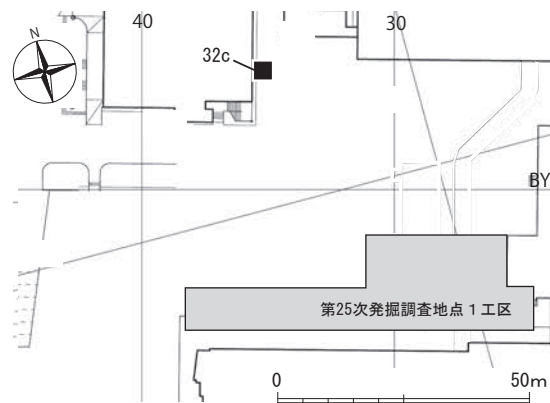
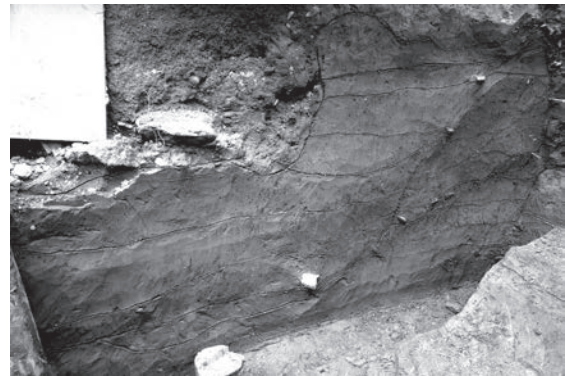
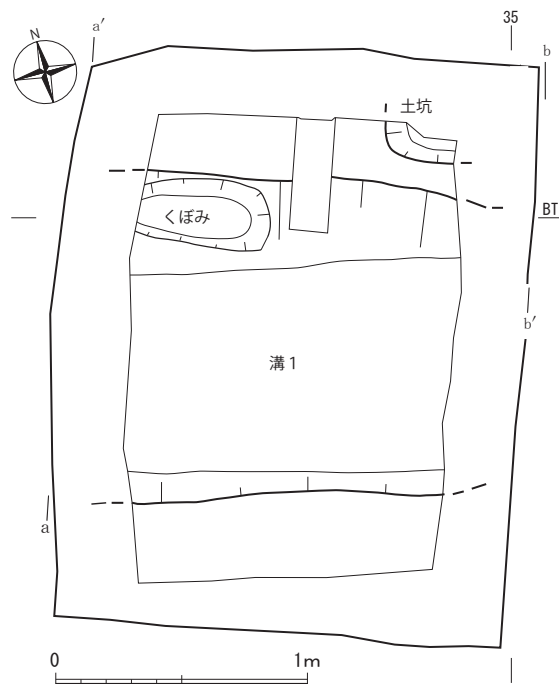


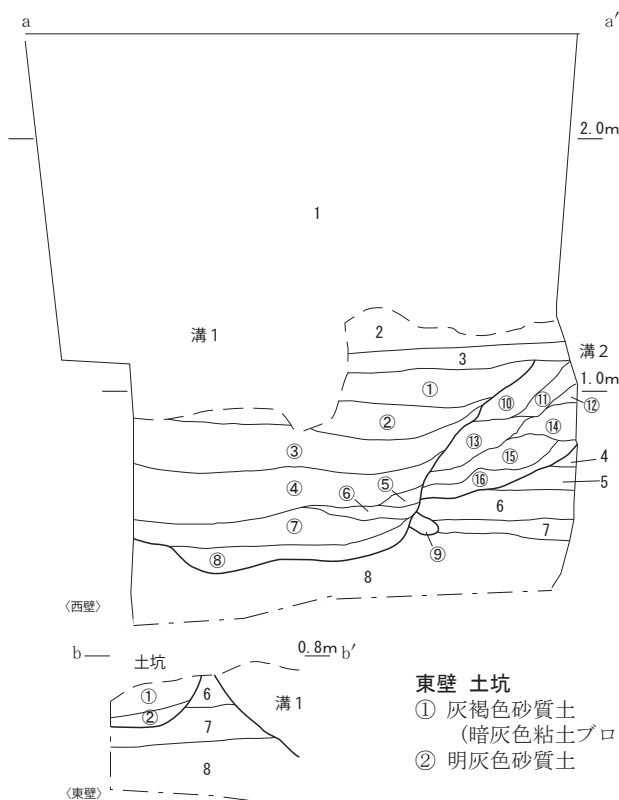
図33 調査地点の位置（縮尺1/1,500）



西壁断面



東壁断面



- 1 造成土および攪乱埋土
- 2 暗青灰色粘質土
- 3 明緑～明青灰色粘質土
- 4 明灰褐色砂質土
- 5 明灰色粘質土
- 6 灰色粘質土
- 7 灰褐色粘土
- 8 暗灰褐色～灰茶褐色粘土

西壁 溝1

- ① 灰褐色粘質土
(明緑黄色砂質土ブロック◎)
- ② 明茶褐色砂質土
(灰色粘土ブロック◎)
- ③ 灰色～青灰色粘質土
(明緑黄色砂質土ブロック)
- ④ 暗灰茶褐色粘土
- ⑤ 明灰色砂質土
- ⑥ 淡緑灰色砂質土
- ⑦ 暗灰色砂混じり粘質土(炭・木質)
- ⑧ 暗灰褐色粘土(木質◎)
- ⑨ 暗灰色砂

溝2

- ⑩ 暗緑灰色粘質土
- ⑪ 灰緑色砂質土
- ⑫ 灰色粘質土
- ⑬ 明灰褐色砂質土(Fe◎、炭)
- ⑭ 明灰茶褐色砂質土(Fe、炭・焼土◎)
- ⑮ 灰色弱粘質土(Fe◎、炭・焼土)
- ⑯ 灰茶褐色砂質土
(Fe◎、土器片◎、炭・焼土)

図34 調査区全体図・土層断面図 (縮尺1/40)

て報告する。調査範囲は、南北約2.3m、東西約1.8m、掘削深度は約2.3mである。

a. 層序

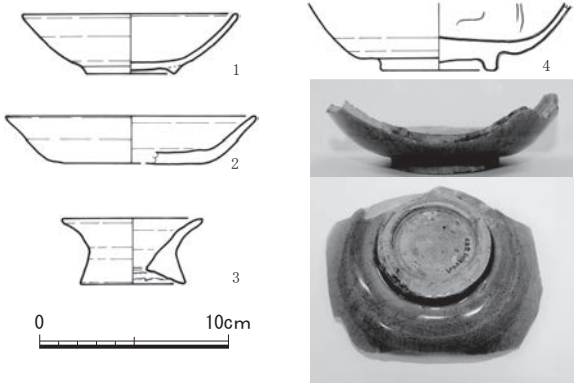
1層は近・現代の造成土、2層は暗青灰色粘質土で近代の耕作土、3層は明緑～明青灰色粘質土で近世の耕作土と考えられる。4層以下は中世以前の堆積であるが、各土層の時期を示す遺物が出土しておらず時期比定は難しい。4層は明灰褐色砂質土で鉄分の沈着が著しい。5層は明灰色粘質土である。6層は灰色粘質土で鉄分の沈着が顕著である。7層は灰褐色粘土で炭化物が薄層をなしている。8層は暗灰褐色～灰茶褐色粘土で灰白色粘土ブロックを含み、植物遺体を多く含む。

b. 遺構・遺物

溝は東西方向にのびる2条が重複して検出された。溝の規模は、溝1が幅1.6m以上、溝2が幅0.6m以上、深さは溝1が0.84m、溝2が0.57m以上である。断面形は溝1が逆台形、溝2は残存範囲が少なく、復原しがたい。

埋土は溝1では8層に、溝2では7層に分層される。溝1の埋土は土層の特徴から明緑黄色砂質土・灰色粘土ブロックを包含する①～③、粘土層の④、砂質の強い⑤・⑥、木質を含み粘性の強い⑦・⑧の4つに大別できる。⑤・⑥層は断面の北側で確認された部分的な土層で、北側法面に流入した砂質土が浸食されずにのこったものとみられる。なお、⑨層は溝底面に打ちこまれた杭痕跡の可能性がある。

溝2は底面から法面にかけての部分のがのこっており、法面の傾斜に沿って流れ込んだかたちで堆積する。溝2の埋土は包含物のみられない⑩～⑫層、炭・焼土を含み、鉄分の沈着が顕著な⑬～⑯層に大別される。特に⑭層は遺物・炭・焼土の包含が著しい。



出土遺物は28ℓコンテナで約1/3箱、土師質土器、鍋、竈、亀山焼、青磁碗等が出土した（図／35）。溝の時期は1の吉備系土師質土器碗から鎌倉時代後半と考えられる。

土坑は調査区の北東で検出した。長さは約0.4m、深さ約0.2mで、西端は丸く収束するが、東への延びが想定される。本来の掘削面は不明である。遺物は出土していない。

番号	種類・器種	法量 (cm)			形態・手法他	胎土	色調
		口径	底径	器高			内面／外面 (断面)
1	土師質・碗	11.4	4.6	3.1	内外面：ナデ	微～細砂	乳白色／白色
2	土師器・杯	13.0	7.2	2.5	内外面：ナデ、底部外面：ヘラ切り後ナデ	粗砂～細礫	明橙色／明橙～淡橙色
3	土師質・脚台	7.4	5.4	3.5	内外面：ナデ、脚部内面：ヘラケズリ	細～粗砂	淡灰茶褐色
4	青磁・碗	—	6.1	—	角高台、疊付・底部外面露胎、内面一部にヘラ描き文、龍泉窯系	精良	緑色／緑色 (灰白)

図35 溝出土遺物（縮尺1/4）

4. その他の調査地点

本年度の立会調査のうち、上記以外で中世以前の包含層・遺構を確認したものとして、臨床研究棟改修工事＜調査番号19＞、学生支援センター・図書館排水工事＜同26 a＞がある。

調査番号19 本調査は臨床研究棟西側の電気配線工事の一部としてアース板を埋設するものであり、掘り方上端の規模は約1.2×0.5m、掘削深度は約1.65～1.75mで、深度に対して幅が狭い。そのため掘り方内部の断面観察は十分にし得ない状況であった。アース板は近接した3ヶ所で埋設されたが、それぞれの土層の状況は一致していたため、ここでは最南の埋設坑における観察結果について柱状図を示す。なお、遺物がほとんど出土していない

いため、土層の時期は周辺調査成果を参考に推定した。

1層は近現代の造成土である。2層は明灰色粘土で近代の耕作土と考えられる。3層は暗青灰色粘質土で近世層とみられる。4層は暗灰色砂質土で土師質土器細片をわずかに含むため、中世層と考えられる。5層は暗灰茶褐色砂質土で中世層の可能性はある。6層は明灰黄褐色砂質土で、古墳時代の土層とみられる。7層は灰茶褐色砂質土で、弥生時代から古墳時代の土層と考えられる。遺構はいずれの掘削箇所においても確認されていない。

調査番号26a 本調査は学生支援センター・図書館の排水工事のうち、鹿田地区北辺に埋設された公共下水榦に接続する箇所にあたる。掘削深度は現地表面から約2.1mである。

1層は近現代の造成土である。2～5層は明灰色を基調とする砂質土で、鉄分の沈着が顕著に認められる。6・7層は灰色を呈する粘質土である。土層の特徴から、中世～近世の耕作土層と推測されるが、遺物が出土しておらず、各層の時期を特定できない。

(野崎)

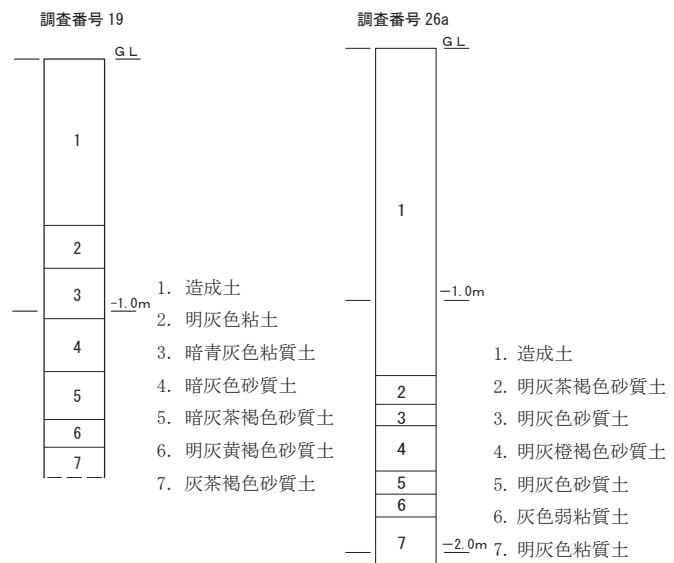


図36 土層柱状図

表3 2013年度の調査地点【2】鹿田地区

種類	調査 番号	工事名称	調査期間	構内座標	調査深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内容	
発掘	1	医歯薬融合型教育研究拠点施設	2012/11/27～ 2013/4/25	BD～BL57～69	2.0	0.9	弥生時代溝、古墳時代初頭・土器・棺、 古代井戸・土坑、中世溝・畦・井戸・ 土坑、近世溝・土坑、近代畝状遺構	
	2	中央診療棟Ⅱ期	2014/1/6～4/17	BY～CD24～38	2.1	0.8	弥生時代畦畔、中世井戸・土坑・溝・ 柱穴、近世土坑・溝	
立会	3	医歯薬融合型教育 研究拠点施設新営	浄化槽撤去	5/2	BM57・58	3.6	1.1	弥生基盤層以下まで確認
	4		共同溝撤去	5/8	BE65	2.3	1.1	弥生基盤層まで確認
	5		ボイラー棟撤去	5/8	BH・BI66～68	3.9	1.1	弥生基盤層以下まで確認
	6		重油タンク撤去	5/14	BC67・68	3.5	1.1	弥生基盤層以下まで確認
	7		煙突撤去	5/16	BJ・BK69	4.9	1.1	弥生基盤層以下まで確認
	8		工事前電気引き込み	7/3	AV68	2.0	1.0	中世層（？）確認
	9 a		排水配管（A工区：榦1基・ 管路1区間）	9/24・25・ 10/3～18	AD～AH66・67	2.45～2.68	1.2～1.65	近代・近世・中世層・古代河道、近 世溝1確認
	9 b		◇（B工区：榦1基・管路 1区間）	10/21・22	AI～AK67	2.2～2.45	1.6～1.65	近代・近世・中世層・古代河道確認
	9 c		◇（C工区：榦3基・検水 槽1基・管路5区間）	9/30・12/2・16・ 17・20・24・25・ 1/7	AJ66・AK67・68・ AL～AP67・68	1.8～2.66	1.35～1.7	近代・近世・中世層・古代河道確認
	9 d		◇（D工区：榦2基・管路 2区間）	12/26・1/7・10・ 15・16・17・20	AO～AT68	1.7～2.05	1.2～1.35	近代・近世・中世層・古代河道確認、 榦S19南約20m以南で弥生～古代の 砂層、弥生後期包含層確認
	9 e		◇（E工区：榦2基・管路 2区間）	1/17・20～22	AS～AW68	1.45～1.9	0.7～0.75	近代層・弥生～古代砂層・弥生層、 弥生ビット確認、弥生土器片出土
	9 f		◇（F工区：榦2基・管路 2区間）	1/21・24・30・ 2/3・4	AU・AX～AZ68、 AX・AZ～BB69	1.33～1.84	0.7～0.75	近代・近世・中世層・弥生～古代層・ 弥生層確認
	9 g		排水配管（G工区：榦7基・ 管路2区間）	10/4・7・8・ 11/19・21	BC66～70、BD61・ 63・64、BE60～63	0.88～1.5	0.89～1.15	近代・近世・中世層、近世土坑1確 認
	9 h		◇（H工区：榦5基）	11/15・18	BF・BH・BI69	1.35～1.5	1.15	近代層確認
	9 i		◇（I工区：榦9基・管路 5区間）	9/26・10/4・15・ 16・18・23	BK59～61・70・ 71、BL58～60・ 64～67・69	0.95～1.35	0.93～1.27	近世層確認

第2章 鹿田遺跡の調査研究

種類	調査 番号	工事名称		調査期間	構内座標	調査深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内容
立会	10 a	医歯薬融合型教育 研究拠点施設新営	電気設備	10/3・4	BD62・BK～ BL65～66	1.3～1.4	1.1～1.3	近世層確認
	10 b		電気設備	2/10	BB・BC65	0.53	－	造成土内
	11	Jホール新営	給水管	9/2	AL53	1.5	0.8	近代～中世層？確認
	12		給排水管路	9/3・10/1～3	AL53～62、AK・ AI62～67	0.65～1.85	1.3	近代～中世層確認
	13		電気管路	9/3	AL53～AL62	0.7～0.8	－	造成土内
	14		樹木撤去	9/9・10	AK・AM53	0.5～0.8	－	造成土内
	15		U型側溝・円形水路	9/24・30	AK53～AK61、 AN64～AY64	0.5～0.55	－	造成土内
	16		雨水排水・集水桝	9/30・10/10	AY64	0.83	－	造成土内
	17		臨床研究棟改修	実験水槽	11/19	BN・B035	1.0	－
	18	電気配管（西面）		1/6	BI～BO43	0.6	－	造成土内
	19	電気配管（アース）3ヶ所		1/7	BJ・BK43	1.64～1.73	0.6～0.71	近世・中世・古墳？層確認
	20	給排水		1/10	BP41	0.65	－	造成土内
	21	雨水桝		1/23	BI35・36	0.65	－	既設内
	22	図書館・学生支援 センター改修	電気管路	8/21・22	AM44～47	0.5～0.6	－	造成土内
	23		地中梁	11/19	AG43・44	0.9	－	造成土内
	24		エレベーターピット	12/12	AF・AG46・47	2.17	1.8	近代・近世層確認
	25		テラス基礎	2/3	AT・AU49	1.0	－	造成土内
	26 a		排水配管（A工区）	11/1	AD40	2.0	1.3	中世層確認、近世土坑1
	26 b		＊（B工区）	3/11	AD・AE39・40	1.75	1.5	近代～中世層・河道？確認
	26 c		＊（C工区）	3/6・10	AF40～42	1.52～1.63	1.06～1.2	近代～中世層確認
	26 d		＊（D工区）	2/27・28・3/3・5	AG～AM42	1.42～1.56	1.26～1.3	近代・近世層確認
	26 e		＊（E工区）	2/13・17	AP～AU42	0.7～1.0	－	造成土内
	26 f		＊（F工区）	3/24	AK42・43	0.95	－	造成土内
	27	西側雨水管路	2/17	AT・AU48	0.9	－	造成土内	
	28	電気配管（アース）	2/18	AM46	1.5	－	既設内	
	29	電気配管	12/12	AJ48・49	0.8	－	造成土内	
	30	給水・消火管	2/12・13	AU～AW40～42	1.4	0.8	近代～中世層？確認	
	31	ガス管改修	2/25	AE42	1.1	－	既設内	
	32 a	中診Ⅱ期発掘調査 に伴う支障物撤去	排水配管（A工区：桝2基・ 管路2区間）	8/20・2/17・21	BZ～CC42、BX・ BY43	1.1～1.45	0.85～1.0	近代・近世・中世層、近世土坑・近 世畦畔確認
	32 b		＊（B工区：桝4基・管路 5区間）		BT35、BV35・37、 BX37～41		－	既設内
	32 c		＊（C工区：桝1基）	2014/3/30・4/2・3・ 7～9	BT35	2.3	1.1	近代～中世層、中世溝確認
	32 d		＊（D工区：桝4基・管路 5区間）		BT24～33・35	1.25	0.8	近世層確認（桝1基）
	33	樹木抜根	2/12	BS33	0.5	－	造成土内	
	34 a	ライフライン再生	電気設備（管路）	8/17・19・20	AH52～AH60	0.9～1.05	－	既設・造成土内
	34 b		電気設備（管路）	9/23	BJ45	0.8	－	既掘・造成土内
	35		給水（Jホール南東）	10/17・2/24	AY53～58	0.7～0.86		既掘・造成土内
	36		給水（医学資料室北・東）	12/5・24	AF52・53・54、 AE54	0.75～1.3	1.0	近代層確認
	37		給水（体育館北西）	2/21	CC51	0.8	－	造成土内
	38		給水（体育館北）	1/27	CB・CC46・47	0.7	－	既設内
	39		給水（動物実験棟北）	12/18	CD61～63	0.85	－	造成土内
	40		給水（南立体駐車場北）	12/27	CM46・47	0.85	0.6	近代層確認
	41		給水（学生支援センター東）	1/6・14・16・21・ 23	AU～AW39・40、 AW41、AI・AJ・ AL・AM42	0.8～1.25	0.77	近代層確認
	42		給水（歯学部東）	2/5	AR09	0.76	－	造成土内
	43		給水（体育館南）	12/20・24	CJ52・CK46・47	0.75～0.85	－	造成土内および既設内
	44		給水（学生BOX北）	12/25	CP68・69	0.7	－	造成土内
	45		給水（弓道場東）	1/7	CH69・70・71・72	0.6	－	造成土内
	46		ガス管改修	1/22	CC・CD54・55	0.65～0.9	－	既設内
	47 a	樹木移植	移植元	12/9～11	CJ・CK60・61	1.0～1.2	0.95～1.0	近代・近世層確認
	47 b		移植先	12/11	CV・CW69・70	1.3	－	造成土内
	48	テニスコート改修		1/10	DB68・71・72・74	0.85～0.9	－	造成土内



図37 2013年度の調査地点【2】－鹿田地区－（S=1/2,500）

第3節 鹿田遺跡の研究

1. 鹿田遺跡出土の銅鏃について

a. はじめに

弥生時代には日本列島で青銅器の生産が始まり、武器や鏡、鐸などが作られた。近年は鋳型の出土や東アジアにおける青銅器の型式学的研究の進展により、列島における青銅器生産の開始時期が弥生時代前期にさかのぼる可能性が指摘されている。また青銅器生産の展開についても鋳型・製品の両面からの検討により研究が深化している。銅鏃も日本列島で生産された青銅器のうちの一つであり、出土数は他の青銅器を凌駕している。分布は関東から九州までの広範囲におよび、各地域での生産も想定されている。また弥生時代から古墳時代前期まで生産が継続しており、弥生時代は多様な形態が各地域において存在する一方、古墳時代前期にはある程度定型化した様相が見られる。このように銅鏃は弥生時代から古墳時代前期の青銅器生産の様相を検討する上で欠かすことのできない資料であり、古墳時代への移行の具体像に迫ることができる可能性も秘めている。

近年は出土が集中する地域も確認されるようになってきたが、その生産・拡散の具体像についてはまだ不明確な部分が多い。なかには東海地方の多孔銅鏃のように形態的な特徴から拡散範囲や時期が捉えられるものもあるが、弥生時代の銅鏃は一般的に有茎で鏃身部が三角形、あるいは柳葉形といった形態をとるため、各地域における特徴を抽出することは難しい。銅鏃が製作地周辺の枠をこえて広域に拡散する場合も考えられるため、問題はより複雑となる。

このような状況の中で製作地、生産体制、地域間関係を読み取るためには、各地域の銅鏃を形態だけではなく、製作技術的な観点からも検討することは重要な課題といえる。本論では岡山市鹿田遺跡出土銅鏃について、形態、製作技術の面から検討を行う。鹿田遺跡が位置する岡山県南の平野部は銅鏃が多く出土する地域であり、その生産も想定されている。本論を当地域における銅鏃の生産・拡散についての基礎的検討として位置づけ、鹿田遺跡の性格を考えるための一助としたい¹⁾。

b. 鹿田遺跡出土の銅鏃

鹿田遺跡では第1次調査（外来診療棟）と第2次調査（NMR）でそれぞれ1点ずつ、合計2点の銅鏃が出土している（吉留・山本編1988）。第1次調査では土器溜り1から（以下、銅鏃①とする）、第2次調査では包含層から（以下、銅鏃②とする）の出土である²⁾。まず形態的な特徴について整理し、さらに鋳造・研磨痕跡を中心に製作技術についても検討を行う。これらの点から両者の製作時期を明らかにする。さらに出土遺構・出土地点から鹿田遺跡における銅鏃の意義についても考えていく。

(1) 形態的特徴

銅鏃①（図38）

鏃身と茎の先端をわずかに欠損しているが、ほぼ完形である。全長2.9cm、鏃身最大幅1.2cm、茎最大幅0.5cm、厚さ0.3cm、重量2.1gである。平面形態は柳葉形で、鏃身部下端に逆刺がある。鏃身部は中央に幅0.5～0.6cmの平坦面をもち、断面は扁平な六角形になる。平坦面は鏃身から茎まで続いているが、鏃身先端にむけて幅が広がっていく。逆刺と茎端部の形状はA面とB面で異なっている。逆刺はA面が茎から鋭角に屈曲するのに対し、B面の屈曲は直角に近い。茎端部はA面が丸く収まる完結部分が残存しているが、B面には完結部分はみられない。茎は側面の鋳バリがほとんど除去されていないため現状では六角形を呈しており、側面の角には狭い平坦面が形成されている。この平坦面は鏃身まで連なっており、刃は研ぎ出されていない。茎が短いことは本銅鏃の特徴でもあり、A面でみると鏃身の長さが1.8cm、茎の長さが0.9cmで、比率は2:1となる。このように平面形態はA面・B面でほぼ変わらないが、細部の形状においては両面で異なる様相がみられる。

岡山県域では足守川流域の遺跡群と百間川遺跡群でまとまった銅鏃の出土がみられ、鑄造後に研磨されていない段階の銅鏃も出土している（足守川加茂B遺跡：島崎他編1995、百間川今谷遺跡：物部他編2009など）。これらのことから当地域における生産も想定されている（吉田2006・2013）。しかし本銅鏃のような鏃身から茎にかけて平坦面を持ち、断面が扁平な六角形を呈するものはこれまでのところ報告例がない。また茎の長さも際立っている。

なおA面の鏃身部平坦面には赤色顔料が残存している。

銅鏃②（図39）

残存状態が悪く、鏃身のほとんどと茎部の先端を欠損している。現状で全長2.5cm、鏃身幅0.8cm、茎部0.5cm、厚さ0.3cm、重量0.9gである。平面形態の詳細は不明とせざるを得ないが、中央には鏃が鏃身から茎まで通っており、残存している芯の状況から柳葉形であった可能性が考えられる。鏃身は銅鏃①よりもやや細身になるだろう。鏃身の断面形は扁平な菱形であるが、側面には銅鏃①と同様に狭い平坦面が形成されており、鋭利な状態ではない。また鏃身下端に逆刺が認められる。逆刺はA面・B面ともに弱い鋭角をなすが、その位置は縦方向に0.3cm程度

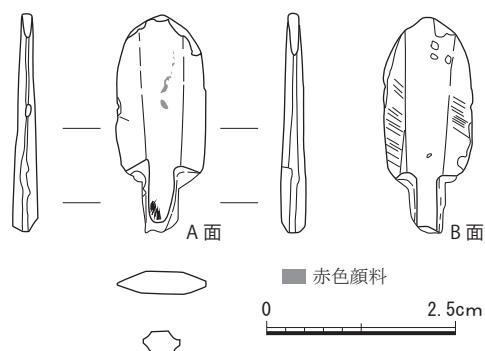


図38 銅鏃①実測図（縮尺1/1）

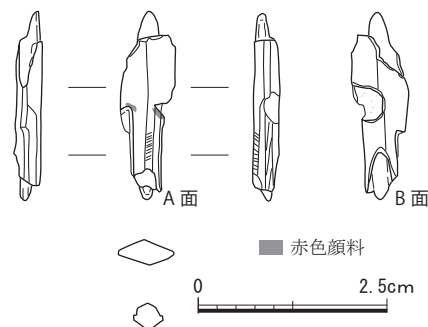


図39 銅鏃②実測図（縮尺1/1）

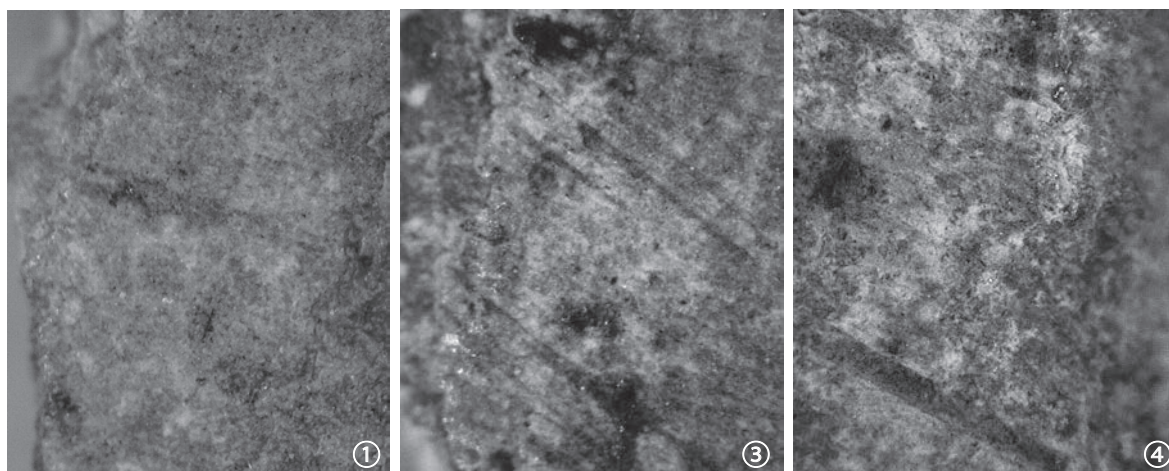
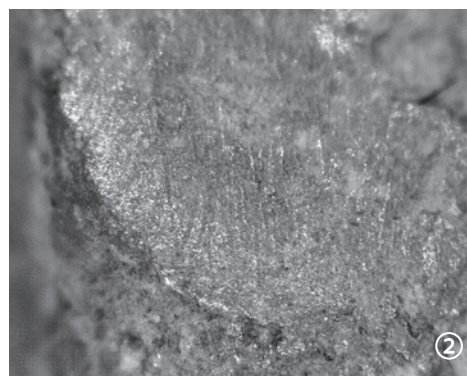
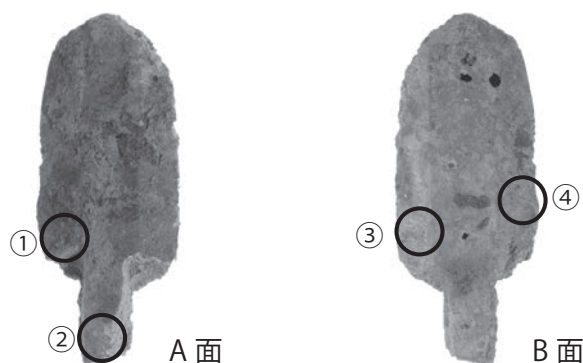


図40 銅鏃①の研磨痕跡

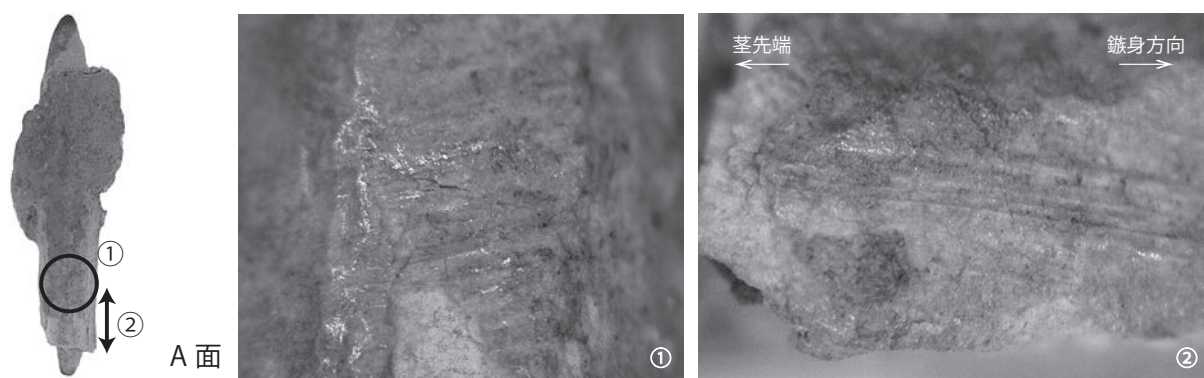


図41 銅鍔②の研磨痕跡

ずれている。

茎はA面が4面、B面が鍔身から続く2面で構成されている。側面には逆刺から続く鍔バリが続いており、突線状になっている。鍔身と茎の比率は残存部の状況からほぼ等しかったと想定される。

銅鍔②は残存状態が悪くA面とB面の詳細な比較はできないが、逆刺や茎の形態が両面で異なっていることは銅鍔①と同様な状況であると言えるだろう。

A面の逆刺部分には赤色顔料が残存している。

(2) 製作技術

2点の銅鍔は形態的には多くの点で異なっている。それでは製作技術はどうであろうか。まず共通するのはA面とB面では細部の形態的特徴が異なっているという点である。両者は鍔身の逆刺や茎先端の形態がA・B面で異なっていた。鍔バリの様相からこれらの銅鍔は2枚の鍔型をあわせて鋳造されたものであるが、両面の形態が異なることは鍔型に彫り込まれた形が異なっていたことを示している。

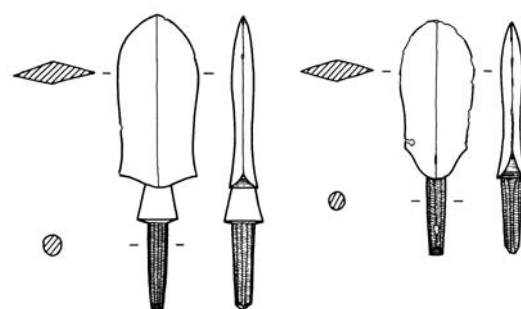
一方鋳造後の研磨方法は両者で異なっている。銅鍔

①では鍔身・茎、銅鍔②では茎に研磨痕が残存している。そこでまず茎の研磨方法を比較してみよう。銅鍔①はA面の茎部先端に研磨痕の残存が顕著である(図40-②)。研磨痕は縦方向だが、左側の狭い範囲には右上がり斜め方向の研磨痕が残存している。これに対し銅鍔②は横方向の粗い研磨痕が顕著に残存しており(図41-①)、茎の断面形は多角形状になる。また銅鍔①の側面は未研磨で、鍔バリが残存しているが、銅鍔②はA面右側面の鍔バリが縦方向の粗い研磨によって除去されているという違いもある(図40-②)。

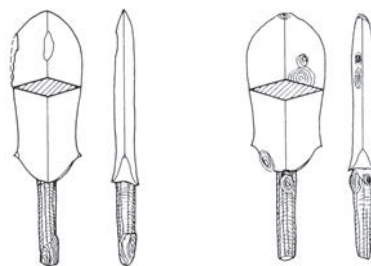
鍔身の研磨については銅鍔①でのみ確認できる(図39-①・③・④)。特にB面が顕著で左上-右下方向に研磨されている。しかし鍔身端部の刃になる部分は平坦になっており、鋭く刃部を研ぎだした様子ではない。このような状況からは銅鍔①が武器として機能したかについては疑問をもたざるを得ない。

(3) 製作時期

ここまでの検討で両者には両面の形態が異なるという特徴は共通しているが、研磨方法には大きな違いがある



浦間茶白山古墳



用木1号墳第1主体部

図42 前方後円墳出現期の銅鍔 (S=1/2)

ことがわかった。ここで両者の製作時期を考えてみたい。

銅鏃①は第1次調査地点土器溜り1からの出土で、遺構の時期は若干幅があるが鹿田・後・3期を中心とする時期であることが報告されている（吉留・山本編1988）。この時期は銅鏃①の廃棄時期を示しており、製作時期はこれよりも古くなる可能性がある。しかし鏃身、茎における研磨痕跡の明瞭な残存からは長期間使用されたと考え難く、銅鏃①の製作時期は遺構の時期を大きく遡らないと考えられる。

銅鏃②は包含層からの出土で、標高1.15mからの出土と報告されている。第2次調査地点の遺構検出面の標高をみると、鹿田・後・2期が0.85～1.15m、鹿田・後・3期が1～1.1m、鹿田・後・4期が0.95m、鹿田・古・1期が1.0～1.05mであり、銅鏃②が出土した標高はこの時期の包含層の中でも最も高所の部類に入る。しかし検出面は地形に左右される部分も大きいため、これをもって銅鏃②の製作時期に迫ることは難しい。また残存状況の悪さから全形が不明確であるため、形態による検討も難しい。そこで製作技術の面から考えていきたい。まず両面の形態が異なる点であるが、銅鏃①に同様の現象が認められ、他地域の弥生時代銅鏃にもみられる（高田浩2001）。また古墳時代前期の銅鏃にも縦方向のズレが平面形態に認められることが確認されており（加藤2008）、弥生時代から古墳時代前期にかけての銅鏃生産における通有の特徴であると考えられる。次に研磨方法を見ていきたい。研磨方法については茎に特徴がある。茎は横方向の粗い研磨が行われており、片方の側面は縦方向の研磨により鑄バリが除去されている。結果的に茎は面取りされたような状態になっており、断面形態は多角形になっている。岡山県域の弥生時代の遺構から出土した銅鏃にはこのような研磨方法のものは他になく、類例は前期古墳に副葬される銅鏃に確認することができる（高田健1997）。岡山県域では岡山市浦間茶臼山古墳、赤磐市用木1号墳第1主体部出土の銅鏃において茎が横方向に研磨され、断面が面取り状の多角形になるものがみられる（図42）。しかし銅鏃②には前期古墳に副葬される銅鏃のような鏃身と茎の間の段はみられず、明確な区分はなされていない。またもっとも顕著な違いは大きさであり、銅鏃②の長さは前述の前期古墳出土銅鏃の約1/3しかない。このような点から銅鏃②は弥生時代後期と古墳時代前期の銅鏃の過渡的な特徴を有しているといえよう。製作時期としては鹿田・古・1期の前後と考えておきたい。

(4) 出土地点・遺構

鹿田遺跡では銅鏃①・②の他に青銅製品は出土していない。銅鏃①が出土した第1次調査地点は当該期の遺構・遺物が最も密に確認される微高地であり、遺構のヴァリエーションも豊富である（図43）。一方、第2次調査地点は第1次調査地点の南東側に位置し、微高地の縁辺部であると考えられる。遺構密度は第1次調査地点よりも低く、特に鹿田・古・1期は前期時期に比べて遺構数が極端に少なくなる（図44）。

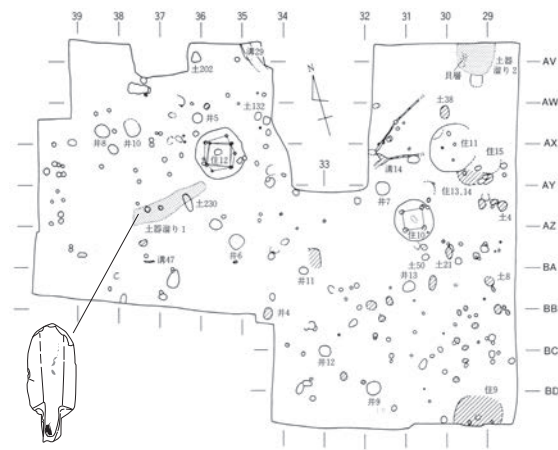


図43 第1次調査地点の遺構配置
(弥生時代後期後半：鹿田・後・3～4)

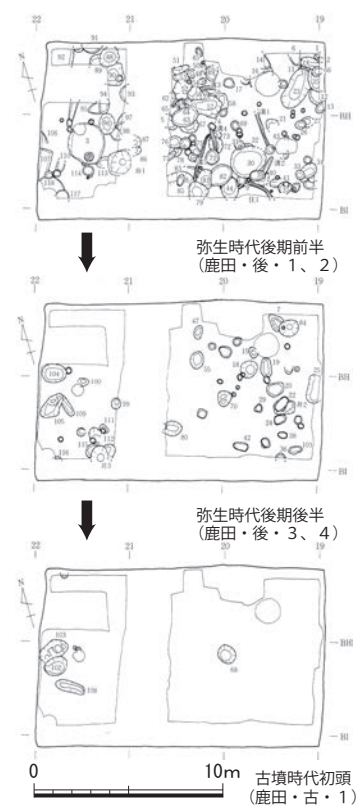


図44 第2次調査地点の遺構変遷
(縮尺1/400)

銅鏃①は第1次調査地点西半中央の土器溜り1からの出土である。銅鏃以外には土器が多数出土しているが、特殊な遺物は出土していない。土器溜り1は土器が北東－南西方向で带状にまとまっており、下部に溝が存在したことも示唆されている。鹿田遺跡の土器溜りは光本順氏によってパターン化されており、第1次調査土器溜り1は「長期的・集落域」に分類される（光本2010）。同じ「長期的・集落域」に分類される第1次調査土器溜り2については「鹿田遺跡北東部の中心的居住域における、集落経営の記憶を内包した特殊性を帯びた場」と評価されている。岡山県域では弥生時代の銅鏃が90点以上出土しているが、出土遺構の明確なものの多くは竪穴住居からの出土であり、土器溜りから出土した例はない³⁾。本土器溜りの形成要因については別途検討が必要だが、土器の大量廃棄にとまなっている点から住居跡への廃棄などとは異なる特殊な背景が考えられる。

また銅鏃②が出土した第2次調査地点は微高地の縁辺部にあたる。第2次調査地点の鹿田・後・3～4期と鹿田・古・1期との間にみられる遺構数の大幅な減少から、鹿田・古・1期の当地点は居住・活動域である微高地（第1次調査地点）とその外側を画する位置であったと考えられる。鹿田遺跡では居住域の中間地帯や周縁部に土器溜り（光本氏分類の「短期的・周辺域」）や井戸が配置されている場合があり（光本2004）、居住域から離れたところに単独で作られた井戸は、日常的な使用とは異なる用途が考えられる（南2013）。このようにみた場合、銅鏃②が土地利用の境界で出土したことは、やはり銅鏃の廃棄に特殊な意義を考える必要があるかもしれない。

c. まとめ

本論では鹿田遺跡で出土した2点の銅鏃の検討を行った。銅鏃①については形態が特殊であり、岡山県域では他に類例がない。このことから他地域からの搬入も含めて今後類例を調査する必要がある。製作時期については共伴した土器や研磨痕跡から銅鏃①が鹿田・後・3期から大きく遡らない時期、銅鏃②を鹿田・古・1期前後と考えた。また鏃身が鋭利に研ぎだされていないことや土器溜り・微高地縁辺部からの出土という面からは、鹿田遺跡における銅鏃が単なる武器としてではなく、特殊な意味合いを持ち合わせていた可能性についても考えていかなければならない。両者が入手・使用・廃棄された時期は鹿田遺跡を含めた岡山県南部地域の弥生時代後期から古墳時代前期の社会を考える上で重要な画期を示す時期である。すなわち鹿田・後・3期は当地域で初めて突出した内容を誇る墓である楯築墳丘墓が築かれる時期であり、鹿田・古・1期前後は前方後円・方墳の拡散といった東からの影響が色濃くなる時期でもある。このような時期に鹿田遺跡で銅鏃が出土したことは遺跡の性格を考える上でも重要である。今後は周辺遺跡を含めた検討を行っていきたい。（南）

本論の執筆にあたっては奥原このみ氏（出雲市教育委員会）、蔵本諭氏（大洲市教育委員会）、島崎東氏（岡山県古代吉備文化財センター）、山本悦世氏（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）から多くの助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 土器編年や時期の呼称については山本悦世氏の編年をもちいる（山本1988）。
- 2) 2点の銅鏃についてはすでに報告がなされ（吉留・山本編1988P 179、P 371）、製作技術の概要についても紹介している（南2012）。本論はこれらを基に考察を加えたものである。
- 3) 土器溜りではないが、岡山市足守川加茂B遺跡では微高地のほぼ中央に位置する貝塚1から未加工の銅鏃が1点出土している。本貝塚からは大量の土器片やト骨をはじめとした骨角製品が出土している（島崎他編1995）。時期は上東・鬼川市Ⅱ式期（本論の鹿田・後・2期）で、銅鏃①の出土状況に似た例として注目される。

参考文献

加藤一郎2008「銅鏃の製作方法に関する覚書」『古代』第121号 早稲田大学考古学会
島崎東・光永真一・江見正巳編1995『足守川河川改修工事に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94 岡山県教育委員会

- 高田健一1997「古墳時代銅鐻の生産と流通」『待兼山論叢』史学篇第31号 大阪大学文学部
- 高田浩司2001「弥生時代銅鐻の二つの性格とその特質」『考古学研究』第47巻第4号
- 光本順2004「鹿田遺跡の弥生時代終末から古墳時代初頭の集落について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 光本順2010「土器溜まり考」『鹿田遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 南健太郎2012「青い鐻の輝き－岡山平野の銅鐻と鹿田遺跡－」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』No.47 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 南健太郎2013「鹿田遺跡における弥生時代から古墳時代初頭の井戸について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2012』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 物部茂樹編2009『百間川今谷遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告217 岡山県古代吉備文化財センター
- 山本悦世1988「鹿田遺跡における弥生～古墳時代初頭の土器」『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 吉田広2006「四国・瀬戸内地域の集落出土青銅器」『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会
- 吉田広2013「吉備における青銅器祭祀の在地化」『考古学研究会例会シンポジウム記録』9 考古学研究会
- 吉留秀敏・山本悦世編1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

図・写真出典

図38～41は筆者作成・撮影

図42浦間茶臼山古墳：近藤義郎・新納泉編1991『浦間茶臼山古墳』真陽社、P50第20図16・19

用木1号墳第1主体部：神原英朗編1975『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報第1集』山陽町教育委員会、P98第17図3・4

図43吉留秀敏・山本悦世編1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、P124図120

図44吉留秀敏・山本悦世編1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、附図9

2. 鹿田遺跡第14次・第18次B地点出土漆製品の塗膜構造

(株)吉田生物研究所

1. はじめに

岡山市に所在する、岡山大学構内の鹿田遺跡から出土した漆製品2点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2. 調査資料

調査した資料は、表4に示す不明木製品と椀、2点である。

表4 分析資料

No.	保存処理 No.	調査次	品名	写真	概 要	報告	出土層／遺構
				No.			
1	1	第14次	漆器椀	1, 3	郷原漆器とされている、内外両面とも赤茶色を呈する椀。器壁の厚さは厚い。樹種クリ	『鹿田遺跡8』 図78W43	2層
2	2	第18次 B地点	黒漆不明木製品	5, 6	細長い一木の部材。横断面はコの字状を呈する。内側を削っている。外面には黒色の漆が塗布されているが、内面には塗られていない。樹種はヒノキ。	『鹿田遺跡7』 図28W14	入り江状遺構 (江戸時代後半)

3. 調査方法

表4に挙げた資料本体の塗膜付着部分から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

表5 塗膜構造

No.	器種	部位	塗 膜 構 造 (下層から)			
			下 地		漆 層 構 造	顔 料
			膠着剤	混和材		
1	椀	内面	漆?	炭化物	赤色漆1層／透明漆1層	ベンガラ
		外面	漆?	炭化物	赤色漆1層	ベンガラ
2	不明 木製品	外面	膠?	地の粉	黒色漆2層	2層とも油煙

4. 断面観察

塗膜断面の観察結果を表5と以下に示す。

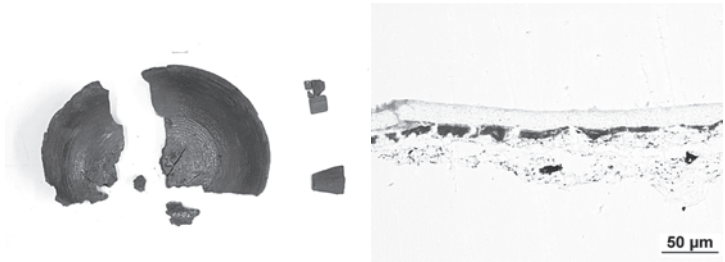


図45 No.1内面

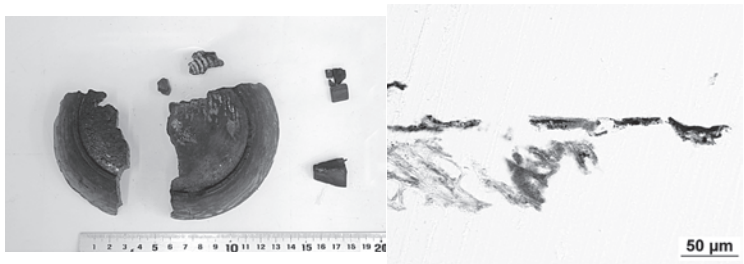


図46 No.1外面

・No.1

内面：木胎の上に下地と漆層が重なる。下地は、漆?に微量の炭化物を混和した下地であった。その上に層厚が薄く、不均一な赤色漆が1層みられ、その上に淡黄褐色を呈する透明漆が1層重なっていた。下層の赤色漆層と上層の透明漆層の層厚を比較すると、下層の赤色漆層の方が薄い。透明漆層の色調は淡黄褐色であったが、その層中には多数の気泡が含まれていた。透明漆層のさらに上には淡褐色を呈する汚れがみられた。

外面：木胎の上に下地と漆層が重なる。下地は、漆？に微量の炭化物を混和した下地であった。その上に層厚の薄い赤色漆が1層みられた。

・No.2

木胎の上に、下地、漆層と重なる。下地は色調の薄い膠着剤に地の粉を混和したものであった。その薄い色調から、膠着剤として漆ではなく膠が使用された可能性がある。下地の上には黒色漆の漆層が2層重なる。この2層に大きな違いは認められない。2層とも、漆に黒色顔料として油煙が混和されており、最下部に油煙の溜まった部分が観察される。

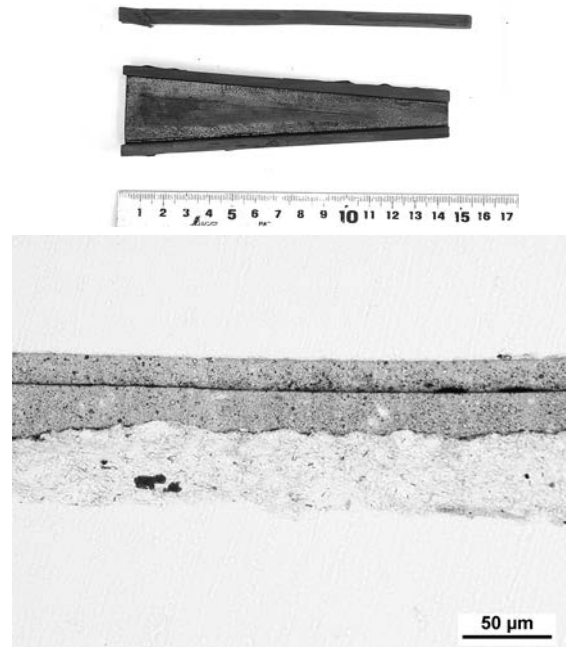


5. 摘要

岡山市に所在する岡山大学構内鹿田遺跡から出土した漆製品2点の塗膜構造調査を行った。

2点の器種は異なるので、単純に比較はできない。碗は一見すると明るい茶色に見える。これは内外面ともに下地の上に薄い赤色漆が塗布されているためであった。外面にはこの赤色漆層しかみられなかったが、内面にはさらにその上に透明漆が1層重ねられていた。下地は漆に炭化物が混和されたものであった。

用途不明の部材のような製品は、膠？に地の粉を混和した下地の上に油煙を混和した漆が2層重なっていた。



註 本報告は鹿田遺跡第14次調査および第18次調査B地点出土資料の塗膜構造分析報告である。本報告は既刊となっており、ここに掲載することとした。

図47 No.2

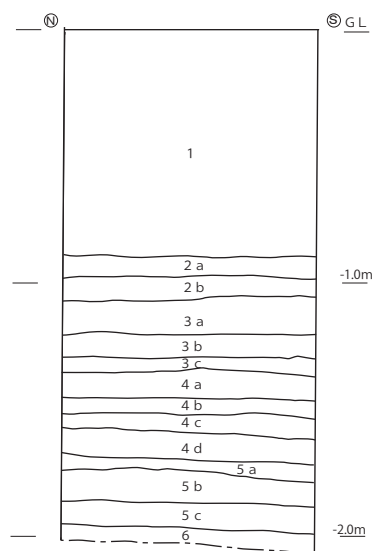
第3章 その他の地区の調査研究

第1節 試掘・確認調査の概要

1. 教育学部附属小学校屋内運動場建設予定地（調査番号1）



図48 調査地点の位置（縮尺1/3,000）



- 1 造成土
- 2 a 暗青灰色粘質土
- 2 b 暗緑灰色粘質土
- 3 a 暗灰色粘質土
- 3 b 暗灰褐色粘質土
- 3 c 緑灰褐色粘質土
- 4 a 灰褐色砂質土（灰白色砂）
- 4 b 灰褐色砂質土（灰白色砂・淡黄色砂◎）
- 4 c 黄灰褐色粘質土（Fe◎）
- 4 d 黄灰褐色粘質土（Fe◎）
- 5 a 暗灰褐色粘質土
- 5 b 灰褐色粘質土（Mn）
- 5 c 灰褐色粘質土（Mn◎）
- 6 暗灰褐色強粘土（Mn◎）
- （5層以下からは湧水）

図49 東壁土層断面図（縮尺1/30）

a. 調査の経緯

岡山大学（東山）附属小学校校舎北東に屋内運動場の建て替えが計画された。予定地の位置する東山地区では、これまで附属小学校校舎予定地及び附属中学校校舎予定地において試掘・確認調査を行っている。前者では近世～近代の東西溝、中世に遡る可能性のある畦畔が¹⁾、後者では近代の南北方向の畦畔が確認され²⁾、当地区における土地利用の実態を明らかにするためのデータが得られている。

本地点ではこれらの成果を受けて1ヵ所の試掘坑を設定し、試掘・確認調査を実施した。調査は2013年9月10日に行い、調査員1名が担当した。

b. 調査の成果

(1) 調査地点の位置と経過（図48）

東山地区は操山山塊の西側山裾に位置し、旭川からは東に約1kmの距離にある。操山山塊上では古墳が多数確認されているが、当地区周辺では他の遺跡は確認されていない。過去の調査成果から学校用地としての利用が開始される1910年以前は水田として利用されていたことが明らかにされている。

予定地は体育館と駐車場（旧小学校校舎の位置）及び小学校校舎に挟まれた範囲にあたる。2度の試掘・確認調査が行われた位置よりも東側で、操山山塊により近い場所である。調査は予定地の中央に上面で2.5×3.4mの試掘坑を1ヵ所設定し、現地表面から2.1mまでの土層堆積状況を確認した。

(2) 層序（図49）

土層は南西の2006年度試掘・確認調査No.3・4とほぼ同様な堆積状況を示す。本地点では各層の時期を明確にするような遺構・遺物は確認されなかったため、時期については附属中学校校舎予定地の成果³⁾を参照した。

1層 1910（明治43）年以降の造成土である。厚さは約0.9mである。

2層 グライ化した暗青灰色粘質土で、厚さは0.16mである。2枚に細分でき、2a層には0.3cm大の小礫がみられ、2b層にはそれよりもやや大きめの小礫がより多く含まれている。2b層は2a層と3層が混在しており、炭化物も一定量含まれている。このことから本層は近代の水田層と考えられるが、2b層は水田を作るための整地層であった可能性もある。

3層 暗灰褐色粘質土を主体とする層で、厚さは0.31mである。3枚に細分できる。近代以前の堆積土と考えられ、耕作土の可能性もある。

4層 灰褐色粘質土を主体とする層で、厚さは0.35mである。4層に細分している。上半の4a・4b層には灰白色砂や暗灰褐色粘質土ブロック（φ0.3～1cm）が含まれる。4b層は灰白色砂の含有量が多く、淡黄色砂も顕著に認められる。周辺に存在した河道の影響を受けている可能性がある。下半の4c・4d層は上半にみられた砂の含有がわずかで、鉄分の沈着が顕著である。

5層 灰褐色粘土を主体とするが、湧水がみられ、壁面の崩落が著しかった。厚さは0.27mである。3枚に細分でき、下層にいくにしたがいマンガンの沈着が顕著になっていく。

6層 暗灰褐色粘土で、当地点では最も粘性の強い層である。マンガンの沈着が顕著である。この段階は湿地状であったと思われる。

(3) 地形と土地利用状況

本地点の土層堆積状況で特徴的なのは3層の厚さが薄いことである。2006年度試掘・確認調査のⅢ層に対応すると考えられるが、2006年度No.4は1.1m、2006年度No.3は0.7mであるのに対し、本地点は0.31mとなっている。この状況は東へ向かって地形が傾斜していることを示していると考えられ、操山山塊により近い本地点は、山際にできた地形の低い部分にあたっているのだろう。

さらに下層の状況を見ると4層上半に砂が含まれていることも注意される。砂が含まれていることからこの付近に河道があった可能性が考えられ、それまでの湿地状の土地とはやや異なる状況であったと思われる。4層は2006年度試掘・確認調査No.4で畦畔（中世に遡る可能性あり）が検出されたⅣ層に対応するものと思われることから、水田経営の開始に伴う土地利用の変化が影響していると考えられる。さらに3層と4層は色調や土質が大きく異なることから、畦畔埋没後は当地点も水田として利用されるようになったのであろう。

c. まとめ

今回の試掘・確認調査地点は本キャンパスの北端に位置し、これまでの調査よりも操山山塊に近い場所における土層堆積状況のデータを得ることができた。土層堆積状況から旧地形と土地利用の様相を窺い知ることができた。今後は土壌分析などにより、土地利用の具体的な姿を明らかにしていきたい。（南）

註

- 1) 野崎貴博 2008「教育学部附属小学校校舎建て替えに伴う試掘・確認調査」『紀要2006』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 2) 岩崎志保 2010「教育学部附属中学校校舎建て替えに伴う試掘・確認調査」『紀要2008』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 3) 前掲註2)に同じ

2. 資源植物科学研究所植物ストレス科学研究等拠点施設建設予定地（調査番号1）

a. 調査の経緯と経過

岡山大学倉敷地区に所在する資源植物科学研究所で植物ストレス科学研究等拠点施設の建設が決定した。倉敷地区は近世の干拓地内に位置している。本センターではこれまでも二度の試掘調査を実施しているが、いずれも遺構は確認されていない。今回の建設予定地は既に実施した試掘調査地点から約50～100m離れた地点にあり、干拓以前の遺跡の有無を確認するため試掘・確認調査を行うこととした。

調査は2014年3月10日に実施し、調査員1名が担当した。試掘坑は建設予定地の南寄りに1カ所（2.6×2.0m）を設定し、重機により現地表から約2mまで掘り下げながら平・断面の精査・記録を行った。

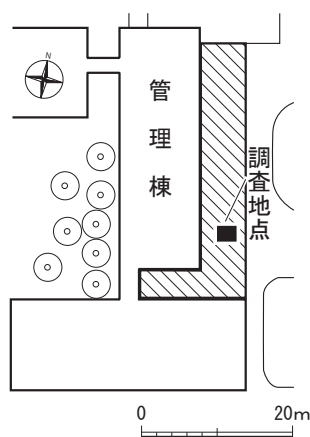


図50 調査地点の位置
(縮尺1/1,000)

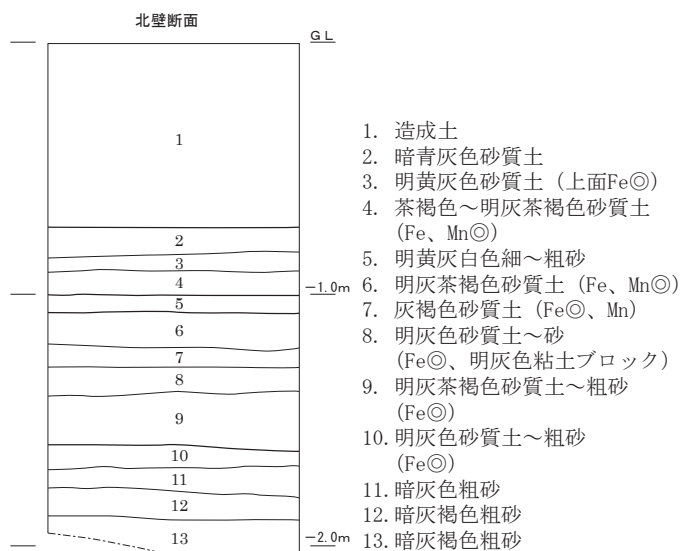


図51 土層断面 (縮尺1/40)

b. 調査の概要

平・断面の精査の結果、本調査地点で遺構・遺物は確認されなかった。以下、断面観察による本地点の層序を記す。

- 1層 1914（大正3）年に大原奨農会農業研究所が造成されて以降、現在までの造成土である。
- 2層 暗青灰色砂質土で、上面に鉄分が沈着する。近代までの耕作土と考えられる。
- 3層 明黄灰色砂質土である。鉄分の沈着が著しい。耕作土と考えられる。
- 4層 茶褐色～明灰茶褐色砂質土である。マンガンを含む。耕作土と考えられる。
- 5層 明黄灰白色細～粗砂である。均質な砂層である。葉層状に薄く灰色のシルトがみられる。土色・土質から洪水砂と考えられる。
- 6層 明灰茶褐色砂質土である。マンガンを含む。耕作土と考えられる。
- 7層 灰褐色砂質土である。鉄分の沈着が著しい。耕作土と考えられる。
- 8層 明灰色砂質土～砂である。鉄分の沈着が著しい。明灰色粘土ブロックを含む。
- 9層 明灰茶褐色砂質土～粗砂である。下半は粗砂の密度が高い。上半部を中心に灰色粘質土ブロックを含む。小礫を含む。
- 10層 明灰色砂質土～粗砂である。干拓以前の自然堆積層と考えられる。
- 11層 暗灰色粗砂である。干拓以前の自然堆積層と考えられる。
- 12層 暗灰褐色粗砂で、砂粒は均質である。干拓以前の自然堆積層と考えられる。
- 13層 暗灰褐色粗砂で、砂粒は12層より粗い。均質な粗砂層である。干拓以前の自然堆積層と考えられる。

c. まとめ

2～4層、6・7層は耕作土と考えられる。5層は均質な砂層で、上下の層とは明瞭な差異をもつ土層であり、洪水砂と考えられる。8・9層は粘質土ブロックや小礫を多く含んだ砂質を強く帯びる土層で、直上の7層とは明瞭に異なっている。10～13層は粗砂層が厚く堆積しており、干拓以前の自然堆積層と考えられる。なお、9・10層の層堺以下で湧水が認められた。

洪水砂と考えられる5層について、倉敷地区一帯において、近世初期の干拓から近代の造成までの期間で記録にのこるもっとも大規模な水害は1850（嘉永3）年の水害である。この期間のうち、上下の耕作土層の使用段階

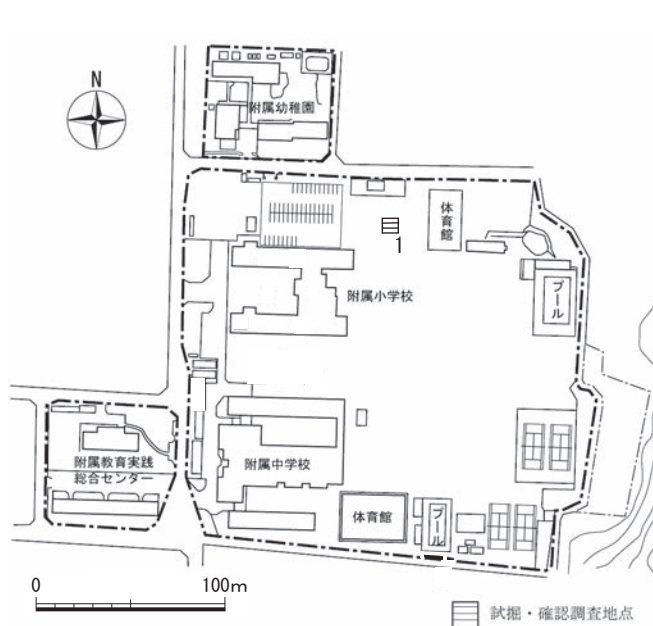
として5層の前後に一定の時間を見積もるならば、5層の形成は近世後期に発生したこの水害に起因する可能性が高いと推測される。(野崎)

表6 2013年度の調査地点【3】東山地区

	調査番号	工事名称	調査期間	調査深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内容
試掘・確認	1	附属小学校屋内運動場建て替え工事	9/10	2.10	0.9	中世～近世耕作土層確認

表7 2013年度の調査地点【4】倉敷地区

	調査番号	工事名称	調査期間	調査深度 (GL-m)	造成土厚 (m)	内容
試掘・確認	1	植物ストレス科学研究等拠点施設建設工事	3/10	2.00	0.7	近世耕作土層確認

図52 2013年度の調査地点【3】—東山地区—
(縮尺1/4,000)図53 2013年度の調査地点【4】—倉敷地区—
(縮尺1/4,000)

第4章 調査資料の整理・研究および公開・活用

第1節 調査資料の整理・研究

1. 調査資料の整理

本年度は、鹿田遺跡第14次調査の整理作業を実施し、『鹿田遺跡8』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告29）として刊行した。このほかに津島岡大遺跡第33次調査、鹿田遺跡第9・11・12次調査の土器接合及び復元作業を行った。第9・11次調査では、出土木器の実測作業も実施した。遺物洗浄作業については、鹿田遺跡第23・24次調査を行った。

これらに並行して昨年度作成したデータベースへの入力作業を継続して行った。年度末までに『津島岡大遺跡20』『鹿田遺跡6』までの既刊報告書の基礎データの入力を完了した。データ入力に伴って、遺物や写真の誤表記等の修正や語句の統一などの改善点も明らかとなっており、より効率的な入力と利用に向けて、改善を図りながら、作業を行っていく必要がある。

2. 調査資料の保存処理

a. 木製品のPEG保存処理作業

本年度は、継続して実施してきた第11期の保存処理を8月で完了し、続いて第12期保存処理を開始し、濃度60%までの工程を行った。

第11期：鹿田遺跡第10次（杭）、第13次（曲げ物・板材・杭ほか）、
第14次（板材）・第15次（杭）

第12期：鹿田第12次（井戸枠材、杭）、第18次B地点（板材、杭ほか）、
津島岡大第9次（サンプル）・第12次（サンプル）

第11期の引き上げ及び、第12期の準備作業（計測、サンプル採取等）については、一部を博物館実習の作業として実習生が行った。

表8 木器保存処理工程

期	年月日	作業内容
第11期	2013年4月12日	濃度 80%
	2013年5月29日	濃度 90%
	2013年7月8日	濃度 95%
	2013年8月9日	濃度100%
	2013年8月12日	引き上げ
第12期	2013年8月19日	濃度 40%
	2013年10月23日	濃度 50%
	2013年11月28日	蓋明け
	2014年2月14日	濃度 60%

b. 木製品の委託保存処理

下記の2件の木製品について、（株）吉田生物研究所に保存処理及び漆塗膜分析を依頼し、2014年3月26日に完了した。分析結果については、本書第2章第3節（38頁）に掲載している。

- ・鹿田遺跡第18次調査B地点：漆塗り木製品
- ・鹿田遺跡第14次調査：漆椀（郷原漆器）

（岩崎）

第2節 調査成果の公開・活用

1. 公開・開示

2013年度は岡山大学が鹿田遺跡の発掘調査を開始して30年の節目であった。これを機に鹿田遺跡をテーマとした学外での特別展示、鹿田キャンパスでのギャラリー展示、そしてマスコットキャラクター公募の3つの企画を

実施した。

特別展示では鹿田遺跡の調査・研究成果を足掛かりとして、岡山県南の弥生時代遺跡の動態から、当地域における弥生時代の実像を描き出すことを目指した。当該期の資料を多数所蔵する岡山県古代吉備文化財センター及び岡山大学考古学研究室との共催、岡山シティミュージアムと本センターが主催する形をとり、大学と行政機関が共同で展示会に携わるという初めての試みとして実施した。また周辺自治体（岡山市、赤磐市、総社市）からも展示品の借用等の協力を得るなど、学内・外の多くの方々・機関の協力が大きな力となった。特別展示会には多くの専門家が県外からも訪れるなど、大きな反響があった。

また特別展示会に先立って、鹿田キャンパスの病院内の外来受付という最も人通りの多い場での、ギャラリー展示を実施した。そのほかに遺跡のマスコットキャラクターを公募し、結果を特別展示期間内に発表した。

a. 第3回岡山大学埋蔵文化財調査研究センター特別展示「鹿田発掘30年－弥生時代を語る－」

特別展示の構成は、会場展示・講演会・座談会である。

会場展示：岡山シティミュージアム 4階展示室 2014年2月7日（金）～23日（日） 参加者2,064名

講演会：同4階講義室 2014年2月8日（土） 参加者 90名

座談会：同4階講義室・ロビー

2014年2月23日（日） 参加者149名

会場展示では、新たな取り組みとしてタブレット端末を用いた展示解説を行った。期間中には調査員による展示解説を随時行うだけでなく、コウコガク・カフェなどで、来場者のニーズに応えるさまざまな解説を実施した。

(1) 会場展示

仕切壁で展示室を大きく二分した（図54）。入口側は中央に鹿田遺跡第1次調査で確認された集落中心部を床面に再現した。ここで集落の雰囲気を体感し、各コーナーにおいてその詳細に迫るという展示構成になっており、旭川流域の弥生時代後期にみられる特徴的な事象についての展示を行った（図55）。仕切壁を挟んだ反対側には吉備の弥生時代を代表する楯築墳丘墓を中心に、足守川流域で出土した青銅器や搬入土器といった他地域との交流を示すものを中心に展示した（図56）。

弥生時代の古地形と遺跡のひろがり 弥生時代前半期と後半期の地形・海岸線を復元し、これと遺跡分布の変化をあわせてみることで、環境変化と人々の生活がどのように関係していたのかを示した。流量豊富な河川によって運ばれた土砂の堆積と、それによって広がった肥沃な土地への人々の進出過程を描き出すことができた。また岡山市津島遺跡の土層剥ぎ取りによってどれほどの地形変化があったのか実感できるように展示した。

鹿田ムラを再現！ 鹿田遺跡における弥生時代後期の集落景観を床面に実大の1/8スケールで復元した（図57）。床面

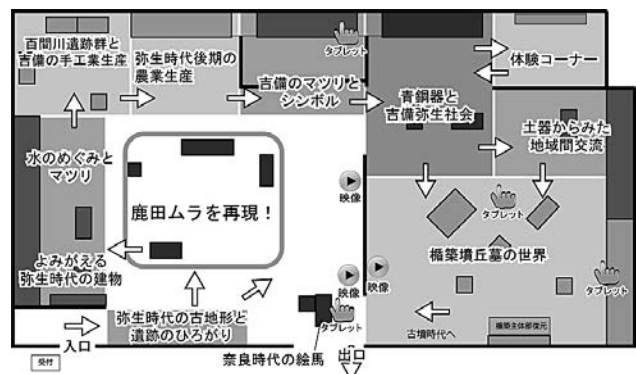


図54 展示会場見取図



図55 展示風景①



図56 展示風景②



図57 展示解説風景（場所：鹿田ムラを再現！）

には遺構配置図の中に主要遺構の写真を貼り込んだものをパネルにして敷き詰め、鹿田遺跡を代表する生産活動である製塩がおこなわれた土坑も明示した。周囲には各遺構から出土した遺物を展示し、出土状態を復元した井戸や土器棺には見学者から大きな関心が示されていた。また今回の展示会での再整理を通じて見出された素焼きの不明土製品や他地域からの搬入の可能性のある土器などは、鹿田遺跡の性格を考える上での新たな資料となり注目される。

よみがえる弥生時代の建物 津島遺跡で出土した建築部材を、高床建物の構造がわかるように組み合わせて展示した。

特に全長約2.7mの支柱は非常に存在感があり、見学者の目を引いていた。木材加工具も展示し、材料の調達から使用までのプロセスを理解できるような展示を心掛けた。また県内で出土した建物の絵画資料を展示し、弥生時代の人々がみた建物の姿と復元された建物を比較することができるようにした。

水のめぐみとマツリ 岡山県南部は弥生時代から古墳時代初頭の井戸が集中する地域であり、井戸にみられるマツリからはこの時期の水に対する人々の意識の高さをみることができる。展示では土器が井戸に納められた状態を立体的に復元し、上からの写真や文章では説明しにくいマツリの過程を視覚的にとらえることができるようにした。また井戸から出土したモノのタネは、その量・残存状態の面で見学者を驚かせていた。

百間川遺跡群と吉備の手工業生産 岡山市百間川遺跡群では多様な手工業生産に関する遺構・遺物が確認されている。中でも注目されるのは鉄器生産と製塩である。鉄器は製品だけでなく、金床石や砥石、鍛造剥片を展示することで、一連の製作工程がわかるような展示を目指した。製塩については製塩炉や製塩土器だけではなく、未使用品と思われるものも展示し、生産活動以外の面での製塩土器の役割についても問題提起をした。

弥生時代後期の農業生産 百間川遺跡群は居住・生産域である微高地と水田の配置がよくわかり、当時のムラの姿を思い描くことができる。展示では発掘調査で明らかになった弥生時代後期における水田の広がりや現在の地形図上で復元し、田植えの痕跡とみられる稲株痕跡や木製農具・石包丁などの収穫具とあわせて、当該期の水田経営の具体的な姿を想像できるようにした。また洪水砂で覆われた畦畔の剥ぎ取りの展示は、当時の自然災害が与えた影響を伝えるのに効果的であった。

吉備のマツリとシンボル 弥生時代には様々なマツリの道具があるが、特に当地域に特徴的な分銅形土製品、人形・人面土製品、龍の文様が描かれた土器を中心に展示し、精神世界に焦点を当てた。展示ではこのような資料の特徴・分布から当地域に共通したマツリの様式が存在していたことを明確にし、弥生時代後期後半の墳墓祭祀への展開にも目を向けてもらうことを目指した。

青銅器と吉備弥生社会 当地域は青銅器生産の盛んな北部九州と近畿地方の間に位置しており、両地域から青銅器がもたらされている。展示では青銅器の受容地域が弥生時代中期後半と後期前半では異なっており、そこから地域間関係の変化を見出すことができるような展示を目指した。重要文化財である岡山市高塚遺跡出土突線流水文銅鐸は多くの見学者の目を引き付け、中・高生の中には日本史の資料集を片手に見入る姿がみられた。実物の大きさ、質感を実感し、驚く見学者も見受けられた。

土器からみた地域間交流 他地域から搬入された土器を展示し、弥生時代後期から古墳時代への転換期における地域間交流に着目した土器の移動状況をまとめた図を作成し、両時期の交流関係の変化がわかるような展示を心掛けた。

榑築墳丘墓の世界 榑築墳丘墓出土品の展示に加え、木槨・木棺の復元模型を実物大で作成した。特異で複雑な文様をもつ弧帯文、日常土器と大きくかけ離れた特殊器台は、展示品の中で最も関心を集めた。木槨・木棺の復

元模型は実際に横たわることができるようにし、被葬者の気分を味わうと共に、埋葬された人物の体格を実感することができたという感想も得られた。また調査時に第1主体部の玉類を樹脂で固めて切り取ったものを初めて展示し、鮮明な水銀朱、細かくて美しい玉類には感嘆の声があがっていた。

(2) 体験コーナー

展示室内の一角に体験コーナーを設けた。今回は実際に土器を持って大きさ・重さ・質感・製作技術を体感してもらうのに加え、新たな試みとして鹿田遺跡出土弥生土器や楯築墳丘墓出土土器などのシルエットをスタンプにして、オリジナルのしおり・手提げ・コースターを作るという企画を行った(図58)。場所を展示の中間地点をやや過ぎたところに設けたこともあり、ここで休憩をしながら遺物に触れたり、土器のスタンプを押したりする姿がみられた。また体験コーナーで土器に触れた後に、あらためて展示を見に返る見学者もあった。



図58 体験コーナーのしおり・コースター作り

(3) 講演会

甲元眞之氏(熊本大学文学部附属永青文庫研究センター長)「弥生時代の気候変動」

早川和子氏(考古イラストレーター)「考古イラストを描く～なにしろ人が主役!～」

講演会は岡山シティミュージアム講座と共同で行った。甲元氏からは砂丘の形成過程と弥生時代の環境変化から、人々の営みや社会関係の動態、そしてその背景について講演いただいた。会場からも歴史の流れと環境変化の関係についての質問があり、参加者の興味の高さがうかがわれた。詳細は本書付編1の講演録を参照いただきたい(本書54～57頁)。

早川氏には考古イラストを描く立場から、発掘調査成果をビジュアル化していく過程や注意点、苦勞する点などを、自身の経験を交えてお話しいただいた。会場からは使用する道具などの技術的な面や、発掘ではわからない部分をどのようにして復元するのかといった踏み込んだ質問もあった。概要は『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』No.52に掲載している。

(4) 座談会

コーディネーター：新納泉(当センター副センター長)

パネラー：宇垣匡雅氏(岡山県教育委員会)、大久保徹也氏(徳島文理大学)、松木武彦氏(岡山大学)、山本悦世(当センター)、南健太郎(同)

座談会はコーディネーターが問題提起・話題提供をし、各パネラーがそれに答える形で進行した(図59)。前後半の二部構成で、前半は楯築墳丘墓築造以前の吉備弥生社会の姿、後半は楯築墳丘墓の築造とそれによってどのような社会変化が起こったのかという点に焦点を当てた。各パネラーからはそれぞれ異なる角度からの意見があり、様々な事象を総合した形で吉備弥生社会の実像について議論することができた。



図59 座談会風景

(5) コウコガク・カフェ

講演会・座談会開催日以外の休日に、1回につき30分を2本行った。講師は当センター調査研究員以外にも島崎東氏(岡山県古代吉備文化財センター)、松木氏・光本順氏(岡山大学社会文化科学研究科)に依頼し、バラエティー



図60 展示品を目の前にしたコウコガク・カフェ

に富んだ内容について参加者との意見交換ができた。今回でコウコガク・カフェは3回目になるが、初めて展示物を間近にみながら講師と参加者が語り合うというスタイルで行った(図60)。参加者からは遺物個々についてだけでなく、遺構・遺物からどのような歴史像が描けるのかといった、吉備弥生社会の歴史的な位置付けや特質を問うような質問もあり、大いに盛り上がった。1回につき20～30名の参加者があった。

b. マスコットキャラクター公募企画

鹿田発掘30周年事業として、遺跡のキャラクターデザイン公募企画を実施した。2013年10月より、チラシ・ホームページで募集し、1月9日までに124点の作品が集まった。応募作品は全点、特別展示会会場のロビーに掲示し、来場者の投票により、最優秀賞以下15点の受賞作品を決定した。同展示会最終日に受賞者を招き、結果発表イベントを実施した。

またキャラクター募集に先立って、鹿田小学校での出前授業を実施した。6年生を対象に、遺跡の内容紹介をビジュアルに解説するだけでなく、弥生土器などの出土品にも触れることで、歴史を体感する機会を提供することができた。

c. 第15回岡山大学キャンパス発掘成果展「鹿田荘の世界」(大学病院ギャラリー展示)



図61 ギャラリー展示風景

例年岡山大学津島キャンパスで行っているキャンパス発掘成果展を、今回は鹿田発掘30周年事業の一つとして、岡山大学病院外来診療棟の一角、一時調査地点にあたる場所で開催した(図61)。

会場：岡山大学病院外来診療棟1階

期間：2013年10月21日(月)～11月1日(金)(日曜休み)

見学者数：2,397名

(1) 展示内容

以下の4点に着目し、展示を行った。

①世界最古の「猿駒曳」と「牛」の絵馬(第24次調査出土絵馬)、②色とりどりのウツワ、文字が示す鹿田荘(緑釉陶器・蹄脚硯・墨書土器など)③鹿田荘のにぎわい(輸入陶磁器・搬入土器類・竈など)、④平安～鎌倉時代の暮らしと道具(猫形木製品・呪符木簡・猿形水滴など)

絵馬は平成24年5月の確認後、初めての展示ということもあり、大きな注目を集めた。「猿駒曳」・「牛」ともに最新の復元図を公開し、(株)コンテンツの協力による高精細画像とあわせて展示することで、これまでよりも詳細に図柄を確認することができるようにした。また掘立柱建物や井戸が確認された場所を現在の外来診療棟の図上に復元することで、当時の集落の姿をより身近に感じることができるような展示を目指した。

d. 来場者の声

特別展示来場者アンケート アンケート回収率は22%(453枚)である。年齢構成(図62)を2009年に行った第2回特別展示と比較すると、60歳以上の割合が大きく増加していることは特質される(2009年は13%)。見学者の中には鹿田遺跡第1次調査や榑築墳丘墓の発掘時(30～35年前)のことを覚えておられる方もいたことから、それが影響したのかもしれない。逆に比率が減少したのが19～22歳、23～29歳、30～39歳で、今後はいかにこの年代にアピールできるかが課題となろう。

また岡山市外からの見学者が38%にも上ったことも注目される。特に倉敷市からの見学者が多く、榑築墳丘墓

出土品の展示が影響したという面もあるだろう。隣県以外にも北海道や北陸などからの見学者があった。

リピーターの割合をみると、7割が初めての来場者であった（図63）。市外からの見学者が多かったことにも起因するだろうが、案内希望者は岡山市内在住がほとんどであったため、利便性の良さから今回初めて見学し、興味を持てただけのものとも推測する。

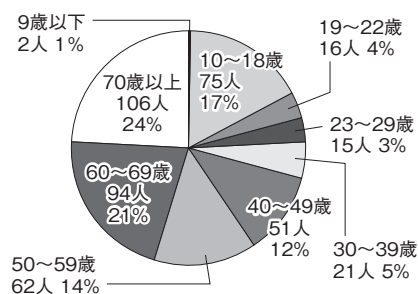


図62 来場者の年齢構成

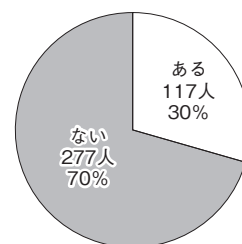


図63 リピーターの割合

ギャラリー展示 絵馬、蹄脚硯、猿形水滴といった鹿田荘の性格をあらわす遺物に加え、竈や下駄、曲物などの生活道具にも大きな関心が示された。近・現代の道具との比較や製作技術・使用方法といった面にまで話がおよぶことがあり、歴史をより身近に感じることができたのではないだろうか。また今回の展示品は古代から中世の鹿田遺跡を代表するものが多く、当地の位置付けを再確認するとともに、埋蔵文化財や発掘調査に対する理解が深まったという意見も聞かれた。鹿田キャンパスには文化財等の展示施設がないため、今後もこのような展示を行ってほしい、期間が短い等の要望もあった。

e. まとめ

特別展示会では、岡山市内で初めて大学と行政が共同で取り組んだ展示企画として、一つのモデルケースを作り上げることができた。この点はこれからの文化財の活用や教育普及、研究成果の発信において、有益に働くであろう。また鹿田遺跡、百間川原尾島遺跡などの以前の調査資料を改めて見直し、新たな知見を呈示できた点も成果の一つである。今回の展示内容は弥生時代に焦点を当てたものであったが、見学者からはこんなすごいものが岡山にはあるのかといった声が聞かれ、もっと積極的な情報発信、研究成果の公開を求める意見が多かった。

ギャラリー展示は、病院外来受付という特殊な環境での新たな試みであり、通りすがりの見学者も多く見られた。そうした点で、通常の展示会とは異なる見学者層に、鹿田遺跡の存在や内容をアピールする良い機会となった。いただいた多くの意見を活かしつつ、今後の調査・研究や展示会をさらに充実させていきたい。（南）

2. 資料・施設等の利活用

a. 調査・研究への支援

(1) 資料調査協力

津島岡大遺跡第5次調査出土縄文土器：西原和代（京都大学）2013年11月11日～13日

(2) 図書の貸し出し

図書外部貸し出し：5件（岡山大学大学院学生）

(3) 資料の貸し出し

- ・津島岡大遺跡第5次調査出土漆塗竪櫛 岡山県立博物館：『Japan-漆の世界』6月18日～9月20日
- ・津島岡大遺跡第15・17・22次調査出土縄文土器など 古代出雲博物館『山陰の黎明～縄文のムラと暮らし～展』9月20日～12月27日
- ・鹿田遺跡第24次調査出土絵馬（猿駒曳）写真 榎原考古学研究所附属博物館 特別陳列『十二支の考古学-午-』展示パネル
- ・鹿田遺跡第24次調査出土絵馬（猿駒曳）写真（復元イメージ図） 井原市文化財センター冬季企画展『午（うま）』

の考古学』展示パネル

(4) 写真掲載

鹿田遺跡第20次調査D地点・立体駐車場立会地点 ウリ出土状況写真：田中克典（弘前大学）：（国際古民族植物学会・日本文化財科学会）

- ・津島岡大遺跡第12次調査棒火矢出土状況 東京新聞、中日新聞 4/9 掲載
- ・鹿田遺跡第24次調査出土絵馬（牛）写真（復元イメージ図） 岡山県畜産課 冊子挿絵
- ・鹿田遺跡第24次出土絵馬（猿駒曳）写真（復元イメージ図）『動物考古学』

b. 教育支援

(1) 博物館実習 8/5～8、12・13、19・20

今年度は36名の実習生が受講した。1班9人ずつ4班に分かれて、各班2日間にわたる実習を行った（8月5・6日、8月7・8日、8月12・13日、8月19・20日）。発掘調査及び整理作業の体験から、考古資料の取扱いに関する基本的知識の習得を目的としたものである。一日目に津島地区で発掘調査を半日体験した後、二日目にかけてセンターで整理作業を行った。整理作業は遺物の洗浄・注記・接合、木製品の保存処理工程を実施した。最終日に本実習の感想を発表し、意見交換を行って全体をまとめた。

(2) 大学における授業の受け入れ

- ・5/2 文学部学芸員課程（光本准教授）：保存処理について

表9 2013年度の非常勤講師の委託依頼

職名	氏名	担当科目	委嘱期間	備考
教授	山本 悦世	博物館実習	平成25年4月1日～平成26年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）
助教	岩崎 志保	博物館実習	平成25年4月1日～平成26年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）
助教	野崎 貴博	博物館実習	平成25年4月1日～平成26年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）
助教	南 健太郎	博物館実習	平成25年4月1日～平成26年3月31日	通年（水曜日3・4・5限）

c. 社会貢献

(1) 中学生職場体験

- 岡山市立中央中学校 11/13～11/15 3名
- 岡山市立岡北中学校 11/13～11/15 2名
- 岡山市立高松中学校 11/20・21 3名

(2) 出前授業

鹿田小学校出前授業 10/4

鹿田遺跡発掘30周年事業のひとつとして実施した。6年生4クラスを対象に二回に分けて、鹿田遺跡を紹介したものである。当日は調査員二名が弥生土器など複数の出土品も持参し、生徒たちが触れて体感する時間も設けた。岡大キャンパス内に位置する鹿田遺跡は、鹿田小学校の学区内にあたるが、多くの生徒がその内容について触れるのは初めてであり、身近な歴史に触れる機会を創出することができた。

出前授業は初めての試みであり、今回はこちらからの申し出を受けていただき実現したものである。学校側の反応も非常によく、また実施してほしいとの要望もあった。今後も、こうした取り組みを通じて、構内遺跡の調査研究成果を伝える機会を増やすことを考えたい。

(3) 職員兼業依頼

- 山本：平成25年度埋蔵文化財保護対策委員会 委員
- 山口：同志社大学文化遺産情報科学研究センター 研究員

(4) 展示見学の受け入れ

常設展示1（4月）2（6月）

考古資料展示室1（4月）1（6月）

明誠学院高等学校 8/22 55名 考古資料展示室・構内陸軍関連遺跡見学案内

(5) マスメディア取材

- ・ 鹿田遺跡第24次調査絵馬出土 5/24：山陽新聞（1面）、読売新聞（36社会面）、日経新聞（38社会面）、中国新聞（28社会面）、朝日新聞（29岡山面）、NHK、RNC西日本放送、TSCテレビせとうち、旺文社『蜚雪時代9月号』、雄山閣『季刊考古学124号』、中経出版『歴史読本8月号』、岡大『いちょう並木』、旺文社HP、岡大e-Bulletin、岡大広報フェイスブック
- ・ 絵馬の販売（12/3より岡山大学生協にて販売）朝日新聞12/4、山陽新聞12/5、1/17、1/25読売新聞12/6、NHK、RSK 取材
- ・ 鹿田発掘30周年：山陽新聞10/10、12/19
- ・ 鹿田キャンパスギャラリー展示：山陽新聞10/24、10/31・読売新聞10/31、文教ニュース
- ・ マスコットキャラクター募集：朝日新聞 1/9
- ・ 30周年特別展：山陽新聞 2/2、2/8、2/13、RSKラジオ、NHK
- ・ 30周年特別展・座談会：山陽新聞 3/7
- ・ 中学生職場体験 岡大広報フェイスブック

第3節 調査研究員の個別研究活動

1. 外部資金の獲得状況

- 山口雄治 ・若手研究者を支援する研究助成（第8期）、C14年代測定を利用した中央アナトリア前期青銅器時代における土器編年の構築と地域間交流に関する年代学的研究、研究期間：2012年9月～2013年8月、資金支給機関：株式会社パレオ・ラボ
- ・ 基盤研究（B）「縄文・弥生社会の人口シミュレーションと文化変化モデルの構築」（研究代表者：岡山大学 松本直子）研究分担者
 - ・ 基盤研究（B）「アナトリアにおける都市化過程の実態解明－メソポタミア都市国家の相対化に向けて－」（研究代表者：ノートルダム清心女子大学 紺谷亮一）研究協力者

2. 論文・資料報告ほか

- 山本悦世2013「岡山県における落とし穴の様相」『中四国地方における縄文時代の落とし穴』第24回中四国縄文研究会鳥取大会：pp. 70-80
- 杉山一雄・田嶋正憲・山本悦世・岩崎志保2013「岡山県の落とし穴検出遺跡集成」『中四国地方における縄文時代の落とし穴』第24回中四国縄文研究会鳥取大会：pp. 200-295
- 南健太郎2013「肥後地域における銅鏡の拡散・受容と廃棄形態」『弥生時代後期青銅鏡を巡る諸問題』九州考古学会：pp. 25-30
- 南健太郎2013「東アジアにおける銅鏡生産の展開と技術的背景－湯口の位置と鈕孔方向の関係を中心に－」『アジア鑄造技術史学会研究発表資料集』第7号 アジア鑄造技術史学会：pp. 193-203

南健太郎2013「鹿田遺跡における弥生時代から古墳時代初頭の井戸について」『紀要2012』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター：pp. 33-39

南健太郎2014「画文帯神獣鏡の破鏡をめぐって」『先史学・考古学論究』VI 龍田考古会：pp. 179-190

Kontani, R., Sudo, H., Yamaguchi, Y., Hayakawa, Y.S., Odaka, T. (2014) An archaeological survey in the vicinity of Kültepe, Kayseri Province, Turkey. In: Atici, L., Kulakoglu, F., Barjamovic, G., Fairbairn, A. (eds.) *Current Research at Kültepe-Kanesh: An interdisciplinary and integrative approach to trade networks, internationalism, and identity. Journal of Cuneiform Studies Supplemental Series, 4*, Lockwood Press (the American Schools of Oriental Research), 95-106.

3. 研究発表・講演ほか

a. 研究報告

山本悦世

- ・「津島岡大遺跡の調査と沖積地遺跡調査研究の方向性」考古学研究会岡山例会 2013年6月8日、岡山大学
- ・「岡山県における落とし穴の様相」第24回中四国縄文研究会鳥取大会 2013年7月6日、鳥取市福祉会館
- ・「岡山平野の条里と鹿田遺跡の地割」2014年3月1日、奈良文化財研究所

野崎貴博

- ・「吉備の巨大古墳と地域社会」考古学研究会岡山例会第18回シンポジウム 2013年12月14日、岡山大学

南健太郎

- ・「肥後地域における銅鏡の拡散・受容と廃棄形態」平成25年度九州考古学会大会 2013年7月20日、吉野ヶ里歴史公園
- ・「東アジアにおける銅鏡生産の展開と技術的背景－湯口の位置と鈕孔方向の関係を中心に－」アジア鑄造技術史学会韓国嶺南大会 2013年8月25日、韓国慶尚市

須藤寛史、山口雄治、早川裕弐、小高敬寛、紺谷亮一

- ・「中央アナトリア、青銅器時代の地域構造」『西アジア考古学会第18回大会』2013年6月2日、東京大学

小高敬寛、山口雄治、紺谷亮一

- ・「トルコ共和国カイセリ県南東部の移牧・遊牧と夏営地跡」『西アジア考古学会第18回大会』2013年6月2日、東京大学

山口雄治、中村豊、遠部慎

- ・「徳島市庄・蔵本遺跡の調査成果」考古学研究会岡山例会 2013年6月8日、岡山大学

b. 講演

山本悦世

- ・「吉備の弥生集落」備陽史探訪の会歴史講演会 2013年7月20日、広島県立歴史博物館
- ・「考古学からみた岡山平野の環境史－縄文から中世まで－」2013年10月6日、岡山県立博物館

山本悦世、南健太郎

- ・「座談会弥生時代を語る」岡山シティミュージアム 2014年2月23日、岡山県岡山市

第5章 2013年度の調査・研究のまとめ

津島岡大遺跡では第35次発掘調査を実施した。本調査では調査区の東半に、古代以降継続して南北方向の溝、畦畔等の遺構が確認され、里境にあたる可能性が考えられる。今後、津島キャンパス全体の条里制の状況を検討するうえでの手がかりとなる。鹿田遺跡では第25次調査に着手した。調査地点は鹿田キャンパスの中央付近にあたり、建物の基礎等による大きな破壊を受けているなかで、残された部分の調査を実施し、これまでの病棟や中央診療棟の新営に伴う発掘調査地点の間をうめることができた。特に鹿田キャンパスではこうした破壊が顕著であるが、残った部分を丁寧に調査し、その成果を蓄積していくことで、遺跡の理解に繋がっている。

また第14次調査の成果をまとめ、『鹿田遺跡8』として刊行した。本調査地点は鹿田キャンパスの南東部分にあたり、11世紀段階に東端部が使われていたこと、その後中断を経て、また集落域として利用された状況が明らかになった。平安時代後半から戦国時代において、集落の区画の変化が明瞭にわかる成果である。その後、本庁地点一帯ではかなり広範囲に発掘調査が実施されており、周辺の状態もあわせることで、より具体的な集落動向が判明することが期待される。

鹿田遺跡発掘30周年を機に、展示会ほか、新たな企画に取り組み、調査・研究の成果を一般に周知・公開することができた。弥生時代について取り上げた第3回特別展示『鹿田発掘30年 弥生時代を語る』は、岡山大学考古学研究室・岡山県古代吉備文化財センターとの共催により開催した。鹿田遺跡の30年を超える発掘調査資料を改めて検討し、地域の弥生時代研究を推進させるような内容を盛り込むことができた。本企画は、地域の要望に応えるものであり、特に鹿田遺跡、百間川原尾島遺跡の資料を見直し、その結果、遺跡の評価に関わるような新たな知見が得られたことで、こうした取り組みの重要性が改めて認識された。弥生時代の岡山平野の古地形の復元を行った点も大きな成果である。本展示会の成果は今後、刊行物としてまとめていく方向である。また今年度は鹿田地区でも、展示の機会を設けた。岡山大学病院の外来受付の一角で開催したギャラリー展示には、これまで遺跡に触れる機会のなかった見学者も多く訪れ、新たな層にアピールする取り組みとなった。また鹿田遺跡のマスコットキャラクターのデザイン公募企画や、それに先立って実施した鹿田小学校での出前授業の実施など、構内遺跡を紹介する新しい企画を実施し、好感触が得られた。

そのほかに、前年度に発見された奈良時代の絵馬については図柄の詳細な検討・分析を進め、その成果を上述の展示会やセンター報において公開した。さらに研究成果をベースに岡山大学生協と連携して、「岡大絵馬翔くん・福ちゃん」のグッズを作成し、販売にこぎつけた。絵馬グッズに対しては予想以上の反響が得られた。

以上2013年度の調査・研究は多岐にわたっており、特に情報発信面の比率が高かったと言える。一方で、発掘調査及び報告書刊行に関わる業務も幅広く実施している。近年、特に鹿田キャンパスにおいて発掘調査を連続的に実施しており、広範囲にわたって遺構・遺物ともに良好な資料の蓄積が進んでいる。その結果、鹿田遺跡全体の理解が進みつつあるが、今後は、こうした調査成果を早急に正式報告書として刊行できるよう、より一層効率的に取り組んでいきたい。

(岩崎)

付編 1 第3回特別展示『鹿田発掘30年—弥生時代を語る—』講演会記録

弥生時代の気候変動

前 熊本大学文学部附属永青文庫研究センター長 甲 元 眞 之

はじめに

人類誕生以来、地球は幾たびかの寒冷期と温暖期を繰り返していた事実は、20世紀初め、オーストリア人のペンクとブリュックナーによりアルプス氷河の観察よりもたらされました。後氷期における気候変動もプレ・ボレアル、ボレアル、アトランティック、サブ・ボレアル、サブ・アトランティックと区画する花粉帯の変遷も、基本的には気候変動を表すものと言えるでしょう。これら大幅な年代幅の気候変動とは別におよそ100年単位ほどの時間幅での気候の変化は、近代西ヨーロッパの研究者により太陽の活動、とりわけ黒点の有無と数により類推されてきました。当時の研究者たちは既に黒点が観察できないときは寒冷化するという事に気付いていました。

こうした気候変動をもたらす要因についての決定的な理論はまだ確立していませんが、気候変動が起こることは、太陽の活動に起因していると想定されています。太陽活動が低下して磁場が弱まると地球に降り注ぐ宇宙線の量が増大します。この宇宙線は炭素12に衝突して同位体の炭素14を生じさせるために、太陽活動が不活発な時期には炭素14の量が増加していきます。一方太陽活動が活発な時期には宇宙線が遮られて地球に到達しにくくなり、炭素14の量が減少します。炭素14の増加と減少は寒冷期と温暖期に即応することが指摘されています。そこで年輪の含まれる炭素14の含有量を測定することで、炭素14が増加したダルトン寒冷期（1800年から1820年頃）、マウンダー寒冷期（1645年から1715年頃）、シュベラー寒冷期（1416年から1534年頃）、ウォルフ寒冷期（1282年から1342年頃）、オールド寒冷期（1010年から1050年頃）が知られるようになりました。こうした研究は先史時代研究にも援用されています。紀元前3000年までの気候変動が明らかにされ、炭素14の量が増加する時期には氷河が前進することが確かめられているのです（図64）。

世界各国の研究者の共同研究により、グリーンランドの氷床コアの分析に基づいて、紀元前9000年から数百年までと紀元前6200年から5800年までの期間、地球規模での寒冷化現象が生じたことが明らかにされてきています。この2時期の寒冷化は海流の動きが停止したことにより惹き起こされたとの考えが提示されています。ブロッカーの深層水循環理論によると、グリーンランド周辺で氷結により生じた塩分濃度の濃い海水は、比重が重いために沈下して地溝帯を通して地峡を循環し、それが上昇して海流を動かす力となったとするものです。後氷期の

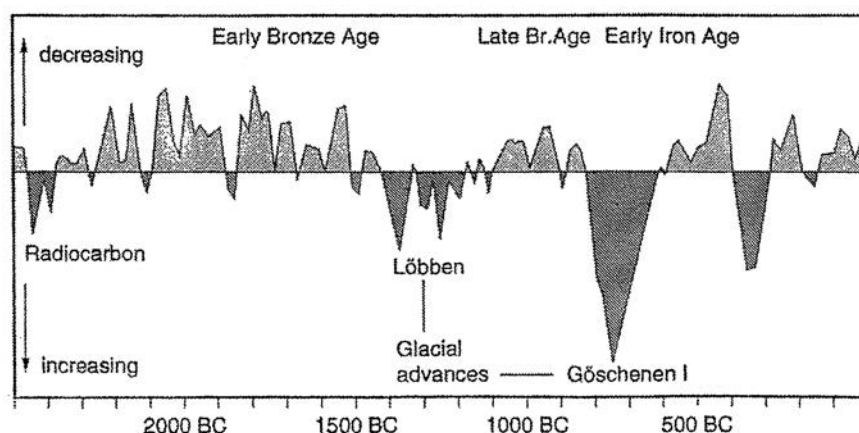


図64 紀元前2500年以降の炭素14の増減表（Kristiansen1998）

急激な温暖化により北米大陸を覆っていたローレントイド氷床が溶解し、大量の真水が北大西洋に流れ込んだ。そのためこの地域の海水濃度が薄まり海水の沈下現象が停止したことで海流が流れなくなり、海流が高緯度地方に及ばなくなって寒冷化したとする説です。したがってこれらの時期の寒冷化現象は海水面の上昇をもたらし、紀元前6000年頃の寒冷化した時期にイギリスは大陸とは切り離されたのでした。

砂丘の形成

グリーンランド氷床コアによる紀元前9000年から数百年のヤンガー・ドライアスと紀元前6000年頃のイベントでの寒冷化して海水面が上昇する事例を除いて、後水期には気候変化と海水準の変化は基本的に一致すると考えられています。海水面が低下すると干潟ができ、季節風により干潟の砂が陸地に運ばれ、海岸に並行して砂丘が形成されます。そのさい、海底部が緩やかに降下して広い干潟が存在する地点では、列状の砂丘が形成されます。一方、狭い干潟では砂が同じ場所に堆積するために重層の砂丘となります。福岡平野、宮崎平野や大分平野、鳥取県弓ヶ浜の3列の砂丘事例が列状砂丘にあたり、新潟平野のように3列を基本としながらも、さらに3列ないし4列の細い砂丘列が見られる場合もありますので、細かく見ていくとさらに寒冷化した時期があったことが窺えます。重層の砂丘の例としては南西諸島の島々に多く認められ、西日本では鳥根県の古浦砂丘遺跡がこれに該当します。温暖化して海水面が上昇すると砂の供給が止まり、植物が繁茂してその腐食物が堆積することでクロスナ層が形成されます。これは砂丘が安定化したことを示し、人が生活の場所として使用可能になったことを物語り、物的証拠がクロスナ層にしばしば残されています。このクロスナ層で発見される考古資料を手掛かりとすることで、寒冷化した時期や温暖化した時期を特定することが可能となります。このクロスナ層から出土する土器型式の解析により、砂丘が安定であった時期と砂丘が形成されていた時期を確認することができるわけです。

山口県下関市土井ヶ浜遺跡では、弥生時代前期末葉（土井ヶ浜第1様式）、中期中頃（須玖式と畿内第3様式）、古式土師器がそれぞれ検出されていて、それら土器型式が検出される時期には砂丘は安定した状態であったこと



図65 東広島市黄幡遺跡出土木材の年輪幅

が分かります。同じ下関市中の浜遺跡では弥生時代前期の埋葬址の上下は砂丘で覆われ、吉母浜遺跡でも弥生時代早期の夜臼式土器の上部に砂丘が形成され、弥生時代中期の埋葬址の前後には砂の堆積が認められます。また梶栗浜遺跡で箱式石棺墓に供献された土井ヶ浜第1様式の土器外面が砂を浴びて摩滅した状況が見られ、響灘一帯では同時期の砂丘の形成が認められます。土井ヶ浜第1様式の土器は内陸地帯にもその分布を拡げることから、土井ヶ浜第1様式の時期のある段階に寒冷化現象が生じたことが分かります。

これまでに西日本各地で知られたクロスナ層に挟まれた砂丘の形成時期は、西日本各地の砂丘遺跡の類例を集約すると、縄文晩期末黒川式→砂丘→弥生早期夜臼式・弥生前期→弥生前期末の中間→砂丘→弥生中期→(砂丘?) 弥生時代後期→砂丘→弥生時代後期末・古墳時代前期→砂丘と変遷することがこれまでの調査結果から窺うことができます。つまりこれら砂丘が形成されるのは、その上下の層にみられる土器型式に挟まれた時期であったことを示していると言えます。

また寒冷化した時期は年輪の木目が狭まることでも窺えます。図65は東広島市の黄幡遺跡で検出された木材で左端は紀元前817年で、814年以降極端に年輪幅が狭まって寒い時期であったことが分かります。こうした現象は同時期のアメリカでの事例により確認されていて、紀元前8世紀頃は世界的に寒冷化していたことが分かります。ヨーロッパでも寒くなったことが知られていて、青銅器時代と鉄器時代の変わり目に当たるとされています。

弥生時代の寒冷化した時期

上で述べたように、砂丘が形成された時期を考古遺物により特定することが可能であり、絶対年代との関係は

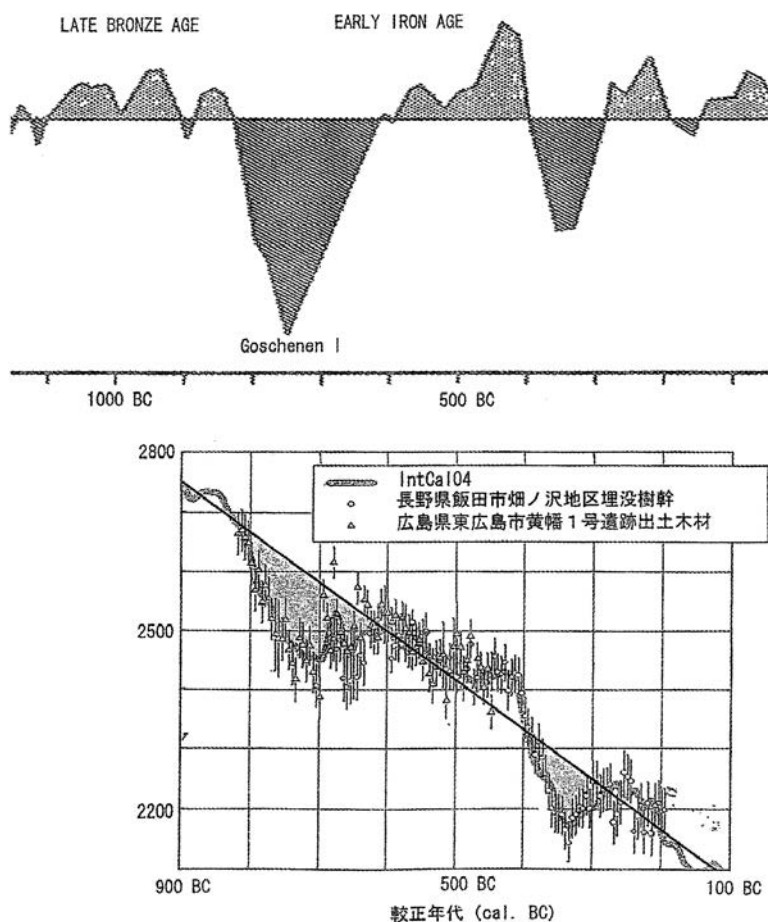


図66 ヨーロッパの気候変動と弥生時代の絶対年代

炭素年代によらないで、年輪が示す年代からもたすことができます。弥生時代の年輪年代は光谷拓実氏により東広島市の黄幡遺跡と飯田市畑ノ沢遺跡から出土した木材から導き出されています。その結果を先に引いたクリスチャンセンの図と合わせたものが図66です。これにより炭素14の量が増加したり減少したりする時期はヨーロッパと日本でも同じであることがわかり、紀元前8世紀中頃と紀元前4世紀後半頃に寒冷化したことが明白です。3列の砂丘列の中の第2砂丘の形成が紀元前8世紀中頃をピークとする寒冷化により形成されたと年代を推定することができます。

紀元前8世紀の寒冷化は世界的にみても生態的に劣悪な状況をまねき、世界各地に様々な歴史変動を惹き起こしました。ヨーロッパでは青銅器時代と鉄器時代の境界にあたり、北ヨーロッパでは各地に湖沼が形成され、中国では北方民族の南下と西周末期から春秋初期の社会的混乱期にあたる。列島の沿岸部では砂丘の形成に伴ってその内側に低湿地が形成され、やがてこの低湿地が脱塩化してガマの成育する淡水化した水稻栽培適地となっていました。弥生時代前期の沿岸部の遺跡はこうした沿岸砂丘背後に立地するものと、福岡県板付遺跡や大阪府池上遺跡のような沖積地に進出するものに区別することができますが、沖積地に立地する弥生時代の遺跡では板付遺跡に認められるように灌漑施設を伴った農耕を行い、特定の動植物種に依存した選別的経済類型に属するのに対して、沿岸部の砂丘周辺に居住する人々は、稲作栽培以外にも多様な動植物を食料とする網羅的な経済類型のもとにあって、縄文系の人々により担われたと推定することができます。

弥生前期末の寒冷化期には、東北アジアでは燕国の東北アジア南部地域への進出が認められます。この時期北部九州と山口県西部地方では青銅製武器や多鈕細文鏡が導入され、やがてこれら威信財を排他的に所持する階層の出現をみるにいたりしました。墓に副葬された威信財の質と量により、当時の社会集団の中に階層性が形成されていたことが窺えます。

弥生時代後期と後期末の間の寒冷化した時期は後漢末の騒乱期に相応します。農耕栽培に依存する社会において、気候悪化による食物生産の低下がもたらした社会不安は、列島各地に大きな社会変動を惹き起こすこととなりました。大規模な集落が出現するという集住現象を惹き起こし、大規模な環濠集落を形成させました。紀元後2世紀後半のことです。気候の悪化に歯止めがかかった3世紀初め頃になりますと、一部地域ではいわゆる奈良平野東南部などの地域で「墳丘墓」の造成に見られるように、巨大な特定個人墓の出現を見るに至りました。これを「前方後円墳」と捉えて弥生時代から切り離す考えも提示されています。これを気候変動の観点からみると、弥生時代は紀元前8世紀の寒冷化した時期から、紀元後2世紀後半の寒冷化した時期に収まるとも考えられます。気候変動に対処しての社会変化をそこに読み取ることが出来るでしょう。（熊本大学名誉教授）

参考文献

- 甲元眞之2004「砂丘形成と考古学」『日本初期農耕文化と社会』同成社
 2005「砂丘の形成と考古学資料」『熊本大学文学部論叢』86集
 2007『砂丘形成と寒冷化現象』熊本大学
 2008「気候変動と考古学」『熊本大学文学部論叢』97集
 光谷拓実1990『年輪に歴史を読む』奈良国立文化財研究所
 Bowman, S. 1990 *Radiocarbon Dating*. British Museum.
 Broecker, W. S. 1990 Chaotic Climate. *Scientific American*, January.
 Fagan, B. 2000 *The Little Ice Age*. Basic Book.
 2004 *The Long Summer*. Basic Book.
 Kristiansen K. 1998 *Europe before History*. Cambridge University Press.
 Weiss, H. 2000 Beyond the Younger Dryas. Bawden, G. and Reycraft, M. eds.
Environmental Disaster and the Archaeology of Human Response. Maxwell University Press.

て運営委員会を置く。

3 教授会及び教授会としての運営委員会に関し、必要な事項は別に定める。

第51条～68条 省略

別表第1～別表第4 省略

て運営委員会を置く。

3 教授会及び教授会としての運営委員会に関し、必要な事項は別に定める。

第51条～68条 同左

附則

この学則は、平成26年3月27日から施行する。

別表第1～別表第4 同左

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの内部規程

(1) 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程の一部改正新旧対照表

現行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

平成16年4月1日

岡大規程第93号

改正 平成20年3月31日規程第28号

平成23年3月31日規程第26号

平成23年9月27日規程第84号

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大学則第1号。以下「管理学則」という。）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

(自己評価等)

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

(教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

(センター長)

第5条 センターにセンター長を置く。

2 センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第3号）第5条第1項第5号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

改正

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター規程

平成16年4月1日

岡大規程第93号

改正 平成20年3月31日規程第28号

平成23年3月31日規程第26号

平成23年9月27日規程第84号

平成26年1月28日規程第1号

(趣旨)

第1条 この規程は、国立大学法人岡山大学管理学則（平成16年岡大学則第1号。以下「管理学則」という。）第26条の規定に基づき、管理学則第21条の規定により学内共同利用施設として置かれる岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、岡山大学（以下「本学」という。）の敷地内の埋蔵文化財について、次の各号に掲げる業務を行い、もって埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

- 一 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
- 二 発掘された埋蔵文化財の整理及び保存に関すること。
- 三 埋蔵文化財の発掘調査報告書の作成等に関すること。
- 四 その他埋蔵文化財の保護に関する重要な事項。

(自己評価等)

第3条 センターは、センターに係る自己点検及び評価（以下「自己評価」という。）を行い、その結果を公表する。

2 前項の自己評価については、本学の職員以外の者による検証を受けることを原則とする。

(教育研究等の状況の公表)

第4条 センターは、教育研究及び組織運営の状況等について、定期的に公表する。

(センター長)

第5条 センターにセンター長を置く。

2 センター長は、国立大学法人岡山大学役員規則（平成16年岡大規則第3号）第5条第1項第5号に規定する財務・施設担当理事をもって充てる。

3 センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。
(副センター長)

第6条 センターに副センター長を置く。

2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

3 副センター長は、センター長の職務を助ける。

4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員(以下「専門委員」という。)を置く。

2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(管理運営の基本方針等)

第9条 センターの管理運営の基本方針等は、役員会で審議する。

(運営委員会)

第10条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

(雑則)

第12条 この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

附則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附則

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附則

この規程は、平成23年11月1日から施行する。

3 センター長は、センターを代表し、その業務を総括する。
(副センター長)

第6条 センターに副センター長を置く。

2 副センター長は専門的知識を有する本学の教授のうちから学長が任命する。

3 副センター長は、センター長の職務を助ける。

4 副センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(調査研究室)

第7条 センターにセンターの業務を処理するため調査研究室を置く。

2 調査研究室に室長、調査研究員及びその他必要な職員を置く。

3 室長は、専門的知識を有する本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

4 室長は、センター長の命を受け、センターの業務を処理する。

5 室長の任期は、2年とし、再任を妨げない。

6 調査研究員及びその他の職員は、上司の命を受け、センターの業務に従事する。

(調査研究専門委員)

第8条 センターに、センターの業務のうち特に専門的な事項についての調査研究の推進を図るため、調査研究専門委員(以下「専門委員」という。)を置く。

2 専門委員は、本学の教員のうちからセンター長が命ずる。

3 専門委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

(運営委員会)

第9条 センターに、センターの運営に関する具体的な事項を審議するため、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会に関し、必要な事項は、別に定める。

(事務)

第10条 センターの事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

(雑則)

第11条 この規程に定めるもののほか、センターに関し、必要な事項は、別に定める。

附則

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附則

この規程は、平成20年4月1日から施行する。

附則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附則

この規程は、平成23年11月1日から施行する。

現行

平成16年4月1日

学 長 裁 定

第1条 この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第2項の規定に基づ
き、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下
「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものと
する。

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する____具体的な事項を審議する。

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

二 埋蔵文化財調査研究センター副センター長

三 岡山大学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名

四 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者1人

六 施設企画部長

2 前項第3号_____の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

3 委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規程

平成26年 1 月28日

岡大規程2号

第1条 この内規は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
規程（平成16年岡大規程第93号）第10条第2項の規定に基づ
き、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（以下
「運営委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものと
する。

第2条 運営委員会は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター（以下「センター」という。）の運営に関する次の具体的な事項を審議する。

二 教員の選考に関する事項

三 その他センターの運営のに関する重要事項

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員で組織する。

一 埋蔵文化財調査研究センター長（以下「センター長」という。）

三 本学の教授のうちからセンター長の命じた者若干名

四 センターの調査研究専門委員のうちからセンター長の命じた者1人

六 施設企画部長

2 前項第3号及び第4号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の在任期間とする。

3 教員の選考に関する事項を審議する場合には、第1項第4号及び第5号のうち教授でない者並びに第6号の委員は、審議に加わらないものとする。

第4条 運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

3 委員長に事故があるときには、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代理する。

第5条 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

（事務）

第6条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附則

この内規は、平成16年4月1日から施行する。

（事務）

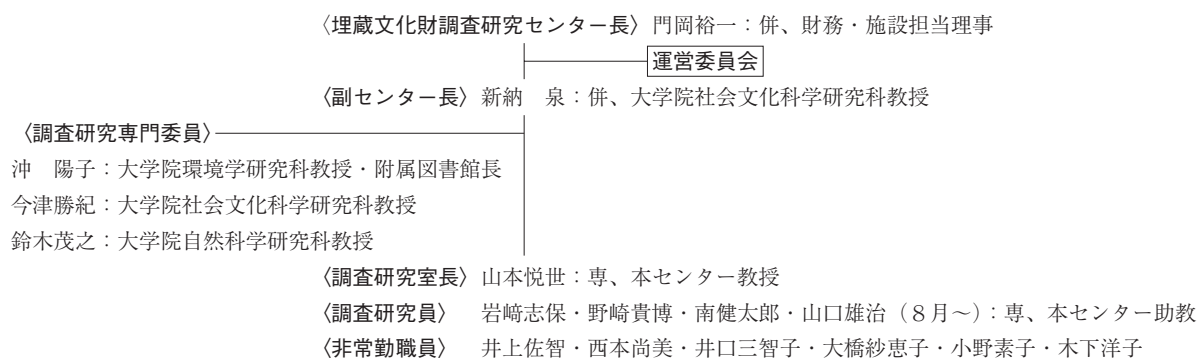
第6条 運営委員会の事務は、施設企画部施設企画課において処理する。

附則

この規程は、平成26年1月28日から施行する。

2. 2013年度岡山大学埋蔵文化財調査研究センター組織

(1) センター組織



(2) 運営委員会

【委員】

門岡裕一	財務・施設担当理事（センター長）	沖 陽子	大学院環境学研究科教授・附属図書館長
新納 泉	大学院社会文化科学研究科教授（副センター長）		（調査研究専門委員）
久野修義	大学院社会文化科学研究科教授	鈴木茂之	大学院自然科学研究科教授
松木武彦	大学院社会文化科学研究科教授	山本悦世	埋蔵文化財調査研究センター教授（調査研究室長）
大塚愛二	大学院医歯薬学総合研究科教授	秋山明寛	施設企画部長

【2013年度協議・報告事項】

第78回	2013年6月持ち回り	協議事項	・助教の採用について
第79回	2013年7月25日	協議事項	・テニユア審査の運用について
			・教員人事について
			・平成24年度決算について
			・平成25年度予算（案）について
			・平成25年度事業計画について
		報告事項	・発掘調査について（鹿田遺跡第24次調査）
第80回	持ち回り	協議事項	・埋蔵文化財調査研究センター運営委員会規定の制定および規定の一部改正について
第81回	2014年1月29日	協議事項	・助教の再任について
			・平成26年度事業計画について
			・平成26年度予算（案）について
		報告事項	・津島岡大35次発掘調査について
			・鹿田遺跡ギャラリー展示について
			・第3回特別展について
			・埋蔵文化財調査研究センター規程および運営委員会規程の改正について

3. 岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

岡山大学構内遺跡の発掘調査にかかわる安全管理事項

平成12年 5月15日
埋蔵文化財調査研究センター長
施設部長

I. 請負業者が留意すべき事項

1. 請負業者は現場代理人を発掘作業の現場に常駐させ、作業員の安全と健康の管理につとめること。
2. 発掘作業の現場に「地山掘削」と「土止め支保工」の技能講習修了者をおき、作業員の安全や健康にも注意すること。
3. 工事用電力の保安責任者をおくこと。
4. 非常停止装置を備えたベルトコンベアーを用いること。
5. 重機の運転は、免許所有者がおこなうよう厳守させること。

II. 発掘現場で注意すべき事項

1. 服装・装備・用具等
 - 1) 安全で機能的な服装にする。
 - 2) 平坦面から2m以上の穴等を掘削する場合は、ヘルメットを着用する。
 - 3) ベルトコンベアーの移動時および周辺での作業の際には、ヘルメットを着用する。
 - 4) グライNDERを使用する際は、手袋・防護眼鏡を着用する。
 - 5) スコップ・草刈りなどの用具は、危険がないように使用方法や置き方や保管方法に十分注意する。
2. 掘削
 - 1) のり面の角度

造成土：通常の土壌の場合は50～60度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。砂地の造成土の場合は35度とし、これを確保できない場合は土止め等の手当をおこなう。

堆積土：基本75度とし、状況や土質に応じて安全な角度をとる。

発掘区の壁際を深さ1.5m以上掘削する場合は、原則として途中で段を設ける。その場合の段の巾は、60cm以上とする。
 - 2) のり面の保護

のり面はシート等で覆うなどし、崩落防止のために必要な保護措置をとる。
 - 3) 深い遺構（深さ1.5m以上の遺構）

遺構掘削者以外の者が上面で安全確認を行い、十分な注意を払う。場合によっては周囲を広くカットして対応する。

なお、作業現場内への昇降のために、階段を設置する。
3. 高所（高さ2m以上の場所）での作業
 - 1) 作業中には安全帯を使用する。
 - 2) 架台を組んだ場合は最上段に手すりを設け、安全を確保する。
 - 3) 2段以上の架台は、分解して移動させる。
4. 発掘用機械類の操作

（ベルトコンベアー・ポンプ等）

 - 1) 調査用電源の設置と取扱いについては、工事用電力の保安責任者が安全確認を行う。
 - 2) ベルトコンベアー・水中ポンプ等の知識を持つ者が整備・稼働させる。
 - 3) ベルトコンベアーを重ねたつなぎ目の部分には、なるべく土が落ちないように措置をする。
 - 4) 原則としてベルトコンベアーの直下での作業・通行を避ける。
 - 5) ベルトコンベアーの移動時は作業員の中で指揮者を決め、周辺の安全性を確保したうえで移動させる。

（重機関係）

 - 1) 重機の免許所有者以外は運転しない。
 - 2) 運転者は、周囲の安全に注意する。
 - 3) 稼働中は、重機の旋回半径内に立ち入らない。
5. 健康管理
 - 1) 作業中に体調が悪くなった場合は直ちに申し出る。

III. その他

- 1) 作業現場内の状況の変化に絶えず注意し、異常を発見したら、直ちに作業を中止して現場代理人に報告し、施設部の監督職員の指示を受ける。
- 2) 調査区の状況や遺構などの特殊性・重要性等により、上記の2の1)～3)どおりに発掘作業を実施することが困難な場合は、現場代理人が監督職員と協議のうえ、安全に留意し作業を行う。

付 表

表10 1982年度以前の構内主要調査（1980～1982年度）

年度	地 区 名	種類	工事名称：調査名称	調 査 組 織	調査面積 (㎡)	文献	備 考
1980	鹿田	立会	歯学部附属病院棟新営	岡山市教育委員会	8		
1981	津島	BD26	〃 農学部寄宿舎新営	〃			
	〃	〃	〃 文法経 合併処理槽施設	〃			
	〃	〃	〃 文法経 合併処理槽施設	〃			
	〃	BD09、 BC09～11	〃 基幹整備（共同溝取付）	〃			
	〃	BD～BE04～07	〃 陸上競技場改修（配水管施設）	〃			
	鹿田	〃	〃（医病）高気圧治療室新営	〃			
	〃	〃	〃（医病）動物実験棟新営	〃 岡山県教育委員会			大学が市教委への確認調査依頼をせずに掘削。その後、岡山市・岡山県教委が残存壁面の調査を実施
	〃	〃	〃（医病）理解剖体臓器処理保管庫新営	岡山市教育委員会			
	〃	〃	〃 医学部運動場改修	〃			
1982	津島	AV06・10、 AW05・14、 AX08、BD07、 BE10	試掘 排水基幹整備	〃			津島AW14区で弥生時代包含層確認、協議→津島岡大遺跡第1次調査へ
	〃	AW14	文法経 排水集中槽（NP-1）埋設 ：津島岡大第1次調査	岡山大学	24.0	3	[小橋法目黒遺跡]と報告
	〃	〃	試掘 武道館新営	岡山市教育委員会	2.3		
	〃	AY15・16	〃 法経 校舎新営	〃	7.0		
	鹿田	〃	〃 医学部標本保存庫新営	岡山県教育委員会	8.0		
	〃	〃	〃（医病）外来診療棟新営	〃 岡山市教育委員会	4.0	2	
	〃	〃	立会 医学部動物実験施設関連排水管・ガス管理設	岡山県教育委員会		1	
	〃	AE～AN22、 AE22～26	〃 歯学部電話ケーブル埋設	〃 岡山市教育委員会 岡山大学埋蔵文化財調査室			

文献

1. 光永真一 1983「岡山大学医学部附属病院動物実験施設新営工事に伴う排水管付設工事に伴う立会調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
2. 河本 清 1983「岡山大学医学部附属病院外来診療棟改築に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会
3. 吉留秀敏 1985「岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡（AW14区）の発掘調査」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集 岡山大学埋蔵文化財調査室

表11 2012年度以前の構内主要調査（1983～2012年度）

凡例	<ul style="list-style-type: none"> ・総合番号：調査地区別通し番号（立会調査は選択的に保存） ・津島岡大遺跡第1次調査は本機関設置以前の調査であることから、総合番号を※1として区別している。 ・試掘確認調査のうち、その後の発掘調査範囲内に入った場合は、範囲内の番号記載を省き、全てが範囲内に含まれた場合には総合番号に（ ）を付している。 ・立会調査で、付表に保存する基準：①中世土層以下を確認した調査 ②明確な遺構・遺物を確認した調査 ・番号：年度別報告番号 ・文献：付表13・14の番号に対応する。正式報告が刊行された場合は、年報・紀要掲載の概報文献は削除している。
----	---

表11－(1) 発掘調査

<津島地区：津島岡大遺跡>

総合 番号	年度	番 号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(m ²)	概 要（主要遺構他）	文献
※1	1982	－	津島岡大遺跡第1次調査 ：排水集中槽（NP-1）埋設	AW14	10.28～11.24	24	弥生中期・古代：溝、「小橋法目黒遺跡」と報告	3
1	1983	－	津島岡大遺跡第2次調査 ：排水管理埋設	BE14・18、BF17・18 BG14 BH14・15	84.1.9～3.5	265	弥生早・前期：遺物	4
2	1983	－	津島岡大遺跡第2次調査 ：合併処理槽埋設	BH13	11.14～11.22 84.1.9～3.5	276	弥生前期水田関連遺構（溝他）	4
15	1986 1987	2 1	津島岡大遺跡第3次調査 ：男子学生寮新営	AV00、AW00・01	12.1～87.6.18 8.24～9.5	1550	縄文後期河道、弥生早期：貯蔵穴群・河道、弥生前期～近代：水田・溝、古代条里関連溝	19
16	1986	3	津島岡大遺跡第4次調査 ：屋内運動場新営	BF・BG09	87.1.19～1.22	70	弥生前期溝、中世河道	6
26	1988	1	津島岡大遺跡第5次調査 ：大学院自然科学研究科棟新営	AY06～08 AZ06・07	6.27～89.3.19	1537	縄文後期・弥生早期：貯蔵穴群・河道、弥生時代末～近世：水田関連遺構	27
27	1988 1989	2 1	津島岡大遺跡第6次調査 ：生物応用工学教科棟新営	AV・AW04・05	9.20～89.5.31	600	縄文後期：貯蔵穴群・河道、古代条里関連溝、弥生前期～近世：水田・溝	35
28	1988	3	津島岡大遺跡第7次調査 ：情報工学科棟新営	AV・AW05・06	10.12～89.3.31	800	縄文後期：炉・ピット、弥生前期～近世：水田・溝	35
39	1990	1	津島岡大遺跡第5次調査 ：自然科学研究科棟共同溝・検水樹設置	AY・AZ08	4.3～4.21	90	古墳後期溝	27
44	1991	2	津島岡大遺跡第8次調査（A地点） ：遺伝子実験施設新営	BD18・19	7.23～12.25	650	縄文時代土坑、弥生時代～近世：溝群	32
45	1991	3	津島岡大遺跡第8次調査（B地点） ：合併処理槽新営	BH13	7.23～12.2	140	弥生時代溝、古代～近世：水田	32
50	1992	1	津島岡大遺跡第9次調査 ：生体機能応用工学教科棟新営	AU～AW04	7.1～93.1.29	650	縄文後期：貯蔵穴群・土坑・溝・火処、弥生時代～近世：水田関連遺構	47
51	1992 1993	2 1	津島岡大遺跡第10次調査 ：保健管理センター新営	BB～BC10～11	93.2.1～3.31 4.17～7.31	400	弥生後期土坑群、古墳時代：井戸・住居・炉、古代柱穴群、中世溝、近世耕作関連遺構	64
54	1993	2	津島岡大遺跡第11次調査 ：総合情報処理センター新営	AV～AW11～12	9.14～94.1.11	640	縄文後期：ピット・炉、弥生前期水田畦畔	36
55	1993 1994	3 1	津島岡大遺跡第12次調査 ：図書館新営	AV～AW13～14	94.2.9～3.31 4.1～11.30	1472	弥生前期水田、弥生中期～古墳時代：溝群、古代～近世：条里関連溝	64
64	1994 1995	2 1	津島岡大遺跡第13次調査 ：福利厚生施設（北棟）新営	AW～AX11～12	10.6～11.30 95.7.10～10.4	816	縄文後期ピット、弥生水田、弥生～古墳時代：溝群	41
69	1995	2	津島岡大遺跡第14次調査 ：福利厚生施設（南棟）新営	BB～BC12・13	10.25～96.2.14	856	弥生前期水田、弥生～古墳時代：溝群	46
70	1995 1996	3 1	津島岡大遺跡第15次調査 ：サテライトバンチャービジネスラ ボラトリー新営	AW00・01	96.1.16～4.25	1600	縄文後期・弥生早期：貯蔵穴群・河道、縄文後期：ピット群・石材アボ・火処、弥生前期水田、古墳～中世：水田・溝	72
74	1996	2	津島岡大遺跡第16次調査 ：動物実験棟新営	BD19～20	5.7～15	30.3	A地点：縄文時代・古墳時代：土坑 B地点：中世溝、古代柱穴列、弥生時代水田	44
75	1996	3	津島岡大遺跡第17次調査 ：環境理工学部校舎（Ⅰ期）新営	AW02～04	5.21～97.1.9	1451	縄文後期：住居・土坑・溝、弥生前期：水田、弥生時代溝群、古墳後期柱穴列、古代水田、中近世耕作痕	77
85	1998	2	津島岡大遺跡第18次調査 ：福利施設（南）ポンプ槽取設	BB11	4.7～4.10	16	古代溝状遺構	53
86	1998	3	津島岡大遺跡第19次調査 ：コラボレーション・センター新営	AZ09・10	7.27～99.2.18	1019	縄文後期：ピット・炉、弥生前期：水田・土坑・河道、古墳時代・中世：溝、近世：道路状遺構・溝	65
87	1998	5	津島岡大第20次調査 ：環境理工学部校舎ポンプ槽取設	AY07	10.19～28	16	黒色土上面に溝、中世溝	53
88	1998	6	津島岡大遺跡第21次調査 ：工学部エレベーター設置	AX09	11.6～24	30.2	縄文時期土坑、弥生早期～前期：溝、古代：土坑・溝	65
89	1998 1999	8 2	津島岡大遺跡第22次調査 ：環境理工学部校舎（Ⅱ期）新営	AW02・03	99.3.1～7.12	773.5	縄文後期～弥生前期：河道、弥生早期土坑、弥生前期水田、弥生中期溝、古墳～近世：条里関連溝・水田	77
104	1999 2000	5 1	津島岡大遺跡第23次調査 ：総合研究棟新営	AZ15・BA14	00.2.3～7.28	1339	縄文後期～弥生前期河道、縄文後期杭列、弥生早期：貯蔵穴・溝、弥生前期：堰・溝、弥生中期～近世：溝	80
111	2000	3	津島岡大遺跡第24次調査 ：総合研究棟渡り廊下建設	AZ14	12.5～14	34.2	縄文後期：河道・杭列	80
112	2000	4	津島岡大遺跡第25次調査 ：散水施設設置	BA15	01.1.29～31	20	中世～近世：溝	61

総合 番号	年度	番 号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(㎡)	概 要 （主要遺構他）	文献
113	2000 2001	5 1	津島岡大遺跡第26次調査 ：事務局棟新営	BC～BD14～15	01.3.26～9.30	1550	縄文中・後期：土坑・炉、弥生早期貯蔵穴、弥生前期土坑、弥生後期溝、古墳後期～中世：櫛列・道路状遺構、近世：溝・堰	76
121	2001 2002	2 1	津島岡大遺跡第27次調査 ：創立五十周年記念会館新営	BB～BC14～15	02.2.1～6.24	1648	縄文後期炉、弥生・古墳時代：溝群、中世畦畔（条里関連）	68
127	2002	2	津島岡大遺跡第28次調査 ：自然科学系総合研究棟新営	AW～AY06～08	4.30～9.20、 11.28～03.1.15	1798	弥生前期水田、弥生前～中期：溝、古代：溝（内に柱穴列）、中世畠関連遺構	87
128	2002	4	津島岡大遺跡第29次調査 ：共同溝設置	BF16	9.18～10.3	62.6	弥生～古墳時代：溝・ピット	71
163	2007	1	津島岡大遺跡第30次調査 ：岡山大インキュベータ新営	BC19・20	8.1～12.17	1035.4	縄文後期～弥生早期：土坑群、弥生～古墳時代：溝群、古代道路状遺構、中近世：土坑群・畦畔・溝群	93
168	2008	1	津島岡大遺跡第31次調査 ：大学生協東福施設新営	AX04	6.17～8.22	212	弥生前～中期畦畔、古代道路状遺構	95
184	2009	1	津島岡大遺跡第32次調査 ：教育学部武道場新営	AX02	7.16～10.13	383	縄文後期貯蔵穴群、弥生前～中期畦畔、弥生前・中期・中近世：溝	100
196	2010	1	津島岡大遺跡第33次発掘調査 ：薬学部講義棟新営	BB17・18、BC17・18	7.16～11.11	972.2	縄文中・後期：ピット、弥生時代：土坑・溝、古墳時代後期～古代総柱建物、古代・中世：道路状遺構	105
197	2010	2	津島岡大遺跡第34次発掘調査 ：国際交流会館新営	AU・AV13・14	7.30～9.28	1590	弥生前～中期：畦畔・溝、近世土坑群、平面調査は中世上面まで実施し下層部は保存	105

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合 番号	年度	番 号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(㎡)	概 要 （主要遺構他）	文献
1	1983 1984	－	鹿田遺跡第1次調査 ：外来診療棟新営	AU～BD28～40	7.27～11.22 84.1.9～8.31	2188	弥生時代中期後半～中世の集落遺構群	7
2	1983	－	鹿田遺跡第2次調査 ：NMR-CT室新営	BG～BI18～21	8.1～12.30	176	弥生時代後期～中世の集落遺構群	7
10	1986	1	鹿田遺跡第3次調査 ：医療技術短期大学校舎	CN～CU27・28、 CT～CY19～27、 CX～DD16～25、 DD～DG22・23	6.2～11.29	2390	中世の集落遺構群、古代の橋脚・河道	10
12	1987	3	鹿田遺跡第4次調査 ：医短校舎周辺の配管敷設	DD～DF25 DG～DI27・28	11.2～11.21	30	古代の河道	10
13	1987	2	鹿田遺跡第5次調査 ：管理棟新営	BB～BH35～42	10.6～88.3.2 88.3.23～3.31	1192	弥生時代中期後半～中世の集落遺構群	24
16	1990 1991	2 1	鹿田遺跡第6次調査 ：アイソトープ総合センター新営	BW～CC67～71	11.20～91.6.30	690	古墳時代初頭土坑、中世集落遺構群	40
25	1997 1998	4 1	鹿田遺跡第7次調査 ：基礎医学棟新営	BR55～BX61 BY56～57	98.2.27～8.6	829	古墳時代初頭・中世の集落遺構群、近世の水田・溝	85
27	1998	4	鹿田遺跡第8次調査 ：RI治療室新営	BP～BS30～32	7.28～9.1	165	古墳時代と中世の溝群	85
28	1998 1999	7 1	鹿田遺跡第9次調査 ：病棟新営	CD33～37、 CE・CF28～37、 CG～CJ20～37、 CK・CL25～37	11.27～99.5.11	2088	弥生時代水田・溝、中・近世集落遺構群	53
31	1999	3	鹿田遺跡第10次調査 ：共同溝設置関連	CD・CE10～12 DD～DF16～22	5.7～10.14	244.1	古代の杭列、弥生時代ピット、近世溝	56
32	1999	4	鹿田遺跡第11次調査 ：病棟新営	CD～CM19～42	8.19～12.22	2020	弥生時代水田畦畔、古代の池状遺構、中・近世集落遺構群	56
40	2000 2001	2 －	鹿田遺跡第12次調査 ：エネルギーセンター新営	CO～CV35～44 CN・CM38～41 CN28～38	10.2～01.05.10	1897	弥生時代溝・河道、古墳時代溝・土器溜まり、中世集落遺構群、近世土坑・溝	56 61
46	2002	3	鹿田遺跡第13次調査 ：総合教育研究棟新営	BL～BR46～51	4.30～10.25	934	弥生時代の溝、古墳時代の土器溜まり・溝、中世集落遺構群、近世土坑群	98
55	2003	1	鹿田遺跡第14次調査 ：病棟（Ⅱ期）新営	CD～CM12～20	7.31～12.17	1331	弥生～古墳時代の畦畔・溝、中世の集落遺構群、近世のため池・土坑	71
56	2003	2	鹿田遺跡第15次調査 ：総合教育研究棟外構	BQ～BS45・46	10.16～10.29	30.4	古墳時代初頭の井戸・溝	98
59	2004	1	鹿田遺跡第16次調査 ：立体駐車場新営	AH～AI6・7 AF12・13、 AN～AO4	10.21～11.8	49.15	近世～近代の畦畔・溝・畝・土坑、中世の土坑、弥生～古墳時代の河道	81
60	2006	1	鹿田遺跡第17次調査 ：総合研究棟（医学系）新営	BR～BY60～64	7.10～11.14	642	古墳時代～中世の集落遺構群、近世土坑・溝	88
64	2007	1a	鹿田遺跡第18次調査 ：中央診療棟新営	BT13～BY20	10.10～08.3.14	872.2	弥生時代後期～近世の集落遺構群	92
65	2007	1b	鹿田遺跡第18次調査 ：防火水槽設置	CG～CI9・10	10.16～11.1	43.2	古代後半の井戸、近世入江状遺構・護岸施設	92
66	2007	1c	鹿田遺跡第18次調査 ：用水路改修	CM～CN9・10 CO10・11	12.27～08.1.16	56	弥生時代土坑・溝	92
76	2008	1	鹿田遺跡第19次調査 ：歯学部渡り廊下設置	AW～AY22～23	6.26～9.12	80	弥生時代後期の「方形高まり」・貝塚・壺棺・土坑・溝、古墳時代土坑・溝、古代ピット、近世土坑	95

総合 番号	年度	番 号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(㎡)	概 要 （主要遺構他）	文献
80	2009	1a	鹿田遺跡第20次調査 A 地点 ：中央診療棟共同溝設置	BZ～CC31～40	6.18～7.31 8.5～24	632	弥生時代～近世の遺構・遺物	102
81	2009	1b	鹿田遺跡第20次調査 B 地点 ：中央診療棟新営（本体工事）	BS20～23 BT～BW20～24 BX～CD13～25	10.15～11.22 3.1～8	2482	弥生時代～近世の遺構・遺物	102
84	2010	1	鹿田遺跡第20次調査 C 地点 ：中央診療棟新営	BR・BS12～21 BT～BX12～13	7.20～10.8	276	弥生時代～近世の遺構・遺物	105
85	2010	2	鹿田遺跡第20次調査 D 地点 ：中央診療棟新営	BT・BU24	2011.2.18～3.2	15	中世～近世の遺構・遺物	105
86	2010	3-1	鹿田遺跡第21次調査 A 地点 ：外来棟周辺他環境整備	AD～AF30・31	11.18～12.9	21.2	平安時代河道、鎌倉時代溝状遺構	105
87	2010	3-2	鹿田遺跡第21次調査 B 地点 ：外来棟周辺他環境整備	AG・AH30・31		22	平安時代河道、鎌倉時代溝状遺構	105
88	2010	3-4	鹿田遺跡第21次調査 D 地点 外来棟周辺他環境整備	AS・AT25～28		59.4	弥生時代包含層	105
94	2011	1	鹿田遺跡第22次調査 地域医療人育成センター新営	AV～BB 04～07	7.14～9.22 10.14～11.18	533	弥生時代井戸・溝、中世井戸・溝、近世井戸・溝、近代溝・池	106
96	2012	1	鹿田遺跡第23次調査 J ホール新営	AN～AR 57～62	6.25～8.30	612	弥生時代～古墳時代初頭畦畔、古代溝、中世溝・炉 近世溝・土坑・島、近代溝・トロコ軌道	111
97	2012	2	鹿田遺跡第24次調査 医歯薬融合棟新営	BD～BL 57～69	11.27～ 2013.4.25	1867	弥生時代溝、古墳時代土器棺、古代井戸・土坑、中世 溝・畦・井戸・土坑、近世溝・土坑、近代畝状遺構	111

＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合 番号	年度	番 号	調査名称：工事名称	構内座標	調査期間	面積(㎡)	概 要 （主要遺構他）	文献
1	1997	1・2	福呂遺跡第1次調査 ：実験研究棟新営	－	97.5.10～20 7.28～31	269	縄文時代早期・弥生時代中期・中世・近世の集落	55
2	1997	3	福呂遺跡第2次調査 ：実験研究棟新営に伴うスロープ設置	－	97.11.25～12.5	120	近世・中世・古代の集落	55

表11－(2) 試掘・確認調査

＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合 番号	年度	番 号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文献
							TP数	内容・その後の対応	
(3)	1983	－	農学部合併処理槽予定地	BH13	2.5	－	1	→津島岡大第2次調査：1983年度	1
4	1983	－	農学部排水管中間ポンプ槽予定地	BF17	3.5	－	1	→工事立会	
5	1983	－	農学部排水管理設予定地	BE～BG14、 BE・BH15、BE18、 BF16～18、BC18	2.0	－	29	→津島岡大第2次調査：1983年度	
6	1983	－	農学部農場畜舎棟予定地	BF22・23	2.0～3.0	0.6	2	土器片→1987年度工事立会	
(7)	1983	－	大学事務局棟予定地	BC・BD15	2.0～3.0	0.9	3	→津島岡大第26次調査：2000年度	
(8)	1983	－	保健管理センター予定地	BB10	2.0～3.0	0.8	1	→津島岡大第10次調査：1999年度	
9	1983	－	津島宿舍予定地	BI16	0.9	0.9	2	土器片→1987年度工事立会	
10	1983	－	工学部校舎新営予定地	AW05	3.0	1	1	土器片	
12	1985	1	教養講義棟予定地	BE08	3.5	1.2	2	遺構など未確認→1986年度工事立会	
13	1985	2	教育研究棟予定地	AX02	2.6～3.4	1.2	3	縄文～弥生・中世土器出土	5
14	1985	3	男子学生寮予定地	AV・AW99～01	2.0～3.0	1	12	→津島岡大第3調査：1986年度	6
(17)	1986	3	屋内運動場予定地	BF・BG09	2.4、1.2～1.7	1.1	3	→津島岡大第4次調査：1986年度	
(18)	1986	4	大学院自然科学研究科棟予定地	AY・AZ07	1.6～3.2	0.6～0.8	3	→津島岡大第5次調査：1988年度	8
22	1987	4	外国人宿舍予定地	AP02	2.2～2.8	－	2	縄文時代・弥生時代・近世の遺構面	
(23)	1987	5	総合情報処理センター予定地	AV11	2.0～3.0	2	2	→津島岡大第11次調査：1993年度	
24	1987	6	理学部身体障害者用エレベーター予定地	AY09	3.0～3.5	約1.0	1	中世・近世の遺物、古代・中世の水田 ＜継続して調査＞	
25	1987	7	教養部身体障害者用エレベーター予定地	BD09	2.5	0.7	1	縄文時代遺構、縄文・中世・近世土器 ＜継続して調査＞	
29	1988	17	工学部校舎予定地	AX04・06、AW04	2.0～3.5	1～1.5	6	→津島岡大第6・7次調査：1988年度	11
30	1988	19	動物実験飼育棟・遺伝子実験棟予定地	BD18・19	2.3	1.1～1.2	3	→津島岡大第8次調査：1991年度	
31	1988	20	国際交流会館予定地	BC26	2.5	1.2	3	中・近世土器→1988年度工事立会	
33	1989	2	教育学部身体障害者用エレベーター予定地	AZ・BA05	2.5	0.8	1	縄文後期・弥生早期の落込み、縄文後期～中世 土器＜継続して調査、面積38.5㎡＞	14
34	1989	3	大学院自然科学研究科合併処理槽予定地	AZ17	4.0	1.6～2.0	1	中世～明治の水田畦畔・溝→1989年度工事立会	
35	1989	4	学生合宿所予定地	BD02	2.0～3.2	1	1	弥生早・前期の畦畔→1989年度工事立会	
(36)	1989	5	図書館予定地	AV・AW13	3.0	1.4～1.6	2	→津島岡大第12次調査：1993年度	
40	1990	3	学生合宿所ポンプ槽予定地	BC02	2.5	1.1	1	弥生前期畦畔、中世土器	18
41	1990	6	福利厚生施設予定地	AW・AX11	3.9	1.4～1.6	2	→津島岡大第13次調査：1994年度	
56	1993	3	農学部汎用耕地実験実習施設予定地	BE～BF22～23	1.5	－	2	中～近世の耕作土	30
65	1994	3	農・薬学部動物実験施設予定地	BD20	2.0	0.9	1	GL-1.4mで黒色土、縄文土器1点→盛り土保存	33
71	1995	4	国際交流会館予定地	BE26	4.1・2.4	1.6	2	中世～明治層確認、以下は湿地、遺構・遺物無し（明治畝のみ）→工事立会	38
72	1995	5	環境理工学部校舎予定地	AW02・03	2.4	1.2	2	→津島岡大第17次調査：1996年度	

総合 番号	年度	番 号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文 献
							TP数	内容・その後の対応	
73	1995	6	ボクシング部ボックス移設予定地	BF07	3.0	1.2	1	標高2.5mで黒色土、弥生～古墳時代の溝2条、古代溝1条	38
(90)	1998	9	コラボレーション・センター予定地	AZ09	2.7～3.4	1.3	2	→津島岡大第19次調査：1998年度	53
(91)	1998	10	環境理工学部校舎予定地	AW02・03	4.5	1.2	2	→津島岡大第22次調査：1998年度	
92	1998	13	工学部システム工学科棟予定地	AW04	2.8	1	1	GL-1.8m黒色土、縄文後期の遺構	
93	1998	14	遺跡保護区整備関連範囲	AU02・03・06、 AV03	2.4～3.8	0.8～1.6	5	TP1・3・5：微高地、TP2・4：低湿地、TP1：弥生溝、TP3：弥生溝・ビット、TP4：中世溝	
(105)	1999	6	文法経 総合研究棟予定地	AZ15、BA14	2.7、3.5	0.8 1.1	2	→津島岡大第23次調査：1999年度	56
106	1999	7	電波暗室設置予定地	AV08	1.2	0.2	1	現表土以下に基盤となる岩盤層	61
114	2000	6	縄文～弥生時代における環境復元に伴う調査	AV00、 AX00・02・03、 AZ06、AW08	2.6～3.2	1.7～0.9	6	縄文・弥生時代の微高地、古代溝	
115	2000	7	創立五十周年記念館予定地	BB14	2	0.8	1	→津島岡大第27次調査：2001年度	
129	2002	5	事務局旧本部棟移転予定地	BD15	2.1	1	1	黒色土の落ち	
185	2009	2	学童保育室予定地	AV14	3.24	1.95	1	黒色土確認	102
186	2009	3	農学部構内植物工場予定地	BF20	3.4 2.3	2.3 1.1	2	近代溝・畦畔 弥生中期～古代におさまる溝	
198	2010	3	国際交流会館予定地	AU13・14	3.4	1.6～1.9	3	→津島岡大第34次調査：2010年度	
199	2010	4	生協プレハブ予定地	BC12	2.2	0.9	1	黒色土は未堆積を確認	105
208	2011	1	文法経フェンス工事	AW17、AX17、 AY17、AZ16	1.1～2.0	1.0～1.6		近代の土塁、水路	106
				AZ17	0.8	－		門跡・陸軍建物基礎	
213	2012	1	正課外活動施設予定地	BD02	2.9	1.1	1	縄文時代～近代層確認	111

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合 番号	年度	番 号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文 献
							TP数	内容・その後の対応	
(4)	1984	－	西病棟北側受水槽予定地	BU30・31	1.4	0.5～0.7	2	中世土器・包含層確認→盛り土保存	2
(5)	1984	－	医療短期大学部校舎予定地	CT・CU25、 CZ19・20・23・24	2.7	0.8～1.0	3	→鹿田第3次調査：1986年度	
6	1985	4	外来診療棟環境整備工事範囲	AJ33、AI40、 AJ・AK26	2.2～3.0	0.9～1.4	3	弥生時代～中世の遺物	5
(17)	1990	5	アイソトープ総合センター予定地	BY・BZ68	2.3	1.2～1.3	1	→鹿田第6次調査：1990年度	18
(26)	1997	8	基礎医学棟予定地	BT57	2.2	0.9	1	→鹿田第7次調査：1997年度	50
29	1998	11	病棟予定地	CF・CG43・44、 CH25・26、 CK35・36、CK15	2.0～2.4	1	4	→鹿田第9次調査：1998年度	53
82	2009	2	学生サークル棟予定地	CR70・71、CW75	2.1～2.3	0.9～0.7	2	弥生時代低湿地後中世遺構耕作地、集落外縁	102
89	2010	4	岡山県地域医療総合支援センター予定地	AZ04・BA08	2.3～2.4	1.2～0.6	2	近世溝・弥生包含層確認→鹿田第22次調査：2011年度	105

＜倉敷地区＞

総合 番号	年度	番 号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文 献
							TP数	内容・その後の対応	
1	1990	4	資源生物科学研究所遺跡確認	－	2.5	0.7	1	中世後半以降の土器	18
2	1998	12	バイオ実験棟予定地	－	1.5	0.2	1	近世干拓地内、遺構未確認	53

＜東山地区＞

総合 番号	年度	番 号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文 献
							TP数	内容・その後の対応	
3	2006	1	附属小学校校舎予定地	－	3.0	0.3～0.5	4	近世・近代：溝3条、中世？畦畔	88
4	2008	1	附属中学校校舎予定地	－	2.3～2.4	1	2	近代畦畔	95

＜三朝地区：福呂遺跡＞

総合 番号	年度	番 号	調査対象地名 他	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要		文 献
							TP数	内容・その後の対応	
3	1997	5・6	実験研究棟予定地	－	1.66～2.1	0.8	2	→福呂第2次調査：1997年度	50
5	2004	1	三朝宿泊所増築予定地	－	1.3	0.5～0.9	2	遺構・遺物・包含層未確認	81
6	2004	2	高圧線・電話線設置予定地	－	1.0	0.85	1	河床礫、段丘礫層確認	

表11－(3) 立会調査

＜津島地区：津島岡大遺跡＞

総合 番号	年度	番号	工事名称／細目	構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文 献
11	1984	－	南宿舎合併処理槽関係配水管埋設	BI15～17	1.0～2.2	1	溝・土坑、弥生土器・須恵器	2
19		12	教養部校舎新営	BE08・09	2.3	1.3	中・近世：溝・土器	6
20	1986	21	ハンドボールコート新設	BG08	0.2～2.0	0.8	黒色土	
21		26	教養部校舎新営に伴う電気配管	BF07・08	1.8	0.9	中世包含層	
32	1988	17	テニスコート夜間照明施設	BG10・11	2.2	1.5	GL-約2mで黒色土、西に向かう落ち推定	11

総合 番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献	
37	1989	8	自然科学研究科棟新営：工事用道路		AZ08	1.4	－	弥生後期水田、近世溝、75㎡	14	
38		10	生物応用工学科棟新営に伴う電柱架設		AV04・05	1.5～1.9	0.7～1.2	黒色土		
42	1990	16・19	岡山市道本町津島東線拡幅に伴う補償工事		電柱移設	AV04～10	0.4～3.0	0.6～1.4	5ヶ所、黒色土、条里南北溝	18
43		20	学生合宿所給排水管設置		BC02～04 BD03・04	2.3	1.2	GL-2.3mで黒色土		
46	1991	9	防火用水撤去		BC18	2	0.8	基盤層まで掘削、石礫	21	
47		17	津島地区基幹整備（電気）		ハンドホール・アース板	BB16	1.7～1.8	0.5		2ヶ所、明治層～淡灰色粘土層
48		19			アース板	BD15	1.7	1		GL-1.5mで黒色土
49		40	南北道路外灯設置		BC・BE・BF12	1.5	－	3ヶ所、GL-1.4mで古代層		
52	1992	15	遺伝子実験施設ハンドホール設置		BD18	1.5	0.75～1.1	縄文後期層まで、溝2本	25	
53		34	附属図書館北側駐車場整備		AV12	3	1.7	造成土以下は粘土層		
57		17	保健管理センター新営		外構工事電気配線	BB～BC10～12	1.8	0.6～0.7	黒褐色土はGL-1.15～1.7m	
58		19			旧棟改修電気配線	BB11	1.1	0.8	弥生土器、工法変更	
59	1993	23	津島地区基幹整備RI共同利用施設排水処理施設		BA07	3.2	－	明治～中世層・暗褐色土層、古代溝？ 縄文晩期土器	30	
60		28	津島地区環境整備	ボックスカルバート	BD～BE13	1.5	1	近世～中世層		
61		33		水銀灯設置	BB～BG12～13	1.8	0.5～1.2	10ヶ所、中世層まで、一部で暗褐色土層		
62		34		信号機設置	BD～BE12・13	1.6	1	中世層まで、一部で暗褐色土層		
63		39-41	野球場バックネット・防球ネット改修		BB05～07 BC05・41	2.0～3.2	1	GL-1.2～2.0m付近で黒色土、以下黄色砂～青灰色粘土		
66	1994	9	陸上競技場照明灯設置		BD・BE・BF04～07	2	0.96	GL-1.92～2.0mで黒色土	33	
67		13	総合情報処理センター新営電気工事		AV10、AW10、 AU11	2.2	1.5	GL-1.7mで黒色土、近世溝		
68		20	焼却場設置		BD20	2.2	1.5	GL-1.9mで黒色土		
76	1996	4	農・薬学部動物実験棟新営	造成土取り	BC18	2.2	1.9	黒色土層付近まで	44	
77		5		ハンドホール設置	BD16～19	1.3	－	4ヶ所、造成土以下に5層		
78		12	サテライトベンチャービジネスラボラトリー新営	外灯設置	AV02、AV03、 AV04、AV99、 AW02、AW04	1.0～1.5	0.76～1.1	6ヶ所、明治層～弥生層？		
79		13		配管設置	AV03～AW03	2	0.95	弥生時代層まで、古墳前期：遺構・遺物		
80		18	環境理工学部校舎新営予定地電柱移設		AW03	2	－	黒色土まで		
81		25	附属図書館新営雨水樹・外構工事		AV13	1.3	1	造成土以下に青灰色・黄褐色・灰褐色粘質土		
82	1997	16	南北道路ガス管理設		BB13～BH13	1.5	－	中世層まで	50	
83		19			AW11～BA13					
84		24	福利厚生施設新営に伴う共同溝新設		BC12	2	0.8	GL-1.65mで黒色土、古代～近世の溝		
94		15	外灯設置		BA09	1.47	1	GL-1.42mで黒色土	53	
95		22	コラボレーション・センター支障配管布設替		AZ09、BA09	1.4	1	GL-1.4mで黒色土		
96		24	南福利外灯設置		BB12、BC12	1.4	0.95	中世層まで		
97		31	環境理工学部校舎新営に伴うガス管理設		AW03・AX～AY03～06	1.2～1.4	0.65～0.95	中世層まで（12ヶ所）		
98	1998	34	学生会館改修に伴うトラップ樹撤去		BC10	2.2	1.45	GL-1.7mまで灰褐色粘土、GL-2.2mまで灰色粘土	53	
99		35	NTT電柱移設		BA00	1.5	0.9	造成土以下に褐色系粘質土		
100		41	環境理工学部実験排水管理設		AX03～AY07	1～2.4	0.6～1.4	10ヶ所、5地点で中世層、2地点で古代層、1地点で古墳時代層まで		
101		42	馬場移設に伴う樹木移植		AU02	2.2	1.1～1.3	GL-2mで弥生後期層、GL-2.2mで縄文基盤層	56	
102		44	環境理工学部校舎新営	生活排水樹設置	AV03、AW03	1.97	1.4	古墳時代層まで、須恵器・土師器		
103		48		ガス管理設	AW03	1.45	1	中世層まで		
107	1999	8	外灯設置		AY00、AZ01・03	1.15～1.35	0.5～1.2	3ヶ所で黒色土（GL-0.85～1m）	61	
108		12	コラボレーション・センター新営：ハンドホール設置		AZ08・09	1.48～2.1	1.03～1.16	2ヶ所、その1ヶ所は古墳時代層まで		
109		13	環境理工学部校舎新営に伴うスロープ設置		AW02	3.5	1.2	調査面積25㎡、黒色土下面まで、近代土坑、古代溝、縄文後期ピット		
110		42	コラボレーション・センター新営に伴う排水樹設置		AZ09	1.0～1.2	0.8～1.0	6ヶ所、1ヶ所で黒色土対応層まで		
116	2000	17	津島地区電柱設置		BA12	1.6	1	造成土下に灰色粘質土・暗茶褐色粘質土層	66	
117		23	理学部校舎改修	本館基礎補強	AY09	1.3	0.9	造成土下に暗青灰色粘質土・褐色粘質土・灰色粘質土		
118		28		機械設備電気	AX10、AY10	0.85～1.60	0.8～1.6	南側ハンドホール：GL-1.6mまで・GL-1.52mで中世溝（方向は南東～北西）		
119		42	精密応用工学科棟都市ガス改修		AW08、AX08	1.6～2.05	1.45	GL-1.82mで明灰褐色粘土（中世?）		
120		44	文法経 総合研究棟仮設電柱設置		BA16	1.5～1.7	1	GL-1.4mで中世層？軍庭園の築山・土塁一部掘削		
122	2001	4	理学部校舎改修：電気設備	ハンドホール	AZ10	1.6	1.0～1.2	中世溝	71	
123		11	本部棟新営	電柱	BB～BC16	1.5～2.1	1.2～1.4	2ヶ所、GL-1.4mで灰色粘土、GL-2.1mまで谷か？		
124		27		車庫移設	BB・BC13	0.5～1.6	1	2ヶ所、中世層まで		
125		30		樹木移植	BB14	1.6	0.65～0.8	GL-1.4mに灰色粘質土層（古代）		
126		31		旧変電室基礎解体	BB14	1.05	0.45～0.75	12ヶ所掘削、中世層まで		
130	2002	29	農学部校舎改修：電気設備		BE15	1.8	1.5	3ヶ所、古代・古墳層まで	71	
131		34	本部棟新設	排水樹・管路	BC13～15	1.2～2.5	0.7～1.2	突帯文土器・石器多数、近世溝、弥生溝		
132		51		雨水排水樹・管路	BB13	1.57	0.8	中世・古代・古墳層		
133		54		外灯	BB13・BD14	0.95～1.9	0.8	2ヶ所で中世層と古代層まで、GL-1.3mで黒色土		

総合 番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献		
134	2002	55	一般教育棟B棟外灯設置工事		BC07・09	1.0～1.26	0.95	4ヶ所、中世層まで	71		
135		57	創立五十周年記念館新営 汚水排水		BB～BC14～15	1.0～2.3	0.85～1.0	一部黒色土上面まで			
136		1	創立五十周年記念館新営 雨水排水槽・管理設		BB13～15	1.3	0.7～0.8	中世層まで			
137		4	総合研究棟新営機械設備ガス配管埋設		AX06	1.4	0.9	古代層？まで			
138	2003	6	旧事務局庁舎改修電気設備工事		BC15	2.43	0.85	GL-1.9mで黒色土、GL-2.1mで縄文基盤層	74		
139		7	農学部総合研究棟改修電気設備工事		BB、BC18	1.7	0.7	GL-1.2m前後で黒色土層、GL-1.5～1.6m前後で縄文後期基盤層			
140		8	総合研究棟新営その他工	雨水排水	AX06～BA06	1.7	0.7～0.8	標高3.3～3.4mで黒色土、弥生～古代：東西溝多数、近世・近代：東西溝・畦畔			
141		14		電気設備工事（外灯）	AW、AX06、07	1.4	－	中世層まで			
142		15	総合研究棟新営その他工事：排水		AW～AX06～07	0.5～2.5	1.6	樹で一部縄文基盤層まで掘削、弥生溝			
143		17	旧事務局庁舎改修：外部給水・消火配管		BC～BD15	2.75	1.1	樹で、縄文基盤層			
144		21-1	公共下水道接続工事	No.1区間 農学部合併処理槽	BG～BH13	1.8	0.9	縄文基盤層まで			
145		21-2		No.2区間 体育館東～武道場西	BE～BG10	1.95～2.25	0.8～0.9	樹で縄文基盤層、管路で弥生早・前期まで、弥生溝、縄文土坑			
146		21-4		No.4区間 文・法・経2号館西	AZ16	2.45	1.5	縄文基盤層まで、弥生溝			
147		21-5		No.5区間 理学部	BA10	1.9	0.7	中世頃の庭主川を確認			
148		21-6		No.6区間 農学部4号館東	BG22	1.5～1.9	0.9～1.4	縄文基盤層まで、弥生～古墳初頭：ピット、近代畦畔状遺構			
149		21-7		No.7区間 津島宿泊所	BI16	1.15～1.3	0.8	中世層まで			
150		21-8		No.8区間 南宿舍	BI15	2.0～2.45	1.1	縄文基盤層まで			
151		2004	1	公共下水道接続工事	留学生等宿泊施設	BB～BD26	1.22～1.68	1.0		中世層まで	81
152			6	津島キャンパス環境整備：留学生センター西	BB9・10	0.5～1.15	0.4～0.6	弥生後期：包含層・遺構、礫層			
153		2005	3	総合研究棟改修	仮設電柱	AV08	1.5	0.9		青灰～白灰色の粘質土、黒色土は確認されず	83
154	5			アース板	AW09	1.8	－	縄文基盤層まで、黒色土			
155	9		キャンパス環境整備（門扉改修等）	BE02、BG07	1.0～1.3	0.7	～1mで中世層、近世畦畔				
156	13		プール改修（排水管改修）工事	BC～BE03、BB・BC02	0.75～2.4	0.8～1.3	縄文基盤層まで、黒色土、弥生～古墳：溝多数、近世土坑、近代：大畦畔・溝				
157		14	サッカー場防球ネット設置工事	BB・BC04	2.0～2.2	－	オーガーによる掘削、一部で黒色土				
158	2006	2	総合研究棟改修工事：耐震工事に伴う支障物撤去・PC耐震柱基礎掘削		AX10	1.4～1.6	1.0	中世層まで、近世：南北方向の溝	88		
159		3	教育学部公共下水道接続工事		AZ～BA02～04	1.3～2.3	0.7～1.0	樹：深さ2.3m、配管：深さ1.05～1.92m、黒色土or基盤層まで、東西方向の溝			
160		5	プール改修配管接続工事		BA・BB02、BC02	1.7	0.7～0.8	黒色土層or基盤層まで、古墳時代頃の溝状遺構			
161		11	総合研究棟：耐震工事に伴うPC耐震柱基礎掘削		AX08～09	1.8	－	古墳～弥生時代層			
162	2007	13	農学部2号館南電柱移設		BF16	2.0	－	中世層まで	92		
164		4	公共下水道接続工事（理学部他）		BA12	2.0	0.8～0.9	GL-1.6mで黒色土、弥生時代溝			
165		8	総合研究棟改修	外灯基礎及び管路	AV・AX07・08	1.4～1.7	1.2	近世～中世層			
166		10		外構柵・配管（東半部）	AW07・08	1.1～1.4	0.9	近世層、土坑1基			
167		13	インキュベーション施設外構配管		BA～BC20	1.2～1.4	0.6～0.8	縄文時代～近代層、中世・近代の溝			
169		7	理学部ヘリウム液化装置基礎工事：基礎杭設置	AZ09	4	－	黒色土なし、GL-4m以下で礫層				
170		21	総合研究棟（教育系）改修	電気工事：建柱	AY03・AZ03・BA03	2	－	3地点掘削、北地点で黒色土無し			
171		22		電気工事：接地極埋設	AY04	1.7～1.78	－	古代層下に溝or河道の砂層			
172		26		機械工事：都市ガス	AZ03	1.2	－	GL-0.95mで黒色土			
173		2008	28	KDDI無線基地局新設工事：建柱		BB12	1.8	0.8～1.05		灰褐色砂質土層まで、黒色土未確認	95
174	32		プール系統水道メーターボックス取設工事		BB04	0.9～1.5	－	中世層（？）まで			
175	33		南宿舍電柱設置工事		BJ17	2	－	GL-1.2～1.5mで黒色土			
176	39		大学生協東福利施設新築	ガス管	AX04	0.85～1.21	1	中世層まで			
177	40			外灯移設	AX05	1.1～1.2	0.68～0.95	2地点掘削、古代層まで			
178	42		新技術センター公共下水道接続工事		AW00～01	0.85～1.75	0.7	中世～近代溝4条（南北里境か）、黒色土上面まで			
179	2009		43	教育学部体育館他改修	動物室	AY01	0.85	0.85	黒色土上面で弥生～古墳時代の水田畦畔	102	
180		44	仮電柱設置		AY03、BA03	1.2～1.7	－	2地点掘削、北：中世層まで、南：東西溝			
181		49	接地極埋設		AY02	0.3～1.7	－	古代層まで			
182		52	大学会館他改修工事：一般教育講義棟ガス設備		BB10～11	0.7～1.2	0.55	GL-1.0m以下で礫層、土坑1基、溝？1条			
183		53	工学部屋外ガス配管改修工事		AV04～06、AW04	0.8～1.48	0.8～1.1	一部で中世層まで			
187	2009	6	総合教育棟（共通教育）改修工事：高圧ケーブル		BE～BF04～08	1.3	－	2箇所、中世層・近世層まで	102		
188		14	環境整備（施設誘導案内板）新設工事		BB10	0.8～0.95	0.6	保健管理センター北東で弥生？遺構埋土			
189		16	工学部21号館（動物飼育室）改修	ガス管	AU06	0.8～0.9	－	一部弥生？包含層			
		17		排水管	AU06・07	0.65～0.922	1.25	北東部で河道			
	2009	21①	南北道路信号機付け替え	西門南東	BB12	1.8	0.58～1.25	中世～弥生層まで、底面で黒色土	102		
		22		西門北東	BA12	2.0		縄文層まで、黒色土確認			
		23		西門北西	BA13	2.05		縄文層まで、黒色土確認			
		24		事務局前北東	BD12	1.95		縄文層まで			
	2009	25	総合研究棟Ⅱ期（教育系）改修	ガス管	AY-AZ02-03	0.8	－	弥生層確認	102		
		27		電気設備：アース埋設	AY01・AZ03	1.65	0.4	縄文層まで、黒色土・中世以前の遺構			
						電気設備：配管		0.8		弥生包含層・遺構	
						電気設備：外灯		0.8～1.3		黒色土まで	
191		29	屋外排水	AY02-03	1.15	1	黒色土・弥生遺構				

総合 番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
191		30	総合研究棟Ⅱ期（教育系） 改修	屋外排水：管路	AZ00-02	管路 0.8～0.9	0.7	包含層・畦畔・小溝	
				屋外排水：柵		柵1.2・1.7		縄文層まで、北：黒色土、南：黒色土無し	
		32		電気設備：アース埋設	AZ00・AY-AZ01	1.7	0.6	縄文層まで、黒色土	
				電気設備：配管		0.8～0.9		包含層・土師器小片	
電気設備：外灯	1.3	既設土内							
192	2009	42	文法経ボイラー用煙突撤去工事	AX16	2.5	1.5	縄文層まで、弥生中・後期溝1条	102	
193		48	総合研究棟（薬学系）改修	電気設備：配管	BB16・BC17	1.45	1.05	近世層、近代溝	
電気設備：アース板				1.50～1.54		包含層（中世？）			
194		54	環境理工学部公共下水道接続工事		AU03	2.3	0.9	弥生～古墳層まで、近代東西畦畔1条	
						2.4		黒色土上面まで	
195	55	薬学部西水道管位置確認工事	BC18	2.7	0.55	<岡山市教育委員会対応> 縄文層まで、黒色土			
200		8	外灯整備工事	教育学部	AZ06	1.1	0.7	黒色土	
17		創立五十周年記念館		BB14・15	1.1～1.6	1.15	近世層、近代石組用水路		
202		23	総合研究棟（薬学系）に伴う支障管移設	BB・BC17	0.87～1.4	0.8	古代層		
203		26	テニスコート陥没復旧工事	BG11	1.9	－	既設内、砲弾他<岡山西署回収>		
204		34	薬学部本館改修工事	電気設備：管路	BC・BD18	0.7～1.28	1.1	中世層	
				電気設備：ハンドホール		2		縄文時代層、近世・近代：里境溝	
205		35		外灯設置：管路	BB17	0.63～0.74	0.85	近世・近代層	
				外灯設置：基礎		1.08～1.34		中世層	
206		36	農学部水道管復旧工事（緊急対応）	BF15	1.1	－	既設内		
207		37	国際交流会館	排水柵掘削工事	AU・AV13・14	2.2～2.5	－	4箇所、中世上面から0.55m掘削、弥生後期層	
209	2011	1	文法経フェンス工事		AW17、AX17、AY17、AZ16	1.1～2.0	1.0～1.6	近代の土塁、水路	106
		AZ17			0.8	－	門跡・陸軍建物基礎		
210		8	津島線配水管布設工事	BA10	1.3	0.6	中世層まで、近世・近代溝確認		
211		9		BA08	1.5	0.6	中世層まで、近代畦畔・溝		
212	12	教育学部講義棟トイレ改修工事<屋外排水>	AZ04	0.9～1.5	0.55	古代・近世・近代遺構			
214	2012	9	美しい学都整備	防球ネットポール	BB06～07	3.0	1.0	基盤層まで	111
215		11	農学部周辺排水管整備	柵・管路	BE～BF13	1.6	1.0～1.3	基盤層まで	

＜鹿田地区：鹿田遺跡＞

総合 番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
3	1983	—	外来診療棟蒸気配管埋設		AO～AW22	1.3	—	弥生後期：土器・分銅形土製品、貝集積	1
7	1985	6	外来診療棟関係屋外排水管理設		AW～BH23、 BH・BI24	1.3～1.7	0.7～1.3	中世・弥生：遺構・遺物	5
8		12	基幹環境整備緑化工事：電気配線ハンドホール掘削		AG31、AG24、 AF23	1.2～1.7	0.9～1.3	3ヶ所、中世包含層・ビット	
9	1986	9	記念館東側污水管改修工事		BI～BN4	0.8～1.3	0.8	中世包含層、土器	6
11		24	護岸及び囲障工事		CL～CR12、CR～ CX13、CX～DA14	2	0.8～1.0	中世包含層	
14	1987	8	管理棟新営に伴う基礎杭確認		BC37	2.5		弥生時代：包含層・遺構	8
15	1989	46	旧管理棟跡地環境整備：外灯基礎		CE30・37・44、 CJ・CK45、CL28・29	1.2～1.5	0.7～1.0	2ヶ所、中世層	14
18	1992	29	アイソトープセンターL形側溝・集水橋		BW71	1.4～1.5	0.9	中世溝1条	25
19		41	テニスコート脇電柱埋設		CI73	1.2	1	古代土器1点	
20	1994	5	護岸改修工事		DH60～62	1.5	0.8	近世層以下は遺構埋土か、溝3条・ビット9基	33
21	1995	11	鹿田地区基幹整備	附属病院連絡通路新設	BG・BI18	1.5	1	造成土以下に茶褐色土・青灰色粘質土層、 遺物なし	38
22		14		液酸タンク設置	CD07・08	2.3	1	中世2面、溝3条、溝内から中世・古代土師 器	
23		17		液酸タンクU字溝埋設	CD08～CC11	1.23	0.85	包含層、中世土器、攪乱で区間全長の1/2 程度破壊	
24		23	防球ネット取設工事		DF56～67	3	0.8	径60cmを12ヶ所、内4ヶ所で土器片・石器、 調査区西寄り：GL-2m以下は旧河道か	
30	1998	36	校舎新営に伴う仮設電柱工事		BV73、CN78	1.2	1	中世層まで	53
33	1999	15	研究棟新営	給排水柵・管路	BV65～71	1.2～1.4	0.9	中世層まで	56
34		18		検水槽	BU65	2.2	1.1	面積8.2㎡、近世溝、中世：溝・ビット	
35		27	基幹整備（電気設備）：地中配管		BY42・43、 BI43・44	1.25～1.45	0.45～0.5	2ヶ所、中世層まで、時期不明遺構	
36		41	病棟新営	共同溝解体	CF21～28、 CF～CL28、 CD～CF28～33	1.7	—	面積18㎡、鹿田11次調査南側で中世ビット	
37		46		汚水柵・管路	CN46～DE49	2.3	1.2	古墳時代：井戸1基・土坑1基、中世溝等	
38		47	グラウンド防球ネットポール		CM・CN・CP・CR・ CT58、CV・DA・ DC・DD・DF59	2.0～2.3	—	11ヶ所、南側6ヶ所：河道、7～10ヶ所：微 高地、最北端：河道	
39		48	病棟新営	汚水検水柵	BT51	2	1	古墳時代層まで	

総合 番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
41	2000	25	病棟新営	管路・雨水桝	CD41～CN45	1.6～1.8	－	溝か？	61
42		26	電柱及び外灯の埋設工事		CN15・21・27、 CO31・42、CS45、 DV45	1.6	－	7ヶ所、灰白色土層・淡褐色砂質土層・暗褐色砂質土層、微高地部か	
43		29	医学部ガス配管切り離し用バルブ取付工事		DI27	0.8～1.15	0.7	GL-0.85mで黄灰色粘質土	
44	2000	47	鹿田団地南側用水路境界擁壁改修		DG～DJ28～67	2.1～2.3	1.3～1.5	幅120mの壁面調査、古代の遺構・河道	61
45	2001	37	総合教育研究棟新営に伴う機械設置工事		BR～CA43、CA43 ～55、CA44～ CL45、BR～CA55	1.65	0.7～0.9	中世層まで、中世土器多数出土地点あり	66
47	2002	10	鹿田団地ガス配管埋設工事		CH11～CN22	1.0～1.3	0.87	中世層まで	71
48		19			BT・BU11	0.5～1.8	－	2ヶ所、GL-1.22mで中世or古代層	
49		22	エネルギーセンター棟新営	共同溝排水管	CQ41～42	1.5	－	1ヶ所、包含層まで	
50		25		外灯	CG41、CO34、 CF43、CO38	1.47～1.66	－	4ヶ所、中世層まで	
51		27		外溝	CV36～45	0.9～1.9	0.9	中世：井戸・柱穴・溝	
52		36		総合教育研究棟新営その他工事	BI～BS45～53	1.85～2.0	0.8～1.0	5ヶ所、中世層まで	
53		52	本部棟新営その他工事：植栽移植		DC67	1.25	－	中世層	
54		56	旧混合病棟グリーストラップ改修		BG18	1.68	－	底面で弥生～古墳層、土器	
55	2003	5	総合教育研究棟	屋外排水	BS～BZ45、CA～ CO46、CO45	1.7	0.7～1.0	弥生中期?包含層まで、近世土坑、中世ビット多数、低地部確認	74
56		9		外構工事（雨水・汚水・実験排水）	BL～BS45～53	0.8～1.75	0.7～0.9	一部弥生中期包含層まで、古墳時代溝、中世井戸、近世土坑等	
57		10		給水配管埋設	BR～BS50～54	1.33	0.8	一部で中世層まで	
58		13		外構工事（外灯）	BR53、BL54	1.4	0.8	中世層まで	
60	2004	3	医病構内支障ガス配管替工事		AF16、AF～AJ17、 AJ9～16	1.0～1.9	0.7～0.8	接続部：近世・近代水田層、中世畦畔、弥生～古墳河道（砂層）	81
61		5	医病構内支障給水管配管替工事		AE4～16、AF～ AI16 AI9～15、 AJ～AO9	0.9～1.9	0.85	桝：中世?～近代畦畔、弥生～古墳河道（砂層）	
62	2005	3	医学部変電所ビット周辺高圧ケーブル設置工事		DH～DJ18、DJ19	1.1～2.5	0.7～1.1	一部で弥生～近代層	83
63	2006	6	エネルギーセンター棟新営に伴う工事		CT～CU45	2.5	0.9	鹿田第12次調査地点と重複	88
67	2007	4	基幹環境整備（道路等）工事		CC13～20、 CD13～20	1.2～2.2	0.9～1.2	基盤層まで、中世：東西・南北溝	92
68		5	中診棟屋上防水改修その他工事		AS03～07、AV～ AX07、AY・BB09	0.6～0.9 1.4、1.8	0.7	中世東西溝、古墳時代南北溝	
69		7	中央診療棟新営：ガス管切断工事		BT11	1.28	0.5	中世溝	
70		10	基幹整備（電気設備）工事		CO42、CV36	1.3～1.65	1.3	中世層まで、遺構	
71		11	環境整備（道路等）工事	ガス配管1	CG08、CF09・10、 CG・CH1、CI11	0.85～1.3	0.9	中世：井戸（or墓）・ビット・溝	92
72		17	環境整備（道路等）工事	ガス配管2	CL12、CM13、 CN14・15	1.0～1.2	0.4	中世層、中世遺構	
73		27	総合研究棟（医学系）新営その他工事		BT・BU65	1.35	1	中世層	
74		28	用水路改修工事		CJ7～CP12	1.7～2.0	0.6～0.8	包含層及び枝川東側に微高地	
75	2008	30	高エネルギー治療室改修工事		BE33	1.4	0.6～0.7	中世～近代：畦畔・溝、弥生後期土器	95
77		5	基幹整備（西病棟とりこ	現場打ち排水桝	BT24～25	0.98～1.4	0.7	弥生基盤層まで	
78		6	わし他）工事	ライトコート工事	BQ24、BR24	0.75	0.5	湿地性堆積層	
79		7	基礎医学棟一部とりこわしに伴う支障ガス配管移設工事		AO53～54、AL54 ～AO54、AL54～ 61、AL62～AP65	0.76～1.0	0.5	近世層まで、土坑2基	
83	2009	3	鹿田遺跡第20A次調査矢板打ち		CB30、CB40	0.8～0.9	0.7	中世層まで	102
90	2010	6	高精度放射線治療棟屋外排水工工事		BH32～35、BI～ BL35	0.75～0.9	0.6	中～近世の遺構？	105
91		7	中央診療棟新営：アース極設置工事		BR14～16・19・22	0.9～1.8	1.1	包含層	
92		17	外灯整備工事：研究棟南駐車場		BY46～50	1.2	1.2	遺構埋土？	
93		22	保育所改修工事		CV～CY28・29	1.6	1.15	弥生基盤層まで	
95	2011	4	立体駐車場新営<配管>		CN45～49、 CO～DF49、 CW～DD44、 DD45、DD～DF46、 DF～DG47～49	0.7～2.38	0.55～1.0	弥生時代土坑、古代土坑、中世溝、近世土坑・溝・畦畔	106
98	2012	9	医歯薬融合棟支障配管	ポンプ槽（南）	BL～BM58	2.0	1.2	中世溝・土坑？、弥生基盤層まで	111
99		13	講義実習棟改修	検水槽	BU～BV66	1.6	1.1	中世以前（灰茶褐色砂質土）まで	

<東山地区>

総合 番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
1	1983	－	附属中学校新営		－	4.0～5.0	－	シルト層中	1
2	1997	29	附属小・中学校他因障改修工事		－	1.2	0.79	GL-1.1mで近世水田層、溝1条	50

<三朝地区：福呂遺跡>

総合 番号	年度	番号	工事名称／細目		構内座標	掘削深度 (m)	造成土厚 (m)	概 要	文献
4	1997	18	実験研究棟新営に伴う電気埋設管路工事		－	1	－	GL-1.0mで中世包含層は東に向かい上昇	50

表12 埋蔵文化財調査研究センター収蔵遺物概要 (2014年3月現在)

種類	遺跡名 (地区名)	調査名・地区名	箱数 (1箱:約30リットル)							特殊遺物ほか	文献
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*		
発掘	鹿田	第1次調査: 外来診療棟	546.5	503	6	20	0.5	1	16	丹塗り土師器・白磁・瓦器・木製短甲・人面線刻土器・ガラス滓・馬骨・等	7
		第2次調査: NMR-CT室	106.4	96	0.4	4.5	0.5	1	4	黒色土器・田舟・木簡・墨書土器・転用硯・円面硯等	
		第3次調査: 医短校舎	58.6	36	0.3	18	0.3		4	石帯	10
		第4次調査: 医短配管	4	2	0.3	0.5	0.2		1	古代土器・鹿角製品	
		第5次調査: 管理棟	101.2	88	2.5	6	1.5	0.2	3	木器・炭化種子・牛頭骨・焼き印付き井戸枠	24
		第6次調査: RI総合センター	62	59	0.5	1	1.5			青銅製碗	40
		第7次調査: 基礎医学棟	77.5	73	1	1.3	0.2	1	1	猿形木製品	85
		第8次調査: RI治療棟	10	10						備前焼碗・瓦器碗・播磨産碗	
		第9次調査: 病棟	120.1	96	0.1	13		9	2	木簡3点	56
		第10次調査: 共同溝	2	2						古代土器・杭	56
		第11次調査: 病棟	74	66		4		2	2	木簡1点	56
		第12次調査: エネルギーセンター	147	77	1	54			15	近世漆塗り櫛・籠・須恵器壺	61
		第13次調査: 総合教育研究棟	269	229	24	10			6	曲物	98
		第14次調査: 病棟	66.2	55	1	2	0.2	1	7	木簡・瓦器碗	74
		第15次調査: 総合教育研究棟	4	3					1	—	98
		第16次調査: 立体駐車場	1	1						—	81
		第17次調査: 総合研究棟	111.2	68	4	8	0.2	1	30	—	87
		第18次調査: 中央診療棟 (本体)	155.5	116	19	18	0.5		2	—	92
		第18次調査: 中央診療棟 (その他)	4	2					2	猫形木製品、近世護岸木材	92
		第19次調査: 歯学部渡り廊下	225	145	1	4			75	壺棺、蹄脚硯、貝	95
		第20次調査 (A・B地点): 中央診療棟	296	148	68	62		6	12	—	102
		第20次調査 (C・D地点): 中央診療棟	86.1	55	16	7	1	0.1	7	—	105
		第21次調査: 環境整備	10.1	4	1	3		0.1	2	陽物形木製品	105
		第22次調査: 地域医療支援センター	175	146	3	25		1		—	106
		第23次調査: Jホール	33	30		1			2	—	111
		第24次調査: 医歯薬融合棟	105	52	4	21			27	絵馬 (猿狗曳・牛)	111
	津島岡大	第1次調査: NP-1	5	0.5	0.5	4				—	3
		第2次調査: 農学部合併処理槽他	15.5	12	1.5				2	突帯文土器・弥生前期土器	4
		第3次調査: 男子学生寮	59	48	1.5	2	4.5		3	縄文後期土器・突帯文土器・石製指輪・蛇頭状土器片・鎌状石器・堅果類・種子	19
		第4次調査: 屋内運動場	1	1						—	6
		第5次調査: 大学院自然科学研究科棟	85	71	3	1	8		2	縄文後期: 土器・耳栓・櫛・堅果類・種子	27
		第6次調査: 生物応用工学科棟	53	36	1	9	6		1	古代土器・人形木器・編み物、弥生前期人形土製品・堅果類	35
		第7次調査: 情報工学科棟	13.5	10	0.5	1			2	—	
		第8次調査: 遺伝子実験施設	11.5	11	0.5					—	32
		第9次調査: 生体機能応用工学科	42.5	35	2.5	3	2			堅果類・種子・縄文後期土器	47
		第10次調査: 健康管理センター	86	78	1	7				分銅形土製品・鍛冶関連、器台	64
		第11次調査: 総合情報処理センター	4.5	3	0.5				1	—	36
		第12次調査: 図書館	60.2	38	1	20	0.2		1	弥生木製農耕具・鎧	64
		第13次調査: 福利厚生施設北	12.5	12	0.5					—	41
		第14次調査: 福利厚生施設南	12.2	11	0.2				1	—	46
		第15次調査: サテライトベンチャービジネスラボラトリー	38	15	2	20			1	縄文後期耳栓・編み物、堅果類	72
		第16次調査: 動物実験棟	2.3	0.3					2	—	44
		第17次調査: 環境理工学部校舎	74	63	11					縄文後期土器	77
		第18次調査: 南福利ポンプ槽	0.2	0.2						—	53
		第19次調査: コラボレーションセンター	28	21	1	4		1	1	炉壁・櫛羽口	65
		第20次調査: 環境理工学部ポンプ槽	0.2	0.2						—	53
		第21次調査: 工学部エレベーター	7	5	2					縄文中期土器・横長削器	65
		第22次調査: 環境理工学部校舎	33.9	26	4	3	0.2	0.2	0.5	古代掘部材	77
		第23次調査: 総合研究棟	81	20	0.5	60	0.5			縄文後期杭、石棒	80
		第24次調査: 総合研究棟渡り廊下	2.1	1	0.1	1				—	80
		第25次調査: 農学部散水施設	0.3	0.1		0.2				—	61
		第26次調査: 事務局本部棟	25	17	2	5			1	—	76
		第27次調査: 創立五十周年記念館	18.2	14	1			0.2	3	縄文後期土器 (中津)	68
		第28次調査: 自然科学系総合研究棟	15.2	13	2			0.2		—	87
		第29次調査: 農学部共同溝	1.1	1	0.1					—	71
		第30次調査: インキュベータ	23.3	5	0.1	18			0.2	—	93
		第31次調査: 大学生協東エリア店舗	5.7	5	0.5			0.2		—	95
		第32次調査: 教育学部剣道場	17	12	3				2	編み物	100
		第33次調査: 薬学部講義棟	12.6	11	1.5			0.1		—	105
		第34次調査: 国際交流会館	1	1						—	105
		第35次調査: 図書館 (増築)	1	1						—	本書
	福呂	第1次調査: 実験研究棟	7	6	1					縄文早期土器	55
		第2次調査: 実験研究棟スロープ	3.1	3				0.1			55

種類	遺跡名 (地区名)	調査名・地区名	箱 数 (1箱:約30リットル)							特殊遺物ほか	文献
			総数	土器	石器	木器*	種子*	その他	サンプル*		
試掘 確認	鹿田	鹿田駐車場 (1985)	1	1						—	5
		鹿田アイソトープ総合センター (1990)	1	1						—	18
		地域医療総合支援センター (2010)	1	1						—	105
	津島岡大	男子学生寮 (1985)	1	0.7	0.3					—	5
		大学院自然科学研究科棟 (1986)	1	1						—	6
		理学部身障者用エレベーター (1987)	0.3	0.3						—	8
		教養部身障者用エレベーター (1987)	0.7	0.7						—	8
		工学部校舎 (1988)	1	1						—	11
		動物実験飼育棟・遺伝子実験棟 (1988)	0.7	0.7						—	11
		国際交流会館 (1988)	0.3	0.3						—	11
		大学院自然科学科合併処理槽 (1989)	0.2	0.2						—	14
		学生合宿所 (1989)	0.4	0.2					0.2	—	14
		教育学部身障者用エレベーター (1989)	0.3	0.3						—	14
		図書館 (1989)	1	1						—	14
		学生合宿所ポンプ槽 (1990)	0.4	0.4						—	18
		福利厚生施設 (1990)	0.5	0.5						—	18
		農・薬学部動物実験施設 (1993)	0.1	0.1						—	33
		環境理工学部校舎 (1995)	0.1	0.1						—	53
		システム工学科棟 (1998)	0.1	0.1						—	53
		正課外活動施設 (2012)	2	0					2	—	111
	(土生)	外国人宿舍 (1987)	1	1						—	8
	(倉敷)	資源生物科学研究所 (1990)	0.1	0.1						—	18
	(東山)	附属小学校校舎 (2006)	1.1	0.1					1	—	87
		附属中学校体育館 (2013)	1	0					1	—	本書
立 会		1983年度	2	2						分銅形土製品	1
		1984年度	1	1						—	2
		1985年度	1	1						—	3
		1986年度	0.5	0.5						—	6
		1987年度	0.5	0.5						—	8
		1991年度・1992年度	0.3	0.3						—	21.25
		1993年度～1999年度	0.8	0.8						—	30.33.38. 44.50.53. 56
		2000年度	3	3						—	61
		2002年度	8.5	2.5	6					弥生早期土器、中世、礎石	71
		2003年度	2	2						—	74
		2004年度	1	1						—	81
		2005年度	1.1	0.1					1	—	83
		2006年度	1.1	0.1					1	—	87
		2007年度	0.5	0.5						—	92
		2008年度	1	1						—	95
		2009年度	0.2	0.2						—	102
		2010年度	4.2	0.2				4		近現代、陸軍関連金属器、電線	105
		2011年度	3	3						弥生後期土器	106
		2012年度	0.5	0.5						—	111
		2013年度	1.5	1.5						—	本書
分布調査		1989年度 三朝・本島	0.3	0.3						—	14
合 計			3759	2803	205	442	28	29	251		

表13 埋蔵文化財調査室刊行物

番号	名	称	発行年月日
1	岡山大学構内遺跡調査研究年報 1	1983年度	1985年 2 月
2	岡山大学構内遺跡調査研究年報 2	1984年度	1985年 3 月
3	岡山大学津島地区小橋法目黒遺跡 (AW14区) の発掘調査	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第 1 集	1985年 5 月
4	岡山大学津島地区構内遺跡発掘調査報告Ⅱ (農学部構内BH13区他)	岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第 2 冊	1986年 3 月
5	岡山大学構内遺跡調査研究年報 3	1985年度	1987年 3 月
6	岡山大学構内遺跡調査研究年報 4	1986年度	1987年10月

表14 埋蔵文化財調査研究センター刊行物 (2014年 3 月まで)

番号	名	称	発行年月日
7	鹿田遺跡Ⅰ	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第 3 冊 (鹿田遺跡第 1 次・2 次調査)	1988年 3 月
8	岡山大学構内遺跡調査研究年報 5	1987年度	1988年10月
9	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報	第 1 号	1988年10月
10	鹿田遺跡Ⅱ	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第 4 冊 (鹿田遺跡第 3 次・4 次調査)	1990年 3 月
11	岡山大学構内遺跡調査研究年報 6	1988年度	1989年10月

番号	名 称	発行年月日
12	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第2号	1989年8月
13	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第3号	1990年2月
14	岡山大学構内遺跡調査研究年報7 1989年度	1990年11月
15	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第4号	1990年7月
16	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第5号	1991年3月
17	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第6号	1991年8月
18	岡山大学構内遺跡調査研究年報8 1990年度	1991年12月
19	津島岡大遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊 (津島岡大遺跡第3次調査)	1992年3月
20	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第7号	1992年3月
21	岡山大学構内遺跡調査研究年報9 1991年度	1992年12月
22	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第8号	1992年8月
23	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第9号	1993年3月
24	鹿田遺跡3 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊 (鹿田遺跡第5次調査)	1993年3月
25	岡山大学構内遺跡調査研究年報10 1992年度	1993年12月
26	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第10号	1993年11月
27	津島岡大遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊 (津島岡大遺跡第5次調査)	1994年3月
28	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第11号	1994年3月
29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第12号	1994年10月
30	岡山大学構内遺跡調査研究年報11 1993年度	1995年2月
31	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第13号	1995年3月
32	津島岡大遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊 (津島岡大遺跡第8次調査)	1995年3月
33	岡山大学構内遺跡調査研究年報12 1994年度	1995年12月
34	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報第14号	1995年10月
35	津島岡大遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊 (津島岡大遺跡第6次・7次調査)	1995年12月
36	津島岡大遺跡7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊 (津島岡大遺跡第11次調査)	1996年2月
37	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第15号	1996年3月
38	岡山大学構内遺跡調査研究年報13 1995年度	1996年10月
39	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第16号	1996年10月
40	鹿田遺跡4 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊 (鹿田遺跡第6次調査)	1997年3月
41	津島岡大遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第12冊 (津島岡大遺跡第13次調査)	1997年3月
42	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第17号	1997年3月
43	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第18号	1997年9月
44	岡山大学構内遺跡調査研究年報14 1996年度	1997年11月
45	今、よみがえる古代 岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの10年	1997年11月
46	津島岡大遺跡9 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第13冊 (津島岡大遺跡第14次調査)	1997年12月
47	津島岡大遺跡10 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊 (津島岡大遺跡第9次調査)	1998年3月
48	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第19号	1998年3月
49	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第20号	1998年10月
50	岡山大学構内遺跡調査研究年報15 1997年度	1999年1月
51	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第21号	1999年3月
52	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第22号	1999年9月
53	岡山大学構内遺跡調査研究年報16 1998年度	2000年1月
54	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第23号	2000年3月
55	福呂遺跡I 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第15冊 (福呂遺跡第1次・2次調査)	2000年3月
56	岡山大学構内遺跡調査研究年報17 1999年度	2000年8月
57	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第24号	2000年9月
58	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター自己評価・外部評価報告書	2000年12月
59	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第25号	2001年3月
60	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第26号	2001年8月
61	岡山大学構内遺跡調査研究年報18 2000年度	2001年10月
62	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第27号	2002年3月
63	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第28号	2002年9月
64	津島岡大遺跡11 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊 (津島岡大遺跡第10次・12次調査)	2003年3月
65	津島岡大遺跡12 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊 (津島岡大遺跡第19次・21次調査)	2003年3月
66	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2001	2003年3月

番号	名 称	発行年月日
67	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第29号	2003年3月
68	津島岡大遺跡13 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊 (津島岡大遺跡第27次調査)	2003年5月
69	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第30号	2003年8月
70	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第31号	2004年2月
71	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2002	2004年3月
72	津島岡大遺跡14 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊 (津島岡大遺跡第15次調査)	2004年3月
73	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第32号	2004年9月
74	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2003	2004年12月
75	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第33号	2005年3月
76	津島岡大遺跡15 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊 (津島岡大遺跡第26次調査)	2005年3月
77	津島岡大遺跡16 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊 (津島岡大遺跡第17次・22次調査)	2005年3月
78	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第34号	2005年10月
79	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第35号	2006年3月
80	津島岡大遺跡17 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊 (津島岡大遺跡第23次・24次調査)	2006年3月
81	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2004	2006年3月
82	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第36号	2006年10月
83	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2005	2007年3月
84	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第37号	2007年3月
85	鹿田遺跡5 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊 (鹿田遺跡第7次・8次調査)	2007年3月
86	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第38号	2007年10月
87	津島岡大遺跡18 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第24冊 (津島岡大遺跡第28次調査)	2008年3月
88	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2006	2008年3月
89	岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの20年 - 自然と人間、地中に埋もれた命の対話 -	2008年3月
90	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第39号	2008年3月
91	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第40号	2008年9月
92	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2007	2008年12月
93	津島岡大遺跡19 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第25冊 (津島岡大遺跡第30次調査)	2009年3月
94	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第41号	2009年3月
95	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2008	2010年2月
96	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第42号	2010年2月
97	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第43号	2010年3月
98	鹿田遺跡6 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊 (鹿田遺跡第13次・15次調査)	2010年8月
99	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第44号	2010年12月
100	津島岡大遺跡20 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第27冊 (津島岡大遺跡第32次調査)	2011年3月
101	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第45号	2011年3月
102	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2009	2011年3月
103	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第46号	2012年11月
104	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第47号	2012年3月
105	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2010	2012年3月
106	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2011	2013年1月
107	鹿田遺跡7 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊 (鹿田遺跡第10次、18次調査B・C地点)	2013年3月
108	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第48号	2012年9月
109	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第49号	2013年3月
110	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第50号	2013年10月
111	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2012	2013年12月
112	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第51号	2013年12月
113	鹿田遺跡8 岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊 (鹿田遺跡第14次調査)	2014年3月

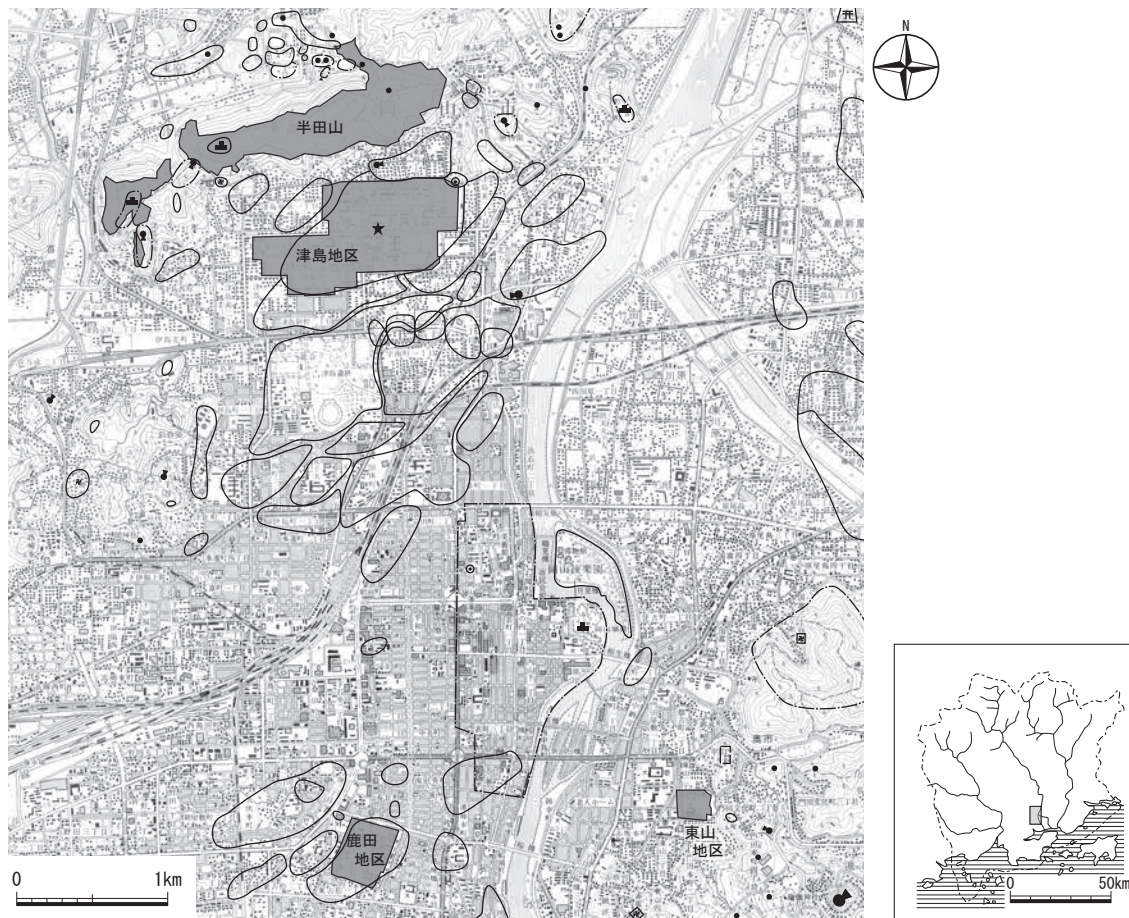


図67 岡山大学の位置と周辺の遺跡分布 (縮尺1/50,000・1/3,750,000)

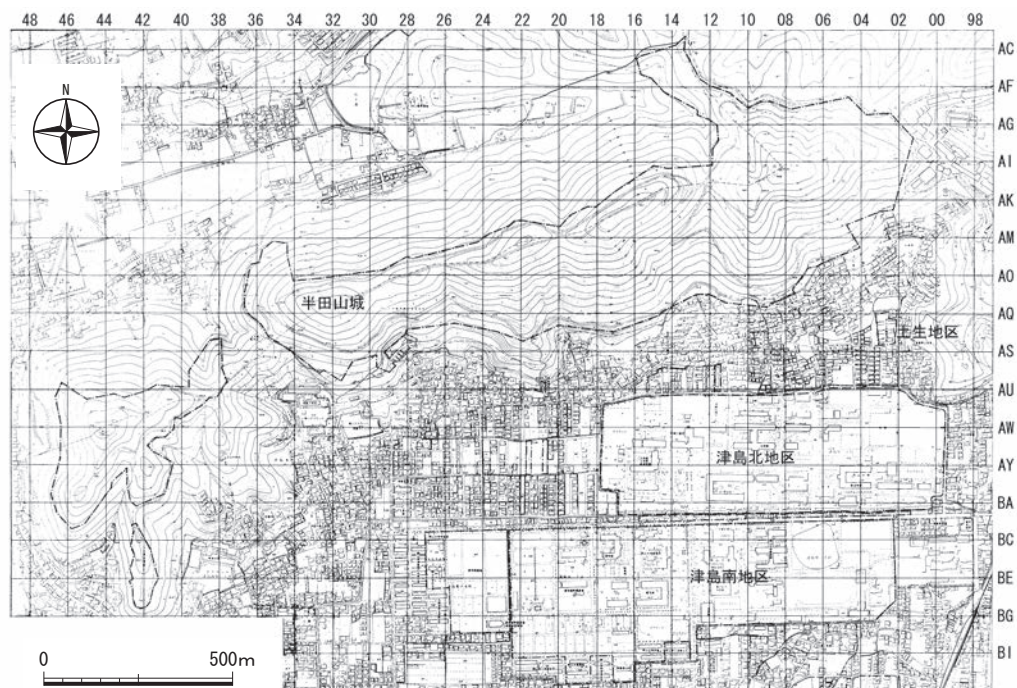


図68 津島地区全体図 (縮尺1/20,000)

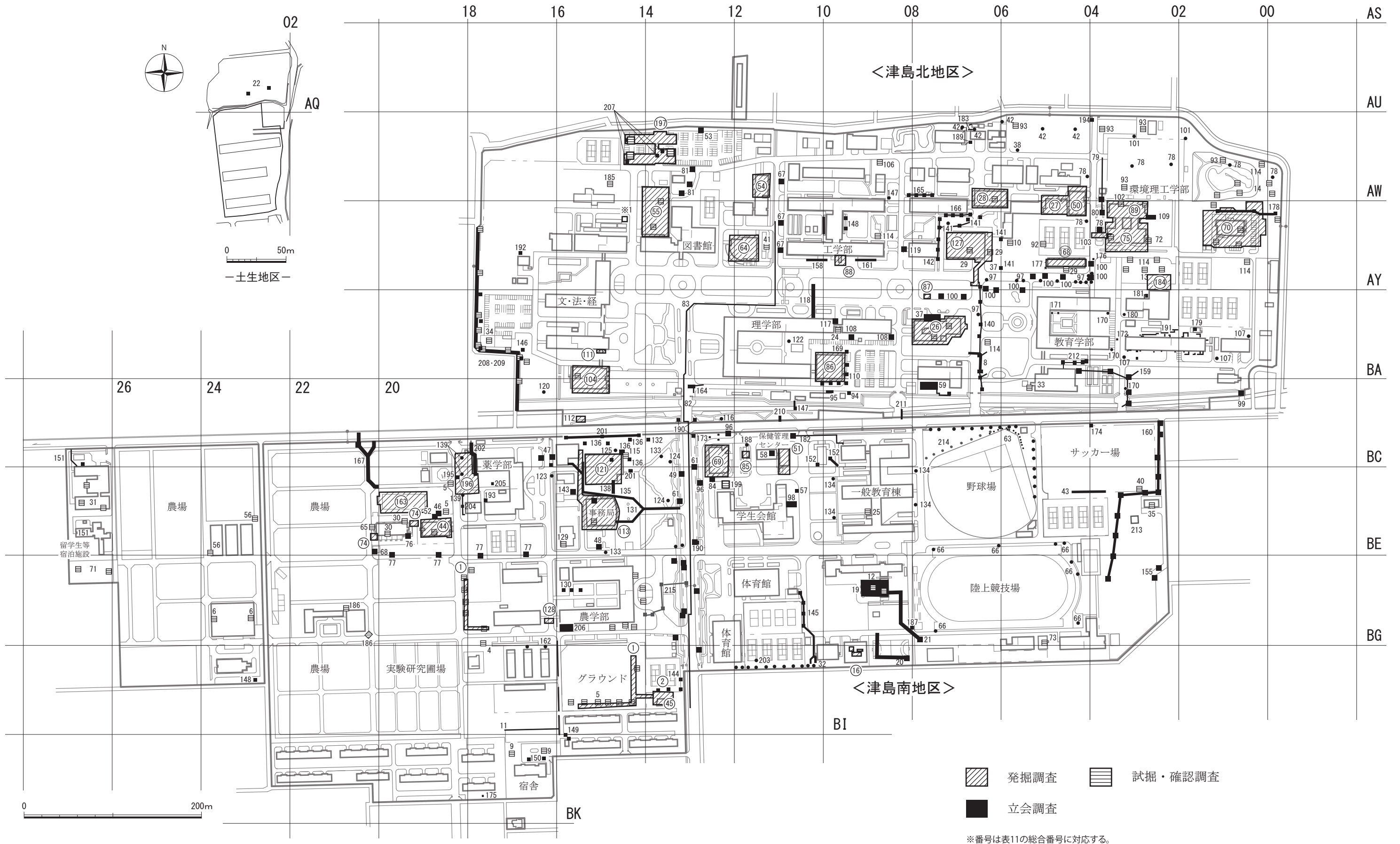


図69 2012年度以前の調査地点【1】—津島地区—（縮尺 津島地区：1/4,000・土生地区：1/3,000）

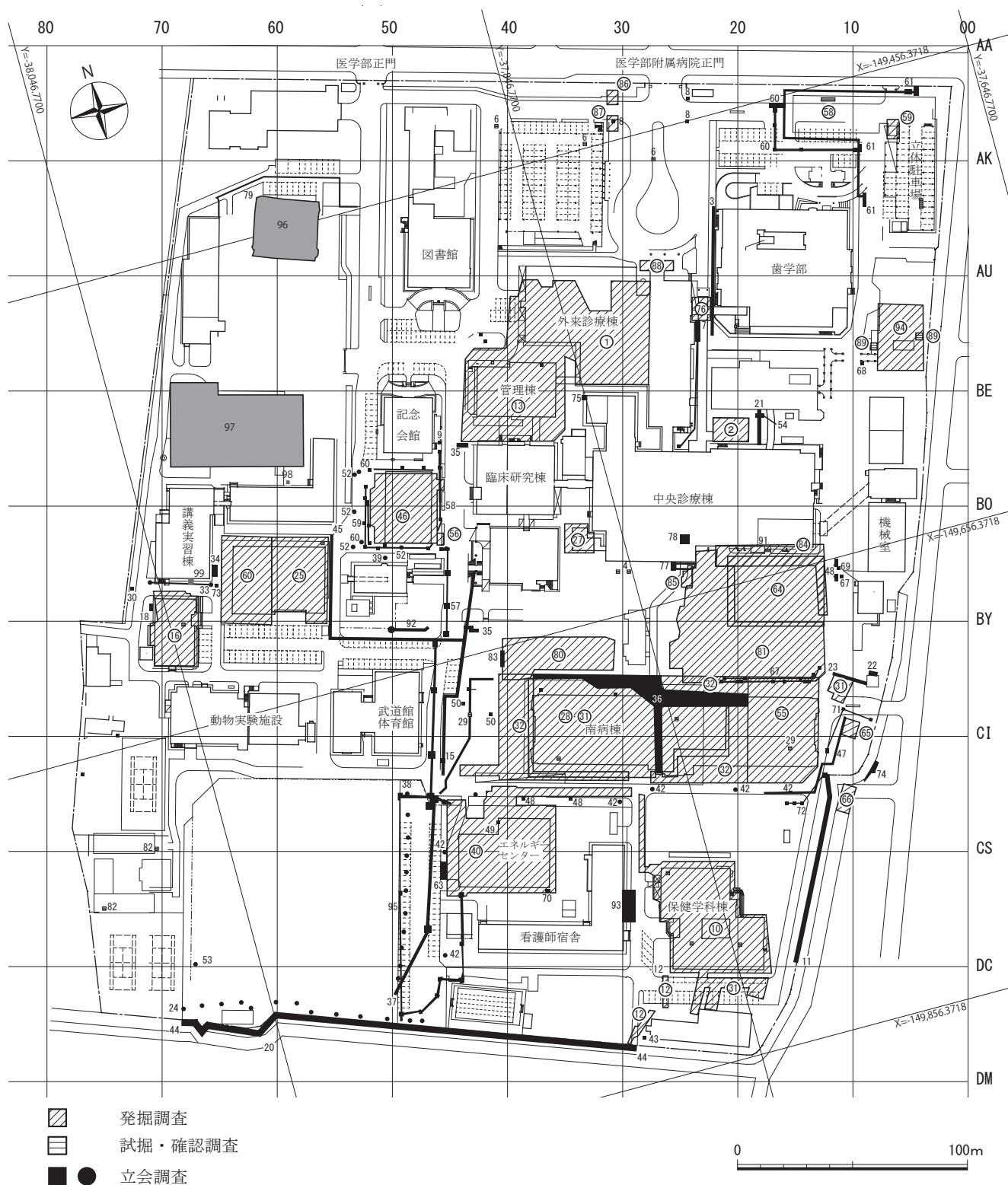


図70 2012年度以前の調査地点【2】－鹿田地区－（縮尺1/2,500）

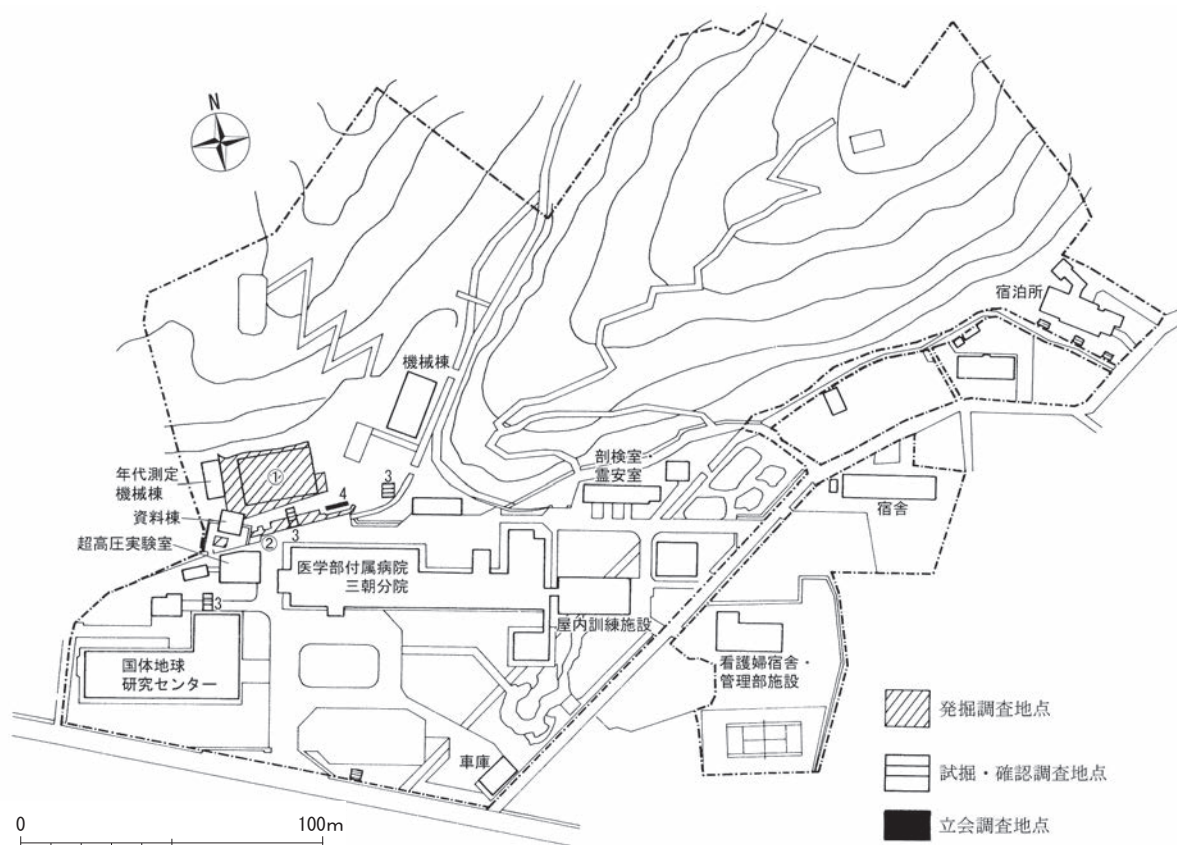


図71 2012年度以前の調査地点【3】
—三朝地区— (縮尺1/2,500)

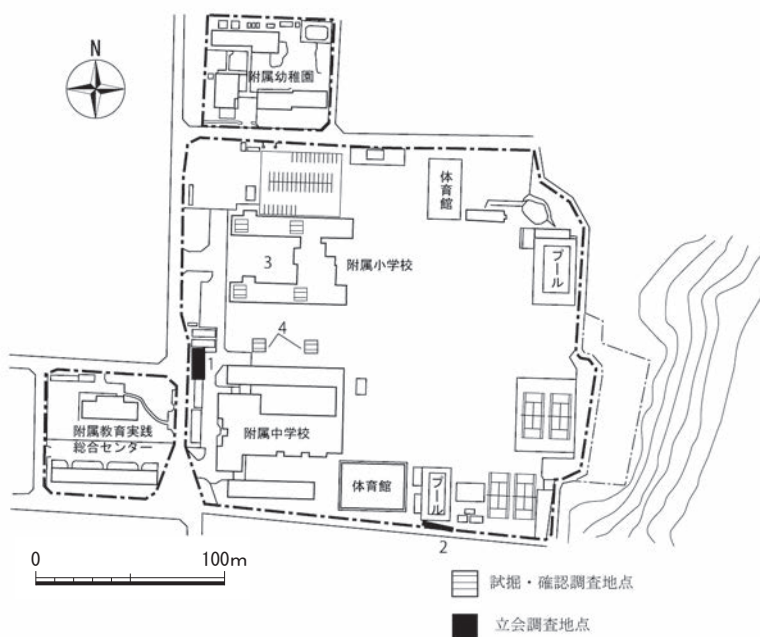


図72 2012年度以前の調査地点【4】
—東山地区— (縮尺1/4,000)

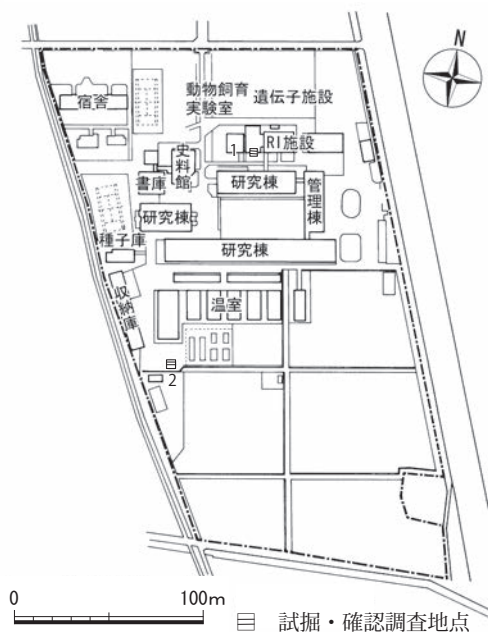


図73 2012年度以前の調査地点【5】
—倉敷地区— (縮尺1/4,000)

Copyright©Archaeological Research Center, Okayama University

Printed in Okayama, Japan

2015年3月6日 印刷

2015年3月6日 発行

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要
2013

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山市北区津島中三丁目1番1号

(086) 251-7290

印刷 友野印刷株式会社



**BULLETIN of
Archaeological Research Center
Okayama University
2013**

Archaeological Research Center, Okayama University
3-1-1 Tsushima-Naka Kita-ku Okayama-city, 700-8530 Japan
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>